



Saitobaru Archaeological Museum of Miyazaki Prefecture



宮崎県立西都原考古博物館

研究紀要

第14号

BULLETIN

Saitobaru Archaeological Museum of Miyazaki Prefecture

Vol.14

藤木 聡	
韓半島における火打金・火打石－東アジアにおける人と火の関係史解明に向けて－	1
高椋浩史・吉村和昭	
六野原地下式横穴墓群出土の古墳時代人骨	11
沖野 誠	
西都原出土の旧石器について	27
東 憲章	
大規模遺跡の保存・管理と活用～西都原古墳群の場合～	33
永友良典	
「博物館経営論」と西都原考古博物館の活動	42
堀田孝博	
西都原古墳群関連写真の新例～堺市博物館所蔵の谷村為海氏撮影写真より～	45
本部裕美	
西都原古墳群における古人骨出土事例の再整理について	57
倉木真由美	
古墳時代玉類の資料紹介－銭亀塚出土の雁木玉・鈴鏡塚出土の四角玉等－	65
谷口晴子	
表採資料から探る、新富町茶碗山窯跡	69
田中敏雄	
文化財活用促進事業「甦れ！古代ロマン復元住居再生事業」 －古代復元住居の屋根葺き替えまでの道程－	75

2018.3

序

本書は、宮崎県立西都原考古博物館の職員が、博物館の日頃の業務や業務外の研究において館内外から収集した資料の調査分析を通して得られた成果や、教育施設としての実践や課題をまとめたものです。

本館では、開館以来、豊かな自然環境と優れた歴史的景観を誇る特別史跡西都原古墳群と一体となったフィールドミュージアムとして、調査・研究・史跡の保存整備・資料の収集・展示・古代生活体験指導・教育普及・国際交流など、幅広い活動を行っています。なかでも、考古資料等の調査研究は、当館の事業を支える重要な活動であり、職員一同、日々研鑽を重ね、今回、その成果を研究紀要として刊行する次第です。多くの方々の御批判や御指導を賜り、博物館活動の一層の充実を図ってまいりたいと考えております。

また、本書には、日頃より本館と共同で資料や遺跡の調査に取り組む大学や研究機関の研究者の方々からも御寄稿いただいております。このような連携は、本館の調査研究の発展の可能性を広げていく上で欠かせないものであり、御多忙にも関わらず、御執筆、いただきました研究者の皆様に深く感謝申し上げます。

最後になりましたが、所載論文等の執筆にあたり、資料や情報の提供に御協力いただきました各関係機関や、日頃より当館の運営に御助力をいただいている多くの方々に、この場をお借りしまして厚くお礼申し上げます。

2018（平成30）年3月16日

宮崎県立西都原考古博物館館長 向井 大蔵

韓半島における火打金・火打石

－東アジアにおける人と火の関係史解明に向けて－

藤木 聡

1 はじめに

韓国各地では近年、発掘調査が数多く実施され、その調査報告書も着実かつ膨大に蓄積されている。本稿で取り上げる鉄製品は、報告例が増加しつつある器種ながら性格不明の鉄製品として報告書に記載されることも多い。これらについて、筆者自身は実見できていない現状であるが、韓半島における民具資料ならびに日本における類品からみて火打金でよいと思われる。火打金は、火打石と打ち付けられることによって火花を発生させ、それを有機質の火口等に移すことで火種とする、火花式発火具である。

韓半島の遺跡から出土した発火具としては、光州広域市の新昌洞遺跡の火鑽棒・火鑽臼(国立光州博物館1997)が有名であり、烏山市の佳水洞遺跡等で同じような木製の摩擦式発火具がみられる(国立伽耶文化財研究所2008)。関連して、青銅器時代の遺跡からは、台石に円形の凹みのある見かけが火鑽臼のような発火石と呼ばれる石器が出土するものの、発火石が実用の発火具であることを示す痕跡は確認されていない(国立大邱博物館2005)。火打金やそれとセットで用いられる火打石等については、民具資料にいくつか情報がある一方で、遺跡出土品についてはこれまでほとんど検討例がない。

本稿では、韓半島における火打金・火打石について、遺跡出土資料や民具、文献等に記載された情報について紹介し、若干の検討・予察を加えるものである。

2 韓半島の遺跡から出土した火打金の紹介

現在、管見の限りでは、韓半島の14遺跡から出土した17点の火打金が報告されている¹⁾。火打金は、統一新羅時代に属す可能性のあるものから朝鮮時代のものまであり、大半は朝鮮時代の墳墓から出土しているほか、住居址・竪穴出土例もある。以下では、個々の火打金の出土状況や資料形状等について、報告書の記載に沿って紹介する。

なお、火打金の出土した遺跡の分布をみると、京畿道周辺および慶尚北道・慶尚南道に偏って存在している(図1)。これが、実態的な分布の偏りを示すものであるのか、あるいは現在の調査報告の上での偶然によるものなのか

は、当該資料について性格不明品でなく火打金としての認知が広まって後の資料増加を受けて改めて検証されるべきであろう。

(1) 霊徳洞遺跡(財京畿文化財研究院2010)

京畿道龍仁市霊徳洞に位置する。1地点の1号性格未詳遺構から火打金1点が出土した。平瓦・陶磁器類・鉄刀子・砥石等が伴っている。1地点の出土遺物の多くは8世紀後半～9世紀前・中頃の統一新羅時代のものとされ、1号性格未詳遺構の一部は瓦の廃棄空間と解釈されている。火打金(図3-1)は、鋒部を欠失した鉄刀子片として報告され、刀子としてみた場合に柄となる部分は丸く巻き込まれ、柄および身の断面は方形であるとされた。長さ8.9cm・高さ1.9cm・厚0.3cm。

(2) 両水里遺跡(財西海文化財研究院2016)

京畿道楊平郡両水里に位置する。高麗時代の1号建物址から、陶器・青磁・丸瓦・平瓦・鉄刀子等とともに、火打金の可能性ある鉄器片が出土した。同資料(図3-2)は、報告書では用途のわからない未詳鉄器とされ、断面方形で、薄い板状であるとされた。残存長4.3cm・高さ2.5cm・厚み0.4cm。火打金であれば、およそ半分を欠失した状況で、全形が不明である。両水里遺跡出土品については、他資料と同じ水準で火打金であると推定するには十分でない。

(3) 玉山里遺跡(財慶尚北道文化財研究院2013)

慶尚北道金泉市龍田里に位置する。三国時代～朝鮮時代の9号竪穴の覆土除去中に不明鉄器2点が出土したと報告され、そのうちの1点が火打金である。火打金(図3-3)は、一端を欠失し、身の断面は台形に近く、端部の断面は角の丸い長方形とされた。長さ8.0cm・高さ1.7cm・厚0.3cm。

(4) 青里遺跡(韓国文化財保護財団1999)

慶尚北道尚州市に位置する。朝鮮時代の7号土壙墓から、青磁広口瓶や青銅盤・匙、鉄刀子等とともに火打金1点が出土した(図2)。同墓壙は、主軸N-50°-Wで長径2.34m・短径0.64mの平面長方形となり、遺物は側壁の中央から一端側に偏って出土した。火打金(図3-4)は、報告書では鏃とされ、断面長方形で、長細く尖った端部が欠失しているとされた。長さ5.9cm・高さ1.3cm。

(5) 山56-1番地遺跡 (財新羅文化遺産研究院2009)

慶尚北道慶州市九於里に位置する。朝鮮時代の13号土壙墓から火打金1点・青銅鈴1点が出土した²⁾。同墓壙は、主軸N-66° -Wで長径2.15m・短径0.75mの平面隅丸長方形であり、火打金と鈴は上部から出土した。火打金(図3-5)は、報告書では、正確な名称や用途不詳ながら衣装箆等の装飾等と推定され、全体が楕円形で上面中央に隙間が空き、リング状の両端が噛み合うような形とされた。長さ7.8cm・高さ3.1cm・厚0.4cm。

(6) 三徳洞遺跡 (財嶺南文化財研究院2012)

大邱広域市三徳洞に位置する。朝鮮時代の11号堅穴から火打金1点が、磁器皿や丸瓦、甕等とともに出土した。火打金(図3-6)は、報告書では用途不明鉄器とされ、両側がU字状のリングで断面が長方形であり、全体に木質の付着が観察されるという。サイズについて、本文中では長さ3.5cm・高さ1.2cm・厚0.6cmとあり、報告書図版140の実測図に付されたスケールでは本文中の数値からおよそ3倍のサイズとなっている³⁾。

(7) 増浦洞遺跡 (財高麗文化財研究院2015)

京畿道利川市増浦洞に位置する。朝鮮時代の7号墳墓の墓壙は、主軸W-32° -Nで長径2.20m・短径0.73mの平面長方形であり、東壁の中央付近に掘り込まれた収納空間の位置で火打金2点(図3-7・13)および青銅匙1点、床上に棺蓋4点がそれぞれ出土した(図2)。報告書では、青銅匙・青銅鉢・青銅盒や白磁類を副葬した墓については冥器を副葬する以前の段階・16世紀前半とみている。火打金等は癒着状態で発見され、腐食が激しく表面に気泡が形成されているという。形態は長い鉄板の両端を中央までのぼし、端部を丸く巻いており、断面形は長方形で中央から端部にかけて徐々に薄くなるとされた。なお、火打金は、報告文中では未詳鉄製品と記載され、遺物出土状況の実測図中では「鉄製ハサミ」と注記されている。図3-7は、長さ7.2cm・高さ2.7cm・厚0.3cm。図3-13は、長さ12.0cm・高さ4.5cm・厚0.6cmとなり、図3-7より一回り大形品である。

(8) 麻北洞遺跡 (財京畿文化財研究院2009)

京畿道龍仁市麻北洞に位置する。朝鮮時代の14号住居址から火打金1点が、白磁鉢や陶器・粉青沙器・鉄製刀子・青銅匙及び箸等を伴って出土した(図2)。火打金(図3-8)は、報告書では鉄製装飾品と記載された。鍛造品であり、鉄板の最大幅1.0cm・厚み0.3cmほどで両端を巻き込むような形であり、鉄板の厚みは両側まで一定である一方で、鉄板の幅は狭くなっているとされた。長さ

8.0cm・高さ3.8cm。

(9) 小浦里遺跡 (財東西文物研究院2015)

慶尚南道咸安郡北面小浦里に位置する。朝鮮時代の219号墓の墓壙は、主軸N-48° -Eで長径2.69m・短径1.10mの平面隅丸長方形であり、東壁の中央付近に掘り込まれた収納空間の位置で火打金1点および青銅匙1点が、墓壙中央の木棺内からは棺蓋4点がそれぞれ出土した(図2)。火打金(図3-9)は、報告書では正確な用途が解らない不明鉄器とされ、一端が欠失し、全体形は環状で、断面は全て長方形とされた。長さ5.3cm・高さ1.6cm・厚0.3cm。

(10) 檜巖寺 (財京畿文化財研究院2013)

京畿道楊州市檜巖洞に位置する。建物配置等は高麗～朝鮮前期にさかのぼり、最終的な廃寺は19世紀初頭である。発掘調査では大量の遺物が出土しており、火打金は1点のみ見られ、報告書では未詳鉄器とされた。火打金(図3-10)は、4段地“カ”建物跡の東北側の基壇の間から出土した。腐食により器面が剥離しており、厚みは0.2cmとうすい。断面長方形で、両端を丸く曲げ中央で密着させている。中心の最大幅は0.9cmであり、両端にいくほど幅が狭くなるとされた。長さ7.3cm。

(11) 西邊洞古墳群 (財嶺南文化財研究院2001)

大邱広域市西邊洞に位置する。朝鮮時代の120号土壙墓から火打金1点が、棺蓋15点・青銅匙1点とともに出土した。同墓壙は、主軸N-3° -Eで長径2.08m・短径0.64mの平面隅丸長方形で、木棺痕跡を土層で確認できないことから、墓壙と木棺はほとんど同じ規模とされ、床面中央からやや南西よりで火打金が出土した(図2)。火打金(図3-11)は、報告書では両端部が一部欠失する鉄製装身具とされた。長さ8.2cm・高さ1.0cm・厚0.4cm。

(12) 津寛洞墳墓群 (財中央文化財研究院2008)

ソウル特別市恩平区津寛洞に位置する。II-4区域の朝鮮時代の149号土壙墓から火打金1点・青銅匙1点が出土した。同墓壙は、主軸N-71° -Eで長径2.01m・短径0.62mの平面長方形、木棺の平面は長径1.82m・短径0.38mの平面長方形となり、火打金(図3-12)は木棺東南側の端よりの底面から出土した(図2)。火打金は、報告書では用度未詳鉄器とされ、形は数字の“8”を横にしたようなもので同じ方向に巻いて成形され、断面長方形となるとされた。長さ10.6cm・高さ3.9cm・厚0.5cm。

(13) 徳岩里遺跡 (財頭流文化研究院2017)

慶尚南道金海市徳岩里に位置する。朝鮮時代の13号墳墓の墓壙は、主軸N-5° -Wで長径2.54m・短径1.06mの

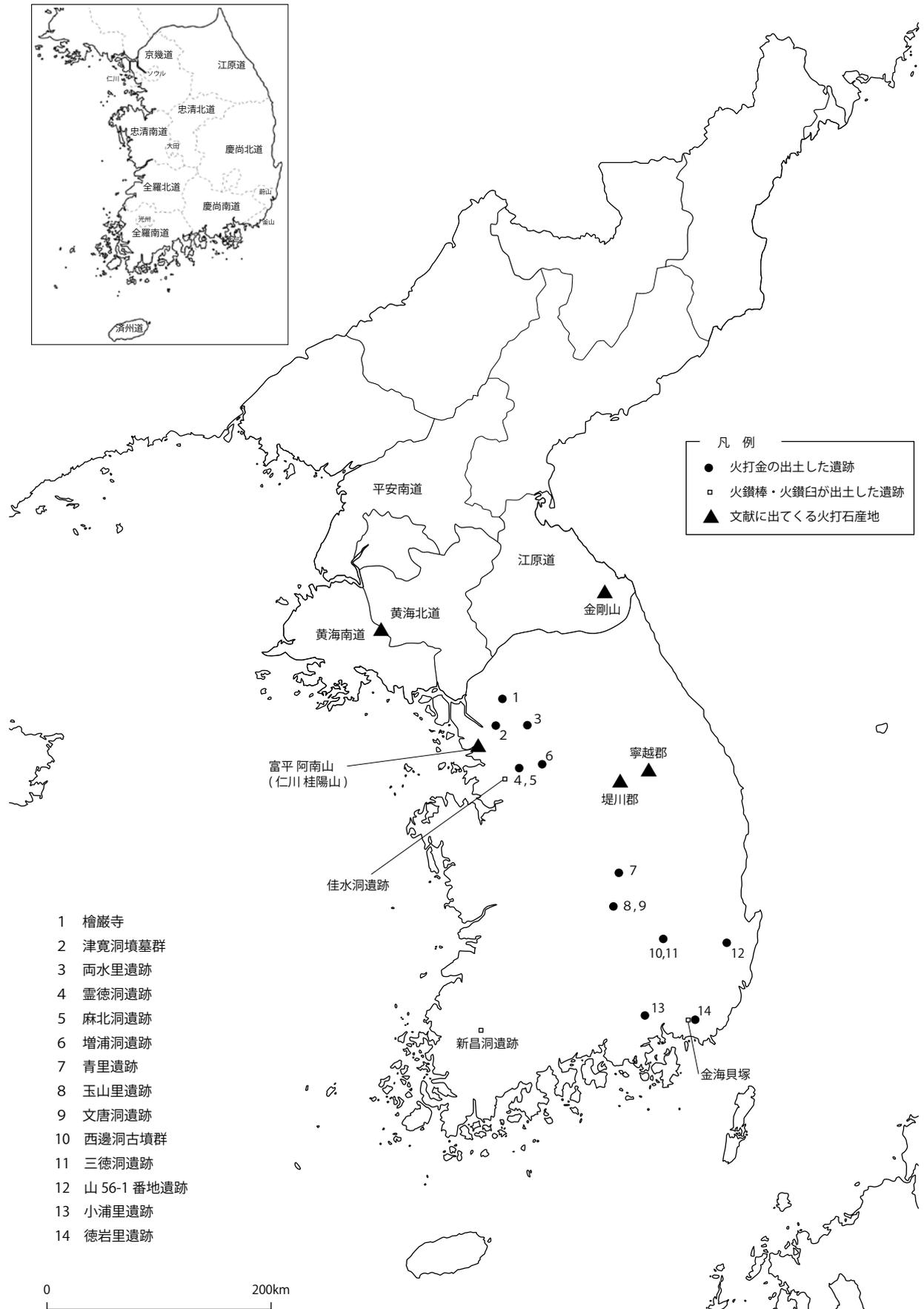


図1 韓半島における火打金出土遺跡の分布および本稿に関連する地名等

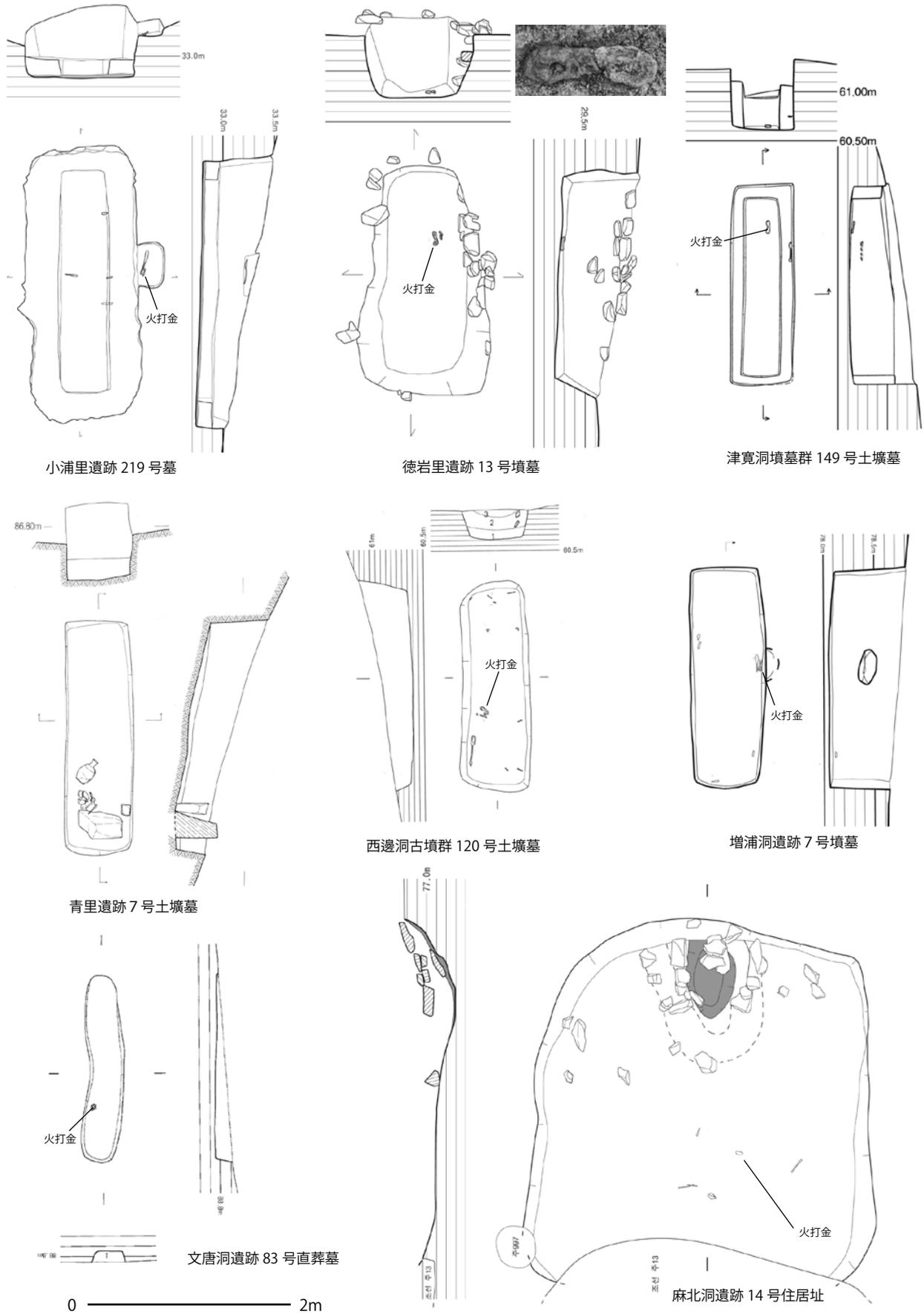
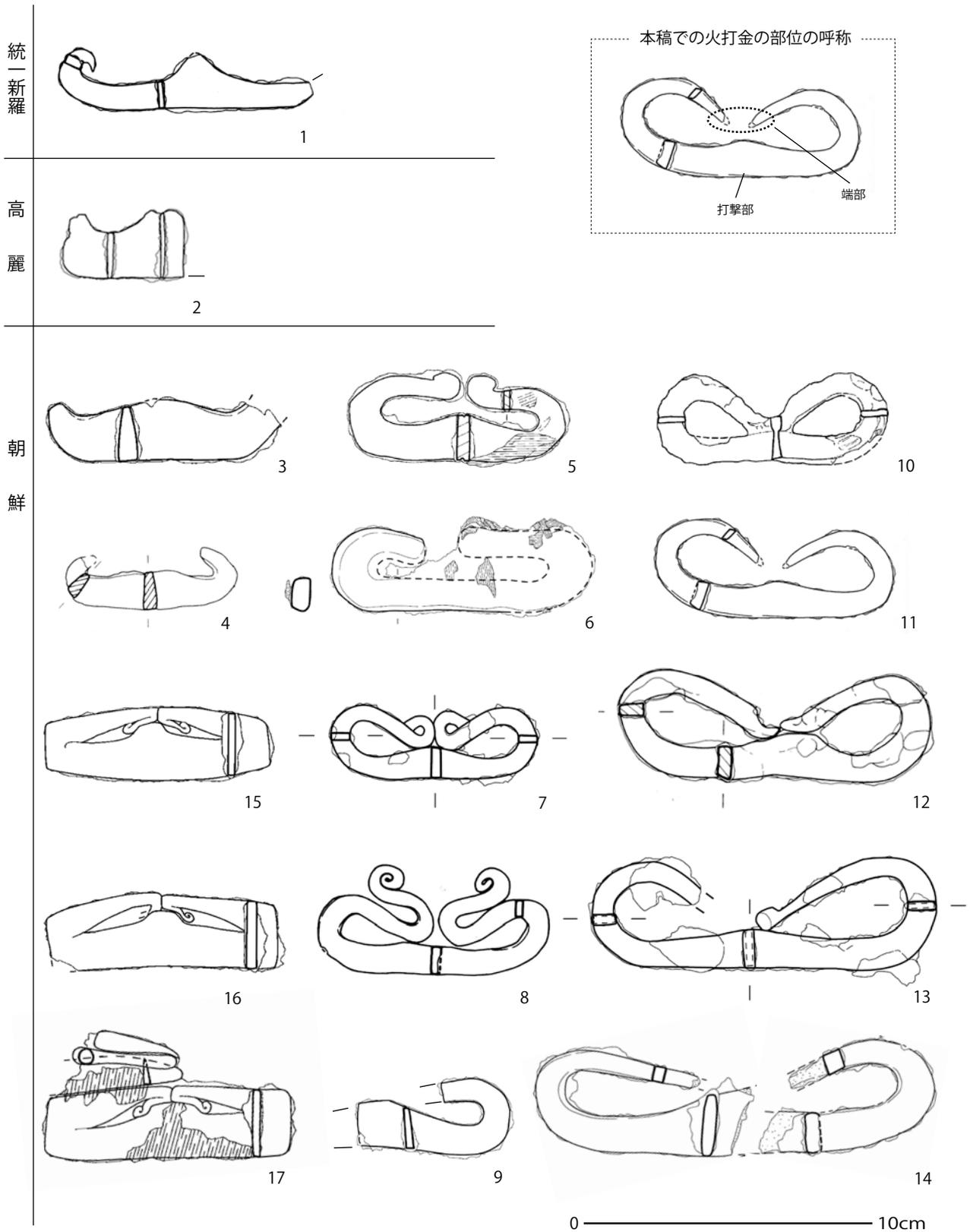


図2 韓半島における火打金の出土状況等



- | | | |
|----------------------------------|-------------------------|--------------------|
| 1 霊徳洞遺跡 1号性格未詳遺構 | 6 三徳洞遺跡 11号竪穴 | 11 西邊洞古墳群 120号土壙墓 |
| 2 両水里遺跡 1号建物址 | 7・13 増浦洞遺跡 7号墳墓 | 12 津寛洞墳墓群 149号土壙墓 |
| 3 玉山里遺跡 9号竪穴 | 8 麻北洞遺跡 14号住居址 | 14 徳岩里遺跡 13号墳墓 |
| 4 青里遺跡 7号土壙墓 | 9 小浦里遺跡 219号墓 | 15～17 文唐洞遺跡 83号直葬墓 |
| 5 山56-1番地遺跡 13号土壙墓 ²⁾ | 10 檜巖寺4段地“カ”建物跡東北側の基壇の間 | |

図3 韓半島の遺跡から出土した火打金

平面やや不整形な隅丸長方形、木棺の平面は長径2.01m・短径0.48mほどであり、底部には5cmほど灰褐色砂質粘土が敷かれ、その上に遺体を安置したと判断されている。火打金1点(図3-14)は、中央部やや東寄りの床面から鉄鑿1点とともにまとまって出土した。火打金は、報告書中では鉄ハサミとして報告され、握り部分2つが残存し、その断面長方形の鉄棒を逆“S”形に曲げて製作されたものと記載された。残存長は7.3/5.6cm・横幅0.6~2.2cm・厚み0.4~0.5cm。

出土状況の実測図・写真(図2)をみると、火打金は2片に折れており、その折れ口を接した状態で出土している。そこで、図3では、出土状況写真を参照しつつ実測図の向き等を改変・調整したものを示している。

(14) 文唐洞遺跡(財慶尚北道文化財研究院2008)

慶尚北道金泉市文唐洞に位置する。想定される時期幅が高麗末~近代とされる83号直葬墓の墓壇は、主軸N-40°-Eで長径1.86m・短径0.36mの平面細長い楕円形である。火打金は3点あり(図3-15~17)、墓壇北半の東壁付近に銅銭3点・花形の青銅製品等とともに一か所にまとまって出土した(図2)。火打金は、報告書では不明青銅器(ただし所見欄では鉄製品として記載)とされる。図3-15は、中央部分がふくらんだ鉄板の両端を長く伸ばし、伸ばした先をふくらみ部分で折り返し、先端をワラビ形に1回巻くとされた。全体の平面形はやや膨らんだ長方形で、長さ8.1cm・高さ2.5cm。断面は長方形。図3-16は15とほぼ同じ形態で、ワラビ形に巻かれた先端の1つが欠損するとされた。長さ7.9cm・高さ2.5cm。図3-17も15・16と同じ形態であり、断面三角形の鉄製品と陶磁製品が、前面には木質がそれぞれ付着するとされた。長さ8.7cm・高さ2.5cm。

3 韓半島の民具資料の中の火打金・火打石の紹介

火打金・火打石等の民具資料は、韓国国内の博物館等で収蔵例がいくつか知られている。

韓国国立民俗博物館には、革真鍮燧袋1点、綿刺子燧袋1点、鉄製火打金1点、火打石2点が所蔵されている。『朝鮮王朝の美』展示会図録によると、火打石の石材は石英であり、火打金には鋼鉄製と銅製のものがあるという(北海道立近代美術館2001・北野2002)。

済州大学校博物館には、山形の火打金2点、短冊形の火打金3点、一部白色の風化面をもつ光沢のある黒い石で、済州島内には産しない石材の火打石1点、火打袋1点、付木1点が所蔵されている(北野2002)。

以下では、日本の国立民族学博物館の所蔵する火打金・火打石の民具資料についての観察所見等を紹介したい。民具資料は、年代的には、前節の遺跡出土品よりもおおむね後出する火打金でよいと思われ、韓半島における火打金の型式変遷やその終焉を知るうえで重要な情報として期待される。

(A) 平安南道での収集品(標本番号H0017529)

火打金(図4-2)は鉄製で、長辺のややふくらんだ短冊形で、その上下端が直線的にカットされている。板面には約1cm間隔で直径0.8cmの穿孔が3箇所ある。穿孔は上下よりねじるようになされている。長さ7.0cm・幅2.8cm・重量46.6g。縦断面形はやや中ぶくれしており、厚みが中央付近で0.4cm、端になると0.3cmである。

(B) 慶尚北道での収集品(標本番号H0015224)

火打金は鉄製のものが2点ある。図4-1は幅7.4cm・高さ2.0cm・厚み0.3cm・重量14.9g。打撃部は山形を基本に、その両端を上方に大きく折り曲げ、さらにその先端を打撃部の山形になった頂点付近でまとめるように、蕨手状に仕上げている。打撃部の左右端は直線的である。打撃部は約5cm幅でゆるい凹面となっており、使用に伴う打ち減りとみられる。図4-5は、平面長方形の板状のものである。とくにその長辺は直線ではなく凹凸がある。これもまた、使用に伴う打ち減りとみられる。長さ5.4cm・幅1.9cm・重量14.3g。縦断面形はやや中ぶくれしており、厚みが中央付近で0.3cm、端になると0.1cmである。なお、同標本には、火打袋・火口もある。

(C) 全羅南道・務安郡での収集品(標本番号H0020900)

標本は、鉄製の火打金1点とチャート等の石片100点以上が袋に包み込まれた状態のものである。火打金(図4-3)は、平面長方形の板状のもので、長辺が直線ではなく凹凸があり、やはり使用に伴う打ち減りとみられる。長さ7.3cm・幅2.3cm・重量27.7g。厚みは中央付近で0.3cm、端になると0.2cmである。石片は火打石に関連するものと思われ、良質でない節理の多いチャートがほとんどであり、赤色のチャート1点とメノウ質のものがいくつかある。使用痕の明確なメノウ質のもの1点を図化した(図4-6)。長さ1.4cm・幅1.0cm・厚み0.5cm・重量0.8gと小さなもので、縁辺の大半がよく潰れている。潰れは、火打金への打ち付けによって生じたものであろう。

(D) 韓半島での収集品(標本番号H0015162)

標本は、鉄製の火打金1点および燧寸箱に収められた火打石2点・火口からなる。火打金(図4-4)は、平面長方形の板状のもので、長さ6.9cm・幅2.7cm・重量45.0g。

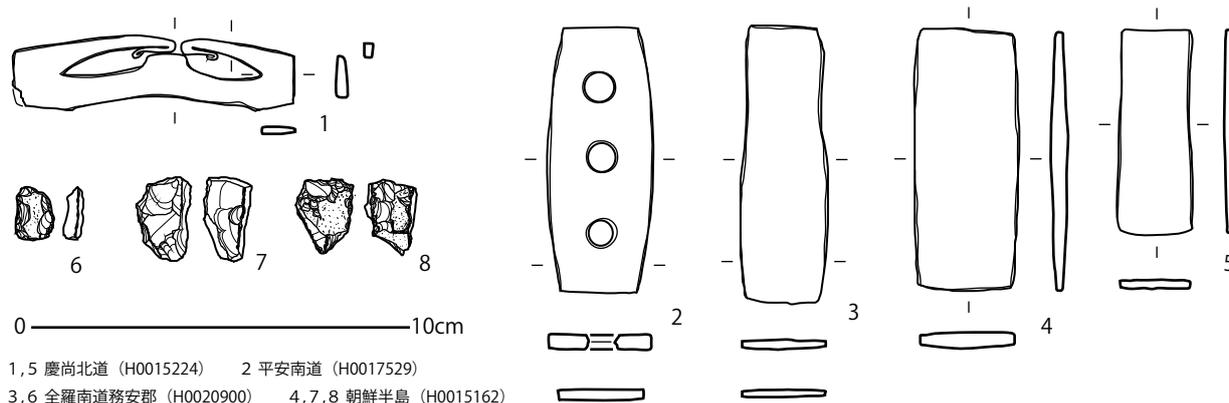


図4 韓半島の火打金・火打石の民具資料（日本国立民族学博物館所蔵）

厚みは中央付近で0.4cm、端になると0.2cmである。火打石は2点とも全体に手擦れしている。図4-7は赤色のチャート製で、長さ2.2cm・幅1.4cm・厚み1.3cm・重量4.8g。稜線上に弱い潰れがみられる。図4-8は灰色のチャート製で、長さ1.9cm・幅1.5cm・厚み1.4cm・重量4.3g。稜線上に顕著な潰れがみられる。

なお、『韓国民族文化大百科事典』（韓国精神文化研究院編1991）には韓国の温陽民俗博物館所蔵品の写真が掲載され、上記の平安南道および慶尚北道における収集品（標本番号H0017529・H0015224）（図4-1・2）とよく似た火打金等が紹介されている。

4 韓半島における火打金の型式・変遷等に関する予察

ここまで、韓半島の14遺跡から出土した17点の火打金および民具4件の火打金5点・火打石3点について、実測図とともに紹介してきた。火打金の遺跡出土品について実見できていないことや資料数も少ない中ではあるものの、今後の研究の深化を見据え、あえて火打金のグルーピングを試みてみよう。

年代の古い方からみると、霊徳洞遺跡例（図3-1）からは、8世紀後半～9世紀前・中頃には韓半島にも火打金が登場する可能性が示されることとなった。霊徳洞遺跡例は、打撃部の平面が山形で、左右に伸びた両端は上方向へ折り返され、端部が鉤状に仕上げられている。

両水里遺跡例（図3-2）が火打金でよいと確定できれば、霊徳洞遺跡例と朝鮮時代のものとの年代的な間を埋める資料となるわけであるが、やはり打撃部の平面が山形であり、左右両端が上方向に折り返されている。

朝鮮時代の資料には、打撃部の平面が山形で、両端が上方へ短く折り返されるもの（図3-3・4）、両端がアーモンド形のリング状に折り返されて、その端部が打撃部の

山形の頂部に接するあるいは近い位置にあるもの（図3-10～14）、上方へ折り返された端部が丸くあるいは蕨手状にまとめられるもの（図3-5～7、欠損により全形不詳の図3-9もこれに含まれるか）、さらには2回折り返すことでアルファベットのS字状にしたうえで端部を蕨手状にまとめるもの（図3-8）がある。このうち、増浦洞遺跡例（図3-7・13）は同一墳墓で共存している。これら山形を基調とする火打金は、打撃部の縦断面が台形あるいは長方形となる。すなわち、火打石と打ち付けられる一辺の方が厚く、打撃部とは反対になる握り側の一辺が同じ厚さか薄いという共通点がある。

文唐洞遺跡例のように、両側を折り返して端部を蕨手状にまとめる姿を残すものの、全体形について山形でなく、長辺のややふくらんだ短冊形となるもの（図3-15～17）がある。慶尚北道で収集された民具資料の1つは、この延長上にあるとみてよい（図4-1）。短冊形のものには、長辺がややふくらみ、火打金の中央に縦方向に3つの円孔があくもの（図4-2）、短冊形になるもの（図4-3～5）がある。これらの短冊形を基調とする一群は民具資料に一定数みられ、韓半島における火打金の変遷の中で最も新しい様相であると予想される。

このように、韓半島の火打金については、遺跡出土品や民具資料をとおして、おおよその型式や変遷の傾向がみえてきた状況と言える。今後のさらなる資料増と検証が待たれる。

なお、1688～1693年の間に蘇斗山により著された「雑物折價」表・「龍灣志」には、朝鮮から清へ輸出された雑貨の1つに「火鐵」が挙げられている（張1978）。また、沈象奎らにより1808年に編纂された『萬機要覽』には、日本への使節である信使の幾多の携行品の1つとして「火鐵（中略）三件」が挙げられている（朝鮮総督府中枢院1938・岸

1966b)。これら文献記録について、今後の考古学的な検証等に期待したい。

5 火打石の石材産地について

発火具として火打金を用いる以上、火打石は必須である。しかし、管見では、韓半島の発掘調査において、火打金とセットで火打石が出土したという報告例はない。民具資料の火打石では、石英や、一部白色の風化面をもつ光沢のある黒い石(北野2002)、赤色・灰色のチャート、務安郡での収集品に赤色のメノウ質の石材がみられた。これら限られた資料のみでも、韓半島において少なくとも4種類の石材が火打石に用いられたとわかる。

以下では、地質学的あるいは岩石学的な特定等が課題になるとはいえ、火打石に用いられた石材の色や質、産地や入手経路等をめぐって、古文献等で検索可能な情報をいくつか抜き出し、将来における遺跡出土品の登場に備えたい。

まず、火打石に適した石材が韓半島に多くは産出しないことが、考古学者で当時、朝鮮総督府古蹟調査委員の濱田耕作、同古蹟調査事務嘱託の梅原末治によっていち早く言及されている。金海貝塚の調査報告書の中で、同貝塚の第5層から出土した一端が炭化した木棒について摩擦式発火具の火鑽棒のようなものと解釈し、その背景として「南鮮地方には燧石の産出乏しきが如く石器の此の材料を以て作られたるもの無きより見るも、発火の方法は燧石によりて行はれずして鑽木の方法に由りし」(朝鮮總督府1925)とした。

北野隆亮氏は、朝鮮時代の実用百科事典『林園経済志』中の火打道具に関する記載を紹介している(北野2002)。金貞姫氏の御協力により原文を参照すると、火打石について「燕貿者佳有青黄二種黄者尤佳東人呼黄石為乾鰻火石呼青石為瓊瑚火石皆以其色似也東産類多白色龕頑不堪用金剛山北麓下産一種石烏黒而明瑩如水晶每一塊皆作峰巒形可作几案間物偶得新破廉劇者火鎌叩之輒善生火然其石藏在土中未易多得也 金華耕讀記」とあり、火打石として良質の黄色い石や青い石(それぞれ“乾鰻火石”・“瓊瑚火石”と呼ばれていた)、粗くて使用に耐えない白色の石があったこと、金剛山(図1)の北麓にはカラスのような黒色で水晶のように明るく艶やかな石が大量に包蔵・産出すること等を知ることができる。

また、1631年(辛未年・仁祖9年)7月の「雑録」には、李氏朝鮮の文臣であった鄭斗源が使臣先の明から持ち帰った洋式銃(火打石式の銃であろう)に関連し、「富平

阿南山」に「火石」が多く産出すると記載されている(朝鮮古書刊行会1910)。この背景には、1631年当時の朝鮮において、火石(=火打石)を用いた発火法が広く知られていたことが挙げられる(朴2012)。富平阿南山は、現在の仁川広域市にある桂陽山が相当する(図1)。

このほか、東京大学理学博士の川崎繁太郎によって、古文獻に出てくる韓半島の鉱産物が網羅される中で、清風邑の土産、寧越邑の物産の1つとして、それぞれ火石が挙げられている(朝鮮総督府地質調査所1935)。忠清北道堤川郡および江原道寧越郡(図1)に、それぞれの土産・物産として取り上げられる程度の火打石の産地が存在した可能性がある。

一方で、火打石を朝鮮外から輸入していた記録もある。榎本武揚によって重訳された『朝鮮事情』(原名：高麗史略)によると「火石ハ黄海道ニ出ルト雖モ其質悪キヲ以テ實用ニ供スル者ハ皆之ヲ支那ニ取ル」(榎本1882)とあり、同じように『新撰朝鮮地理誌』でも「火石ハ黄海道ヨリ出ツト雖モ其質甚タ善良ナラザルヲ以テ實用ニ供シ難シ」(大田1894)と記載される。年1回、結氷後に会寧(後に慶源も開市)を中心になされた豆満江畔における清との貿易では、朝鮮の輸入品目に火打石が含まれていたという(北川1932)。現在の黄海北道・黄海南道に相当する黄海道で火打石が産出するものの質が良くなかったことから、実用する火打石は清から入手したということになる。

また、1883年以降にイギリスをはじめとするヨーロッパ諸国と交わされた修好通商条約における輸入品目の関税に関する項目にも「火石」が挙がっており(統監府1908・岸1966a)、実際の輸入量等は要検討ながら、ヨーロッパ諸国のフリント製火打石も朝鮮へ輸入された可能性がある⁴⁾。

このように、文献記録からは、韓半島における火打石の産地として、金剛山の北麓、仁川の桂陽山、忠清北道堤川郡および江原道寧越郡が挙げられること、色味として黒・黄・青・白色の石材があること、清国やヨーロッパ諸国から輸入された火打石もあったことを知ることができる。今後、発掘調査の中で火打石が見いだされ、文献記録等との比較検証が進むことに期待したい。

6 火打金・火打石による発火法の年代的下限について

火打金・火打石を利用した発火法はいつまで続いたのか、その年代上の下限について、入手できた文献による断片的な情報からではあるものの、整理しておく。

1882年当時、硫黄をしみこませた木片に火打石で火を付けたこと、1894年当時、日本から輸入したマッチが広く普及していたことが報告されているという(小島1997)。足立隼二郎による『朝鮮雑記』では、各地の市場にいた多くの「支那人」が一様に扱っていた品の1つに「燧石、摺付木」があったと描かれる(足立1894)。1904年12月から数か月にわたって各地の闇市で扱われた商品を調査した有働良夫の記録から発火具に関するものを抜き出すと、全南長城邑(3月3日)雑品：火打石・燧寸、慶南晋州邑(3月17日)雑品：燧寸・燧石・火附木、慶南龜浦(3月28日)織物及雑品：燧寸・火附木、慶南蔚山村(4月14日)雑品：火附木・燧石・燧金・燧寸、慶南靈山邑(4月9日)雑品：火附木・燧石・燧金・燧寸、慶北大邱邑(4月21日)雑品：燧寸・燧石・燧金⁵⁾がある(三成1907)。これらからは、1894年当時には火打石・火打金による発火具セットとともに新来のマッチが普及しており、1905年3・4月当時の闇市でそれらが扱われていたとわかる。

また、印貞植の著した『朝鮮農村雑記』によると「工場製の廉価な安全マッチが原始的な燧石や黄燧を一掃し」「これらの自給品を駆逐したのは確かに大正十年の頃からだったと思う。安全マッチや石油が入ってきたのも、殆んど同じ頃だった様に記憶される」という(印1943)。この記事からは、1921年の頃には、火打石・火打金のセットに替わって、マッチの利用が優勢になっていく様子がみとれる。

なお、戦時中のマッチ不足を補うために、当時の黄海道金川郡西北面鷲峙洞では木片に硫黄を塗ったものを用意して火打石で点火していたこと、それは「明治初年の発火設備に還ったかの如く、時局が生んだ時代逆行の風景」であると“燧寸代用に火燧石”と題した記事がある(執筆者不詳1938)。1938年当時において、事情はともかくとして火打石を実際に用いた確実な記録である。そして、「全般的にみて、解放前には必要なときごとに火打ち石で火を起こした農家が過半数」であったが今日(1970年代初めまで)では激減したという(崔1979)。

ここまでみたように、発火具としての火打金・火打石は、新来のマッチと共存しつつ、ついには発火具の主役をマッチに譲ったようである。

7 おわりに

本稿では、急増している発掘資料を受けて、韓半島における火打金の遺跡出土品および民具資料、文献記載について紹介し、その型式や変遷について予察した。また、

火打石の産地や火打石利用の年代的下限に関する情報を整理した。この結果、これまで空白に近かった韓半島における火打金・火打石等の発火具事情について、おおよそその輪郭は見てきたように思う。

本稿により出てくる新たな課題は多いが、押さえておくべき大きなものの1つには、8世紀代の火打金が知られているシベリアや日本(林1994・関2007ほか)の状況と韓半島のそれとの関係解明が挙げられる。今後の韓半島における関連資料の増加と検証を待ちつつ、東アジアにおける人と火の関係について、地域間の比較をとおして引き続き検討したい。

謝辞 本稿を進めるにあたり、多くの学兄や機関にお世話になった。

その全てではないながら、ここにお名前を挙げ、感謝申し上げる次第である(個人・機関別でそれぞれアルファベット順)。

裴基同 張龍俊 郭殷慶 金喜靜 金貞姫 村上恭通 恩地万里 朴仲煥 重藤輝行 申相孝 田中聡一 李眞吹

日本国立民族学博物館 韓国国立光州博物館 韓国国立羅州博物館

【註】

- 1) 韓半島における遺跡調査報告書の検索は、主に、2004年までに宮崎県立西都原考古博物館へ寄贈された図書および韓国文化財庁ほかのWeb上で無償閲覧できたPDF等で実施した。したがって、遺漏が多く出てくると予想され、そういった資料についてご教示いただけると幸いである。
- 2) 今回の集成には含めていないが、山56-1番地遺跡の14号土壇墓から出土している鉄製品も、実測図・写真図版でみるかぎり火打金の可能性があるように思える。
- 3) 図3では、報告書図版140のスケールにしたがっている。
- 4) 台湾でも、清を経由してヨーロッパ産フリントが火打石として輸入されている(上野編1888・許2014ほか)。ヨーロッパから東アジアへもたらされた火打石については、機会を改めて論じたい。
- 5) 「火打石」「燧石」という違いについて、何らかの実体的な相違を反映した書き分けの可能性も残されている点は、注意しておきたい。

【参考・引用文献】

- (韓国語：火打金の出土した遺跡調査報告書、発行年代順)
- 韓国文化財保護財団 1999『尚州 青里遺蹟(IX)』学術調査報告第14冊
- 財嶺南文化財研究院 2001『大邱 西邊洞古墳群Ⅰ』嶺南文化財研究院学術調査報告第40冊
- 財中央文化財研究院 2008『恩平 津寬洞墳墓群Ⅱ』発掘調査報告

韓半島における火打金・火打石

- 第147冊
財慶尚北道文化財研究院 2008『金泉 文唐洞遺蹟』学術調査報告第91冊
財京畿文化財研究院 2009『龍仁 麻北洞聚落遺蹟』(本文2)学術調査報告第109冊
財新羅文化遺産研究院 2009『慶州 九於里 山56-1番地遺蹟』(財新羅文化遺産研究院調査研究叢書第26冊)
財京畿文化財研究院 2010『龍仁 靈徳洞遺蹟』(本文1)学術調査報告第116冊
財嶺南文化財研究院 2012『大邱 三徳洞遺蹟』嶺南文化財研究院学術調査報告第196冊
財京畿文化財研究院 2013『檜巖寺IV』京畿文化財研究院学術調査報告第146冊
財慶尚北道文化財研究院 2013『金泉 龍田里 旌閭閣・玉山里・龍田里遺蹟 I-1・2』学術調査報告第191冊
財東西文物研究院 2015『咸安 小浦里遺蹟 II』(財東西文物研究院調査研究報告書第83冊)
財高麗文化財研究院 2015『利川 増浦洞遺蹟』学術調査報告書第71輯
財西海文化財研究院 2016『楊平 両水里遺蹟 I』西海文化財研究院発掘調査報告書第47輯
財頭流文化研究院 2017『金海 徳岩里遺蹟』発掘調査報告書第30輯(韓国語：上記以外)
国立大邱博物館 2005『遙かなる進化の道のり 人類と石』
朴 星來 2012『韓国科学思想史』
韓国精神文化研究院 編 1991『韓国民族文化大百科事典』10
国立伽耶文化財研究所 2008『韓国の古代木器 咸安城山山城を中心に』国立伽耶文化財研究所研究資料集第41集
国立光州博物館 1997『光州 新昌洞低濕地遺蹟 I』国立光州博物館学術叢書第33冊
(中国語(台湾))
張 存武 1978『清韓宗藩貿易 1637~1894』中央研究院近代史研究所專刊(39)
許 雅玲 2014『清代臺灣與寧波的貿易(1684-1895)』國立政治大學臺灣史研究所碩士論文
(日本語 ※漢文表記を含む)
足立銈二郎 1894『朝鮮雜記』春祥堂
印 貞植 1943『朝鮮農村雜記』東都書籍
上野専一 編 1888『支那貿易物産字典』丸善商社
榎本武揚 重訳 1882『朝鮮事情』(原書：Dallet Charles『高麗史略』、Pompe van Meerdervoort抄訳)、集成館
大田才次郎 1894『新撰朝鮮地理誌』博文館
岸 謙 1966a, b「朝鮮の古燈器(2)(6)」『親和』No147, 151、日韓親和会、27-32頁, 26-32頁
北川 修 1932「日清戦争までの日鮮貿易」『歴史科学』第1巻第1号(『日本の産業革命』第10巻、歴史科学協義会、校倉書房(1977年)に収録)
北野隆亮 2002「韓国における火打石についての二三の覚書」第2回火打石研究会報告(『火打石研究会ニューズレター Newsletter sillex Vol.1』2006年発行に収録)
小島三弘 1997「世界各地に見られる火に関する技術・神話・伝承の分布」『火をめぐる民族学』火の習俗にまつわる調査と報告、島根県八雲村、61-102頁
関 義則 2002「埼玉県内出土の火打金」『埼玉考古』第37号 埼玉考古学会、117-138頁
朝鮮古書刊行会 1910『朝鮮群書大系』第9輯
朝鮮總督府 1925『金海貝塚発掘調査報告』大正九年度古蹟調査報告第一冊
朝鮮總督府地質調査所 1935『朝鮮鉍床調査要報』第9巻(川崎繁太郎 1935『古文獻に顕はれたる朝鮮鉍産物』朝鮮鉍業会)
朝鮮總督府中枢院 1938『萬機要覽』財用篇
統監府 1908『韓國條約類纂』
林 俊夫 1994「北方ユーラシアの火打金-ウラル以東-」『日本と世界の考古学』岩崎卓也先生退官記念論文集、352-369頁
北海道立近代美術館、国際芸術文化振興会編集 2001『朝鮮王朝の美』北海道新聞社
三成文一郎 1907『韓国土地農産調査報告 慶尚道 全羅道』
村上恭通 2001「朝鮮半島における凹字形鉄器」『久保和士君追悼考古論文集』久保和士君追悼考古論文集刊行会、219-226頁
執筆者不詳 1938「西鮮通信 燐寸代用に火燧石」(橋谷 弘 監修 1998『朝鮮行政』第11巻、ゆまに書房)
崔 在錫 1979『韓国農村社会研究』(伊藤亜人・嶋陸奥彦訳)学生社(崔 在錫 1975『韓國農村社會研究』一志社)
【図・表出典】
図1：藤木作成。
図2：各報告書から転載・一部改変。
図3：各報告書から転載・一部改変。
図4：日本国立民族学博物館所蔵資料。藤木実測・製図。

六野原地下式横穴墓群出土の古墳時代人骨

高椋 浩史・吉村 和昭

1 はじめに

六野原古墳群・地下式横穴墓群は宮崎県東諸県郡国富町に所在する。大淀川支流の北俣川と一ツ瀬川支流の三財川に挟まれ、南に開けた標高100mの六野原台地上のやや西寄りに立地する。1942(昭和17)年、陸軍大刀洗飛行学校木脇教育隊の飛行場建設にともない、古墳13基とともに、地下式横穴墓27基の調査がおこなわれた(瀬之口・石川1944)。戦後、昭和から平成にかけて、区画整理・耕地改良にともない発見された地下式横

穴墓の調査が、宮崎県教育委員会、国富町教育委員会によりおこなわれている。現在までに調査されたのは、高塚古墳13基(前方後円墳1基、円墳12基。ただし墳頂部に主体部を確認できたものは6基)、地下式横穴墓34基¹⁾である(図1)。

当古墳群・地下式横穴墓群の発掘事例の大半を占めるのは、戦時中、昭和17年の調査である。地下式横穴墓は、飛行場造成中に玄室天井の陥没などで発見され、急ぎ実施されたもので、ほとんどの堅坑が未掘であるな



図1 六野原古墳群・地下式横穴墓群分布図 (S=1/8,000)

ど、調査により得られた情報には多くの制約がある。埋葬人骨についても同様で、複数の地下式横穴墓から多くの人骨が出土したことが報告書に記されているものの、記述は断片的で、性別や年齢、形質的特徴についての詳細は残念ながら不明である。一方、終戦より今日まで、10号墓の再掘（34号墓）を含め、7基の地下式横穴墓の調査がおこなわれ、10号墓（34号墓）を除く、6基（28～33号墓）から人骨の出土が知られている（吉村2015）。調査報告において、出土人骨の性別、年齢について記されているものもあるが、記載はやはり断片的で、判定の根拠となる詳細なデータも提示されていない。

六野原古墳群・地下式横穴墓群は、宮崎平野部において唯一、広範囲に面的な発掘調査がおこなわれ、高塚古墳と地下式横穴墓の両者が存在する墓地全体の様相がおよそあきらかな事例である。換言すれば、現時点、同地域において、墓地の総合的な分析が可能な唯一の事例であると言える。しかしながら、人骨情報の欠如は、埋葬原理、親族関係などの検討に大きな障害となってきた。

このたび、宮崎県立西都原考古博物館に保管されている六野原地下式横穴墓群中から出土した人骨について、調査の機会を得たので、以下に報告する。対象は、1981（昭和56）年に調査された30号墓・31号墓（長津・茂山1982）、1996（平成8）年に調査された33号墓²⁾の出土人骨である。

2 地下式横穴墓出土人骨形質の先行研究と分析の意義

南九州地域の古墳時代における墓制として広く用いられている地下式横穴墓からは、まとまった数の古墳時代人骨が出土しており、それらの人骨資料を用いた形質人類学分野における研究を通じて当該地域の古墳時代集団の形質的特徴があきらかとなっている。松下孝幸は、南九州、特に日向地域において平野部の地下式横穴墓から出土した人骨と山間部の地下式横穴墓から出土した人骨の形質には違いがあることを指摘している。具体的には、山間部地域の地下式横穴墓から出土した人骨の形質は低・広顔傾向が強く、立体的な顔面部を呈するなど縄文人的な形質的特徴を残し、平野部の地下式横穴墓から出土した人骨の形質は山間部の集団よりも高顔で、北部九州地域の弥生時代人骨により類似していた（松下1990）。弥生時代に大陸から流入した渡来人の遺伝的影響が日本列島内にどのように拡散していくかを解明することは、日本人の形質的特徴の成り立ちを知る上で重要である。この問題を検討する上で、南九州地域において

は弥生時代の古人骨資料が少ないため、多くの資料が出土している古墳時代の資料が鍵となる。今回報告する六野原地下式横穴墓群から出土した人骨資料は、宮崎平野部における古墳時代集団の形質的特徴、さらには渡来人の遺伝的影響を把握する上で貴重な資料と言えよう。

また、近年では古人骨資料に基づく親族構造の分析が進められており（田中ほか2012）、南九州の古墳時代における社会変容の様相があきらかになりつつある。こうした古人骨資料を用いた親族構造の分析において、地下式横穴墓群の群構造や出土人骨の出土状況の詳細な観察に基づく埋葬復元（吉村2011・2015）に加えて、出土人骨の性別や年齢などの基本情報は親族構造の分析において重要な位置を占める。特に、南九州の地下式横穴墓には多くの鉄製武具が副葬される。男性以外にも副葬された事例が認められ、それが南九州地域における軍事編成や社会構造の特徴を際立たせている（吉村2016）。こうした副葬品との関連性やその社会的意味を検討する上でも、出土した人骨の基本情報は重要である。

3 分析資料と分析方法

[分析資料]

今回報告をおこなうのは六野原地下式横穴墓群から出土した人骨のうち30号墓、31号墓、33号墓から出土した人骨である。

30号墓 妻入りで、奥行370cmの玄室内に屍床を設ける。福尾正彦分類のI-A-2類（妻入り、有屍床、玄室長3m前後）（福尾1980）にあたる。前壁幅（200cm）に比べ、奥壁幅（150cm）が狭まる。屍床内に2体が葬られる（図2）。玄門側頭位の人骨が1号人骨（30-1号人骨）、奥壁頭位の人骨が2号人骨（30-2号人骨）である。1号人骨頭部左側に圭頭鏃1（図16）が、2号人骨頭蓋骨下に鹿角装刀子1（図16）が置かれ、それぞれに帰属するものと報告されている。堅坑上部からTK10型式の須恵器杯蓋・杯身・甗・甗片、土師器碗片・高杯片・壺片が出土した（長津・茂山1982）。

31号墓 不整形な玄室の右袖に設けられた屍床内に、頭位を前壁に向けた被葬者1体が葬られていた（図3）。

33号墓 1996（平成8）年、国富町教育委員会による調査である。平入り長方形の玄室である。奥壁沿い、左壁寄り下顎骨・歯が出土しており、被葬者は、左（東）頭位で葬られたとみられる（図4）。ところで、33号墓からの出土として保管されている人骨を精査したところ、2体分の人骨が確認できた。しかし、終了報告では

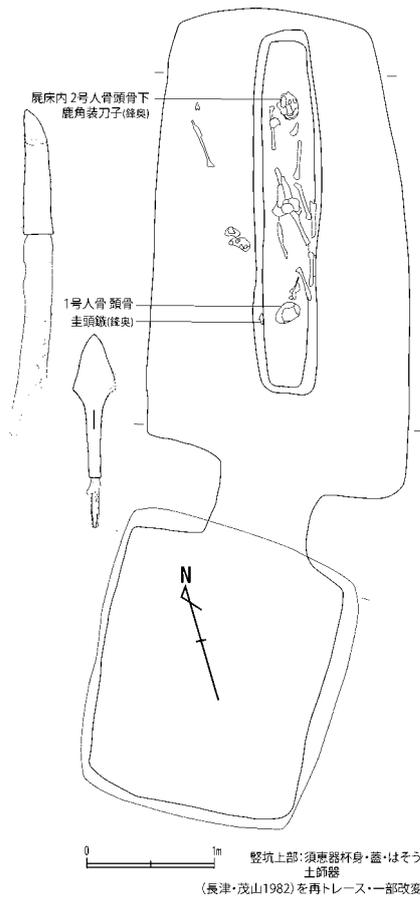


図2 六野原30号墓 (S=1/60)

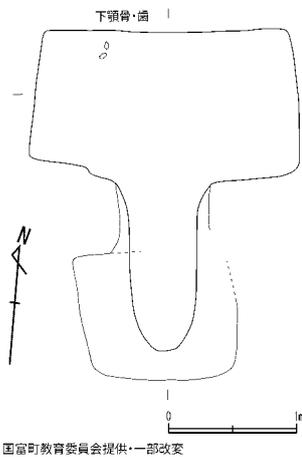


図4 六野原33号墓 (S=1/60)

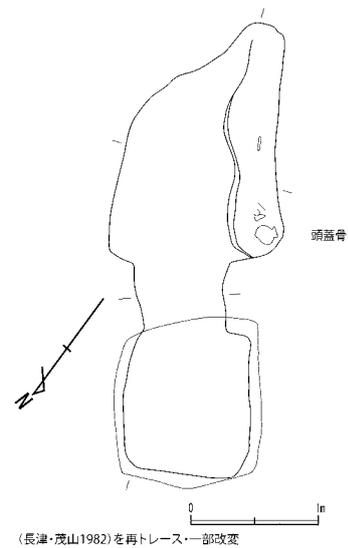


図3 六野原31号墓 (S=1/60)

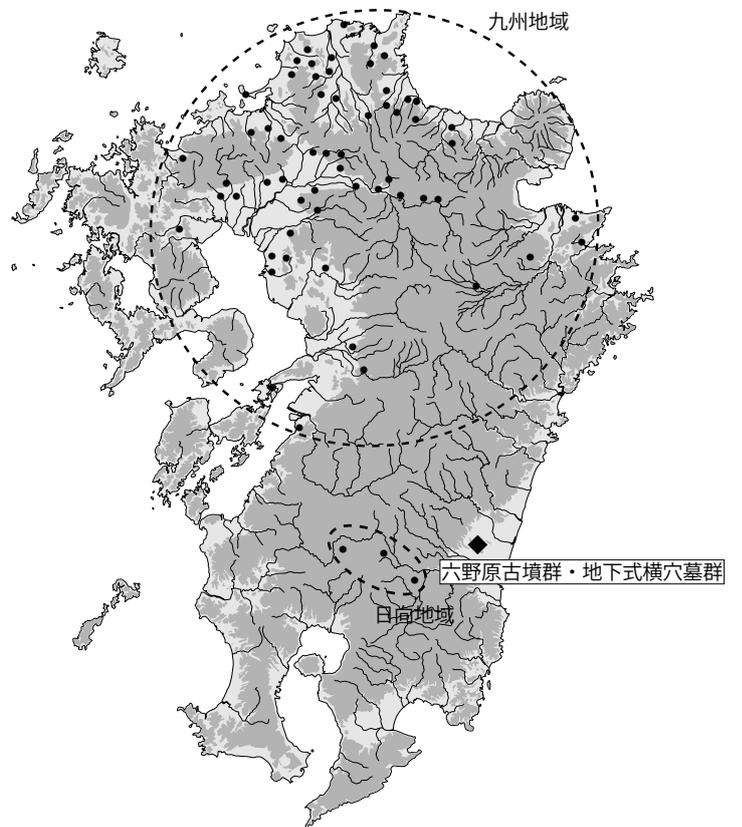


図5 分析に用いた人骨資料の出土分布

人骨は1体分とされる。また、2体分の人骨のうち、一方には赤色顔料が認められるが、もう一方には確認できない。そこで、発掘調査での人骨の出土状況を照合し、赤色顔料が付着していない人骨の残存部位が出土状況の写真にある人骨の残存部位と合致するため、これを33号墓出土人骨とした。一方、赤色顔料が付着している人骨は、出土した墓を特定できなかったため、「出土地点不明人骨」とする。

また、比較資料として日向地域の古墳時代集団と九州の北部、東部、中部地域の古墳時代集団のデータを用いた(図5)。比較集団については、頭蓋については文献データも含めてある程度のまとまったデータを得ることができるので、可能な限り旧国単位でデータを一括した。四肢骨については、日向地域以外では旧国単位での集団設定が可能なほどのデータを得ることができなかったため、九州北部・東部・中部地域の集団を一括した。

〔分析方法〕

性別の判定について、出土した人骨は判定に最も有効とされている骨盤が残存していなかったため、頭蓋と四肢骨の観察および計測値に基づいて判定した。頭蓋については、Buikstra and Ubelaker (1994)の基準に拠った。四肢骨については計測値に基づき性別判定をおこなった。四肢骨の計測値に基づき性別を判定する場合、分析資料と同時代・同地域集団の計測値との比較が必要である。そこで、九州地域の古墳時代人骨の四肢骨の同側の計測値を比較データとして用いた。計測値の比較には単変量での比較に加えて、比較集団とのマハラノビスの距離を算出した。マハラノビスの距離の算出に必要な分散共分散行列は九州地方の近代から現代集団の計測値を基に算出した。

年齢推定は、歯の咬耗の観察に基づいておこない、栃原 (1957) の方法に従った。年齢の表記に関しては、九州大学医学部解剖学第二講座編集の『日本民族・文化の生成2』(1988) 記載の年齢区分に従い、幼児 (1~6歳)、小児 (7~12歳)、若年 (13~19歳)、成年 (20~39歳)、熟年 (40~59歳)、老年 (60歳~) とする。

人骨の計測は主にMartin-Saller (1957) と馬場 (1991) に従った。頭蓋の形質的特徴を把握するために、六野原集団と各比較集団との偏差折線を描き、また多変量解析として主成分分析を実施した。統計解析の実施にあたっては、IBM社製のSPSS Statistics Base 20とMicrosoft社製のExcel 2010を用いた。

4 分析結果

(1) 30-1号人骨

〔残存部位〕

頭蓋と四肢骨の一部が残存している。頭蓋は前頭骨、蝶形骨、左右頭頂骨、後頭骨、左右側頭骨が残存している (図6)。歯牙は残存していなかった。

四肢骨は、左側寛骨の一部と右側大腿骨の骨幹部が残存している (図6)。

〔性別〕

性別は計測が可能であった右側大腿骨の中央矢状径、中央横径、中央周に基づき判定した。六野原30-1号人骨の計測値と比較集団の基本統計量を表1に示し、比較集団のヒストグラム中に六野原30-1号人骨から得られた計測値を示している (表1・図7・図8)。

得られた計測値を他集団の平均値と比較すると、六野原30-1号人骨の大腿骨中央矢状径 (23mm) は、日向地域の古墳時代男性集団 (27.6mm) や九州地域の古墳時代男性集団 (29.0mm) より小さく、日向地域の古墳時代女性集団 (24.1mm) や九州地域の古墳時代男性集団 (24.9mm) の値に近い。大腿骨中央横径 (27mm) は、日向地域の古墳時代男性集団 (24.6mm) より大きく、九州地域の古墳時代男性集団 (27.3mm) の値に近い。日向地域の古墳時代女性集団 (23.7mm) や九州地域の古墳時代女性集団 (25.4mm) と比べて大きい。大腿骨中央周 (78mm) は、日向地域の古墳時代男性集団 (82.8mm) や九州地域の古墳時代男性集団 (89.1mm) より小さく、日向地域の古墳時代女性集団 (75.3mm)

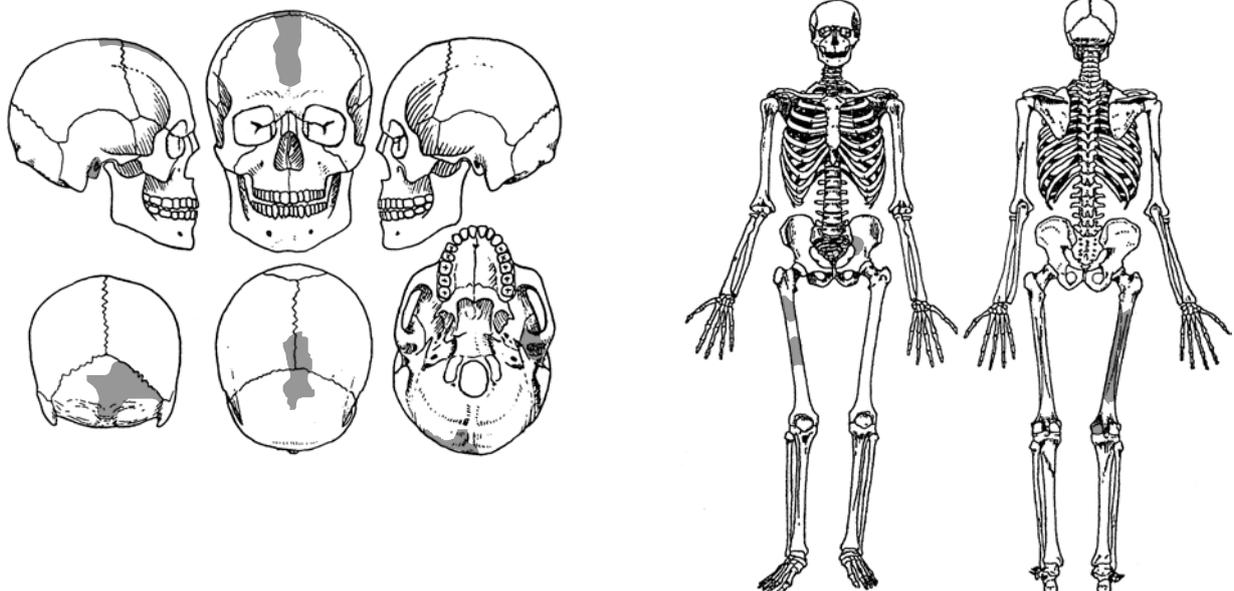


図6 六野原30-1号人骨の残存部位

表1 六野原30-1号人骨と比較集団の大腿骨の計測値の基本統計量

大腿骨	計測項目	六野原 (古墳)			日向 (古墳)			九州 (古墳)						
		30-1	♂		♀		♂		♀					
			N	M	S.D.	N	M	S.D.	N	M	S.D.			
	中央矢状径	23	37	27.6	2.14	72	29.0	2.29	34	24.1	1.56	51	24.9	1.85
	中央横径	27	37	24.6	1.85	72	27.3	1.92	34	23.7	1.80	51	25.4	1.75
	中央周	78	37	82.8	4.79	72	89.1	5.52	34	75.3	4.07	51	79.2	4.28

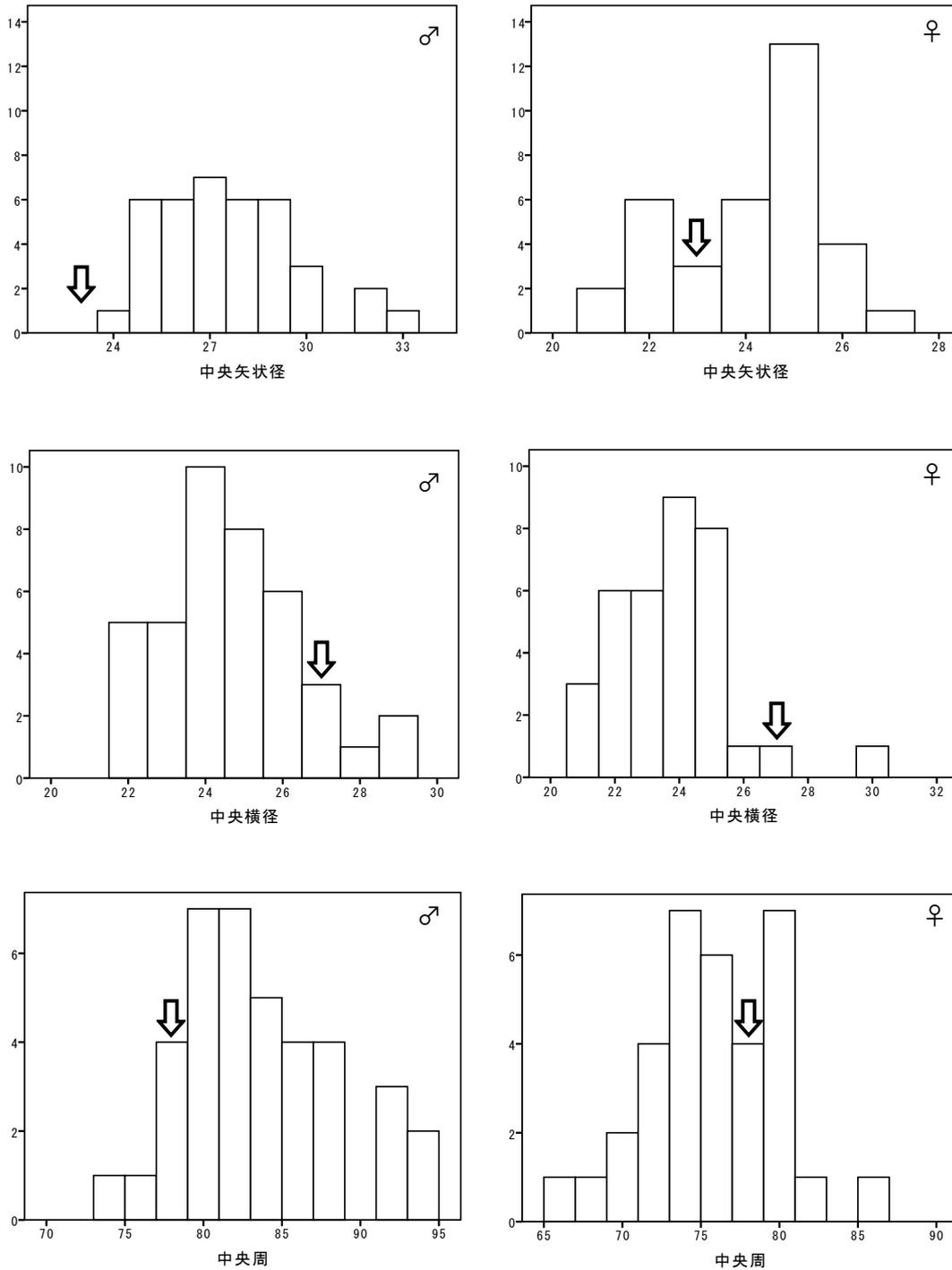


図7 日向集団の大腿骨計測値のヒストグラムと六野原30-1号人骨との計測値
* 矢印が六野原30-1号人骨との計測値。

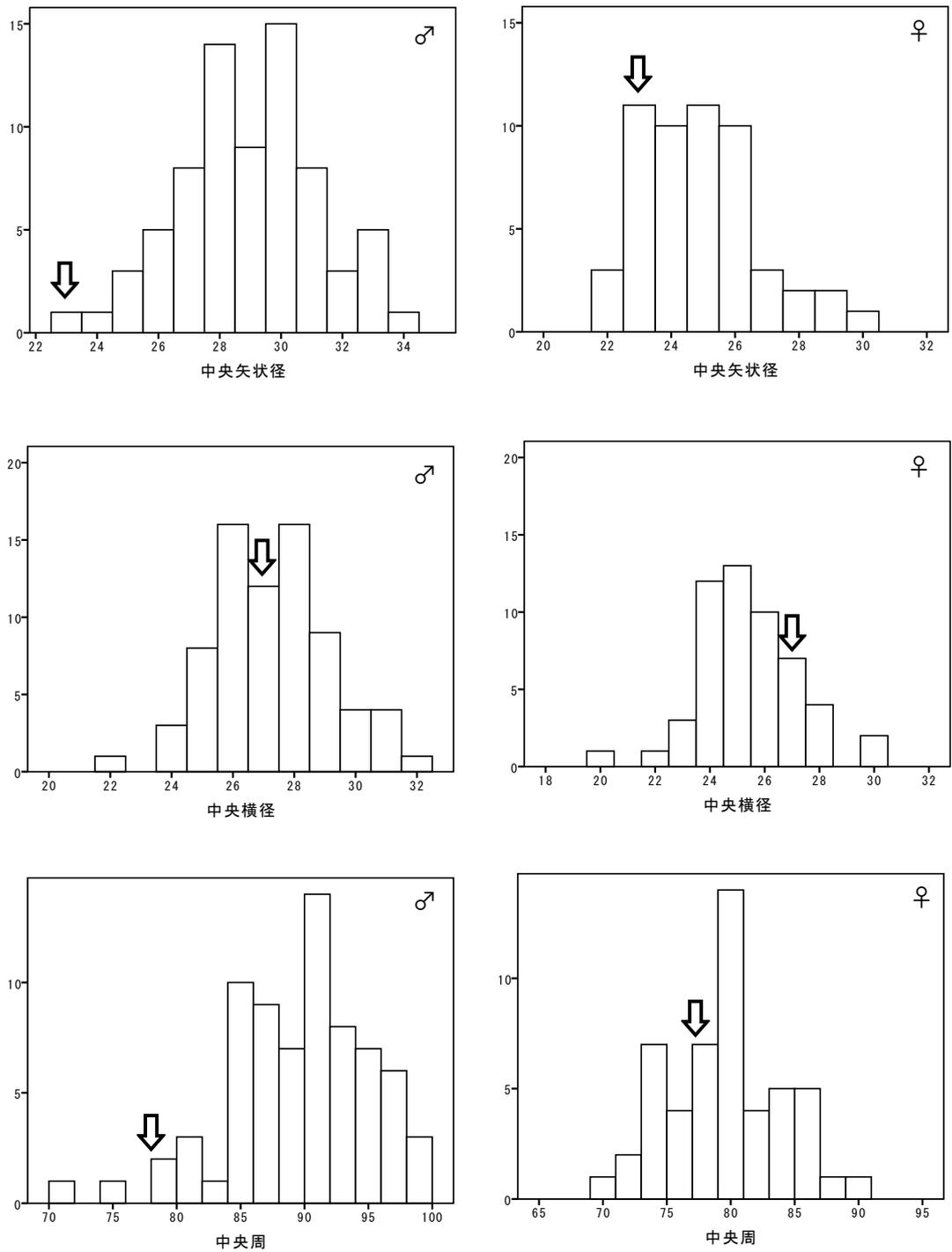


図8 九州地域集団の大腿骨計測値のヒストグラムと六野原30-1号人骨との計測値
* 矢印が六野原30-1号人骨との計測値。

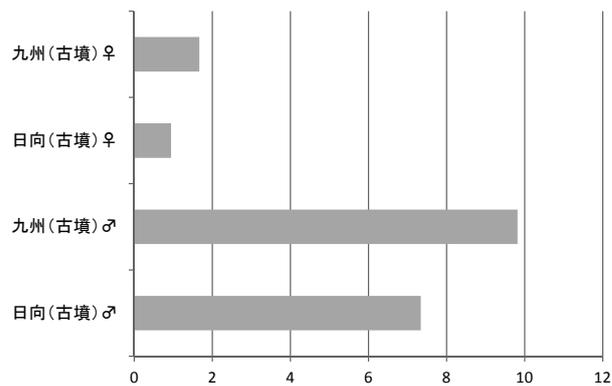


図9 大腿骨三項目を用いた比較集団とのマハラノビスの距離

や九州地域の古墳時代女性集団（79.2mm）の値に近い。
 単変量の比較では、大腿骨中央矢状径および大腿骨中央周は比較集団の女性に近く、大腿骨横径については比較集団の男性の計測値に近い。

大腿骨三項目（中央矢状径、中央横径、中央周）を用いて比較集団とのマハラノビスの距離を算出した（図9）。これをみると、六野原30-1号人骨とのマハラノビスの距離は、日向地域と九州地域の両女性集団との距離が男性集団との距離よりも小さく、形態的な類似性が大きいことがわかる。

以上の単変量および多変量解析の結果から、六野原30-1号人骨は女性の人骨である可能性が高い。

〔年齢〕

年齢は成人個体であると推定できるが、残存している部位でそれ以上の年齢を絞り込むことはできなかった。

(2) 30-2号人骨

〔残存部位〕

頭蓋の一部のみが残存しており、前頭骨、蝶形骨、左右頭頂骨、後頭骨、左右側頭骨、左頬骨、上顎骨、下顎骨が残存している（図10）。歯牙は残存しており、残存歯牙は以下の通りである。

／	／	P ²	P ¹	／	I ²	／	／	／	C	P ¹	P ²	／	／
M ₂	M ₁	／	P ₁	C	／	／	／	I ₂	C	P ₁	P ₂	M ₁	M ₂
・			・							・	・		・

／欠損 ・遊離歯（以下、同様）

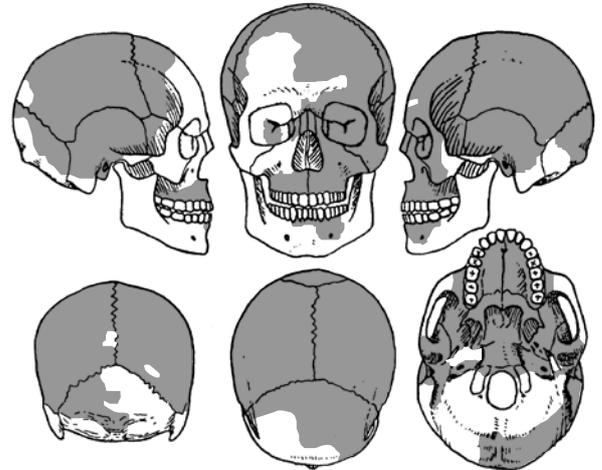


図10 六野原30-2号人骨の残存部位

〔性別〕

性別は、残存している頭蓋の部位のうち外後頭隆起および眼窩上隆起がともにやや発達していることから男性である可能性が高い。

〔年齢〕

年齢は、歯牙の咬耗度が柘原（1957）の2°a～2°2°bであることから熟年と推定される。

(3) 31号墓人骨

[残存部位]

頭蓋の一部と肩甲骨の一部が残存している(図11)。頭蓋は前頭骨、左頭頂骨、後頭骨、左側頭骨、下顎骨が残存している。残存歯牙は以下の通りである。

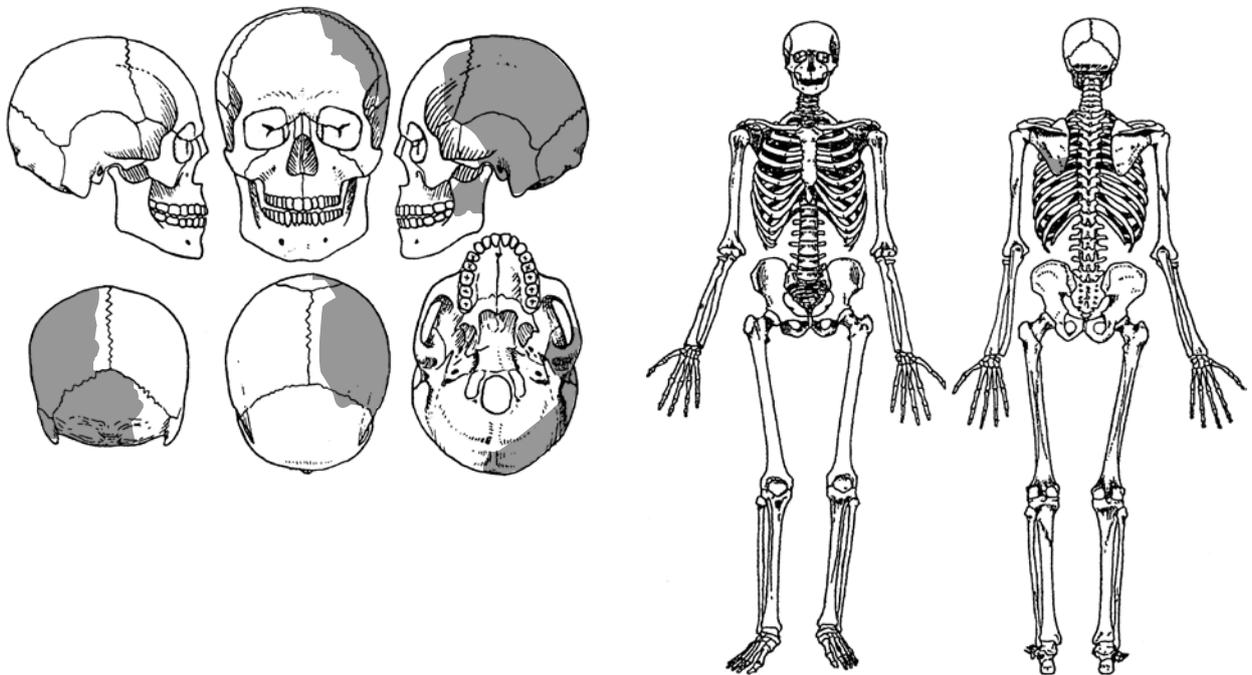
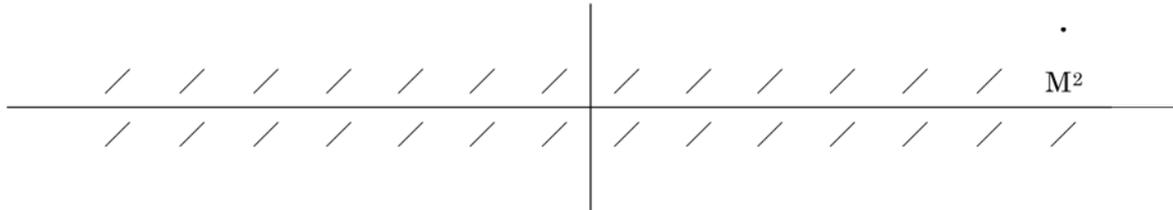


図11 六野原31号墓人骨の残存部位

[性別]

性別は乳様突起、外後頭隆起ともに発達が弱いことから女性である可能性が高い。

[年齢]

残存していた歯牙が上顎左側の第2大臼歯のみであるため、年齢推定の蓋然性は高くないものの、その咬耗度が2°a(栢原, 1957)であることから熟年と推定される。

(4) 33号墓人骨

[残存部位]

頭蓋の一部が残存しており、前頭骨と右側頭骨、下顎骨の一部が残存している(図12)。残存歯牙は右頁の通りである。

[性別]

性別は眼窩上隆起の発達が弱いことから女性である可能性が高い。

[年齢]

歯牙の咬耗度は栢原(1957)の1°c~2°aで、歯牙の咬耗度から年齢は成年と推定できる。

表2 六野原30-2号人骨と比較集団の頭蓋計測値の基本統計量

* 六野原30-2号人骨は右測眼窩の計測値

		六野原		日向		豊後			肥後・肥前・筑後			
		30-2	N	M	S.D.	N	M	S.D.	N	M	S.D.	N
1	頭蓋最大長	176.0	29	175.3	5.07	6	175.0	2.89	10	174.4	4.52	17
8	頭蓋最大幅	141.0	26	138.5	4.34	10	134.7	4.05	8	137.1	3.92	17
8/1	頭長幅示数	80.1	12	79.2	3.29	6	75.8	1.44	7	78.8	3.00	15
48	上顔高	69.0	39	63.4	3.71	11	62.8	2.92	8	66.0	5.12	16
51	眼窩幅(左)	42.0	36	41.0	2.02	11	40.0	2.80	10	41.9	1.45	16
52	眼窩高(左)	33.0	37	33.1	1.86	11	31.9	2.27	13	33.1	1.69	17
52/51(L)	眼窩示数(左)	78.6	21	80.8	5.01	11	80.1	6.65	10	79.3	4.82	16
55	鼻高	51.0	38	46.5	3.14	10	47.4	2.84	9	46.7	3.20	15

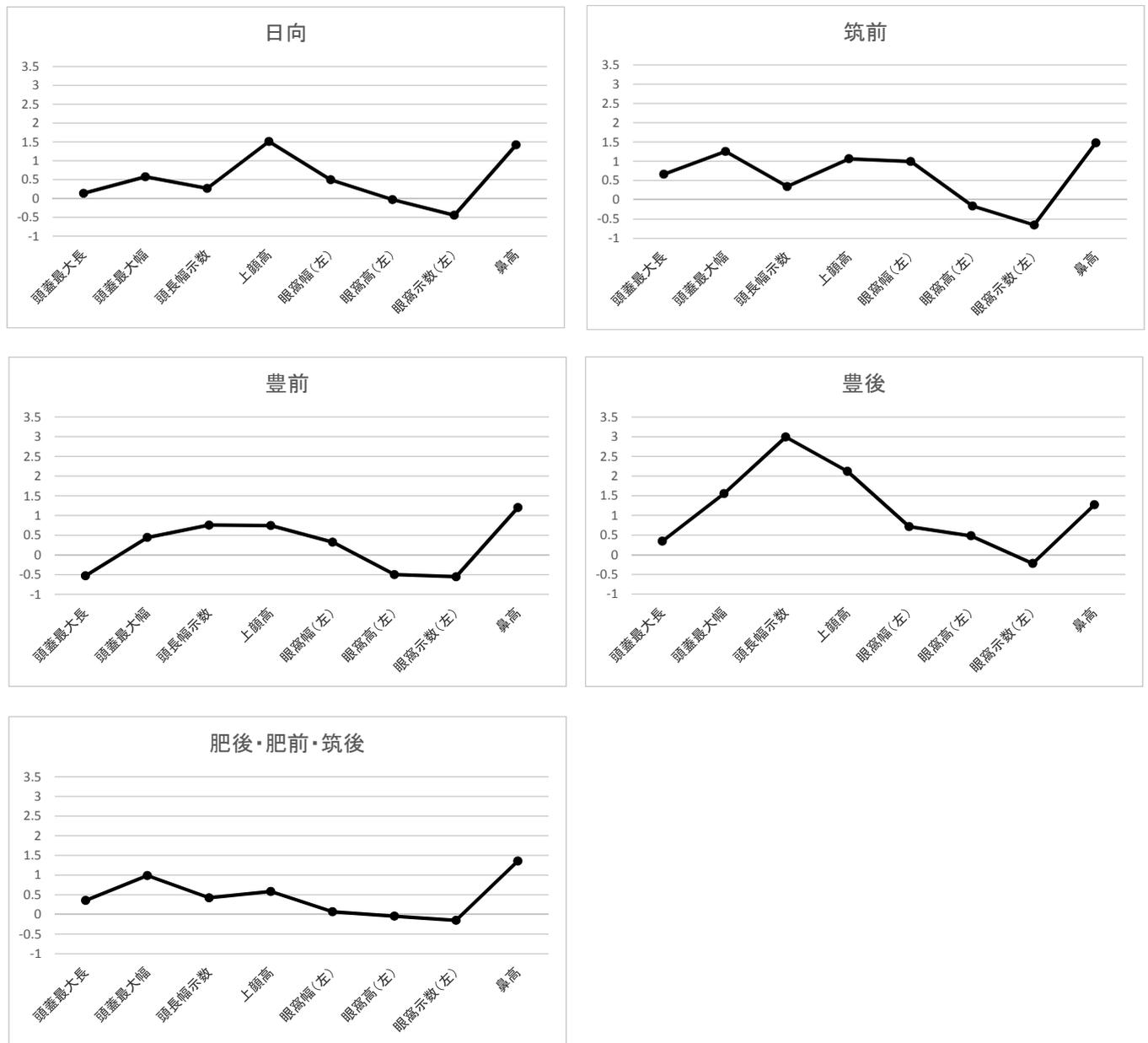


図14 六野原30-2号人骨と比較集団との偏差折線

* 六野原30-2号人骨は右測眼窩の計測値

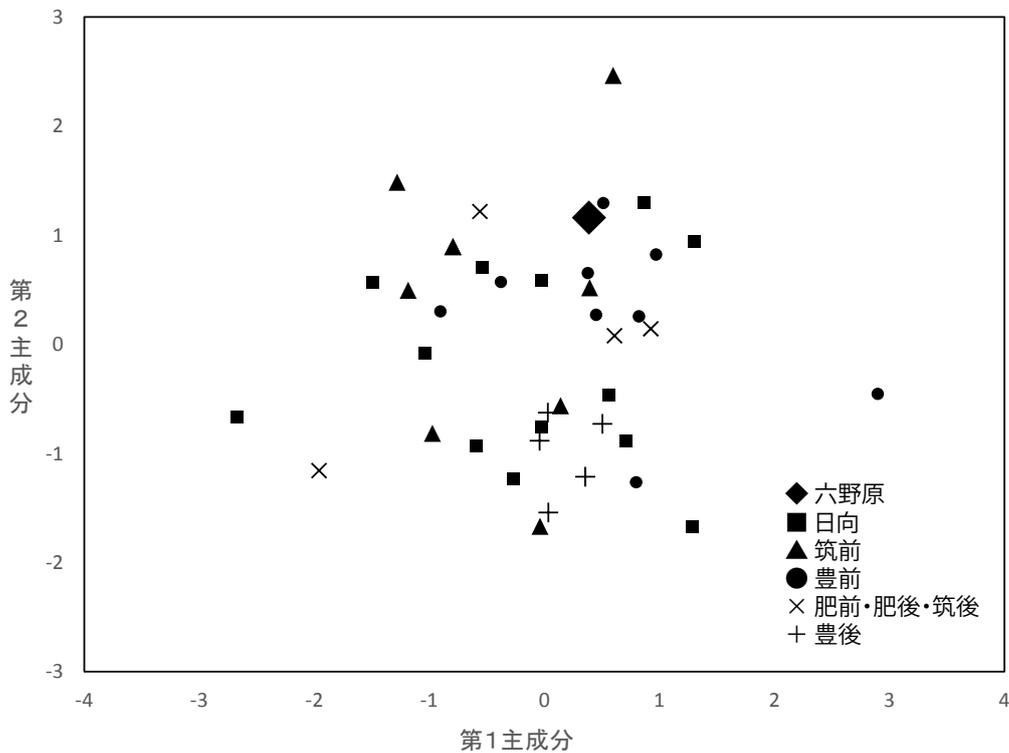


図15 頭蓋計測6項目を用いた主成分分析により得られた各個体の主成分得点の二次元展開図

* 六野原30-2号人骨は右側眼窩の計測値

表3 頭蓋計測6項目を用いた主成分分析の結果

	第1主成分	第2主成分
頭蓋最大長	0.702	-0.598
頭蓋最大幅	-0.484	0.265
上顔高	0.315	0.671
眼窩幅(左)	0.013	0.060
眼窩高(左)	0.043	0.061
鼻高	0.159	0.231
固有値	1.543	1.420
寄与率	25.7	23.7

値はより短頭性が強いことを示している。第2主成分（固有値：1.420、寄与率：23.7）は上顔高で高い正の値を示しているから、第2主成分得点が正の値はより高顔性が強いことを示している。

図15に各個体の第1主成分得点と第2主成分得点を二次元上に展開した。これをみると、六野原30-2号人骨の第1主成分得点は原点に近いものの、第2主成分得点が高いことから高顔性が強いことを示している。

(2) 分析人骨が出土した地下式横穴墓をめぐって

六野原地下式横穴墓群は埋葬人骨の基本情報が極端に乏しく、埋葬原理、親族関係の分析には制約があり、

30号墓、31号墓の被葬者の性別・年齢情報も、十分な根拠が明示されたものではなかった。今回の分析によって、31号・33号墓の2つの単独埋葬例のうち前者が女性の単独埋葬と確定した。さらに、複数埋葬の30号墓について、屍床内に埋葬される2体のうち、初葬で玄門頭位の1号人骨が成人女性、追葬で奥壁頭位の2号人骨が熟年男性であることも確定した。

5世紀後半以降、西日本においては、父系の埋葬原理（基本モデルⅡ）に転換していく状況が広く認められる（田中，1995・2008）。一方、地下式横穴墓については、宮崎県内陸部西諸県地域の地下式横穴墓における被葬者の親族関係の分析結果から、5世紀後半以降も、キョウダイ関係に基づく双系の親族が埋葬されていること（基本モデルⅠ）があきらかとなっている（田中ほか2012、吉村2011）。父系の基本モデルⅡの墓において、初葬が成人男性に限られ、主要な副葬品がこの初葬の男性に帰属する（田中，1991）のに対して、地下式横穴墓においては、これに該当しない事例が5世紀後半以降も継続して認められる。このことから、西諸県地域に限らず地下式横穴墓を築造する社会は、双系の親族関係（基本モデルⅠ）にとどまり、それが古墳時代末まで継続していたものと考えられる（吉村2011・2012）。宮崎平野部については、西都市常心原1号墓（日高1985）・5

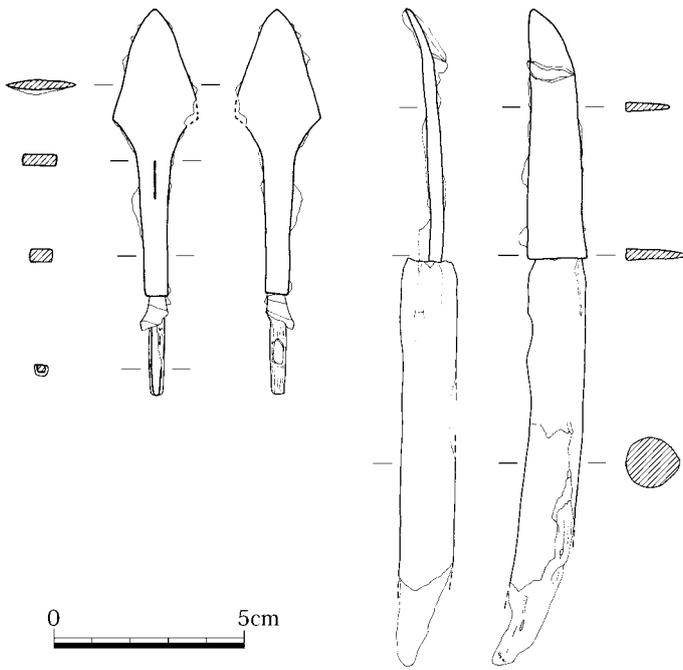


図16 六野原30号墓出土鉄鏃・刀子 (S=1/2)

同じく宮崎平野部の六野原地下式横穴墓群については、2体埋葬の5号墓において、被葬者間に副葬品の格差が認められない（1体に鹿角装剣・剣・刀各1、長頸鏃4～5が、もう1体に剣2、鹿角装刀子、圭頭鏃3、鉄斧、鉈1が帰属）ことから、5世紀後葉・末の段階まで、首長層は不明であるものの、それに次ぐ階層までの親族関係が双系の基本モデルIの段階にとどまる可能性を指摘した（吉村2015）。30号墓では、圭頭鏃1（図16）を共伴する初葬の被葬者（30-1号人骨）が成人女性、刀子1（図16）をとともう追葬の被葬者（30-2号人骨）が熟年男性であり、前者がこの墓の代表者とみなされることから、当地下式横穴墓群においては双系の親族関係に基づく埋葬がさらに6世紀前半段階まで継続していることがあきらかとなった。なお、30号墓は、

妻入りで、奥行370cmの玄室規模をもつ。玄室長5m規模をもち、当古墳群・地下式横穴墓群の首長墓系列にある最大規模の一群よりは下の一群であり、首長墓系列には含まれない（図17）。したがって、首長層の親族関係が双系にとどまるか否かはあきらかではない。

先に、古墳において女性に副葬されることの少ない鏃が、地下式横穴墓においては多く認められ、これが女性被葬者の武装、戦闘への参加、戦闘指揮といった軍事権への一定程度の関与を示すものであること、その背景には地下式横穴墓築造社会が古墳時代を通じて双系の親族関係に留まっていたことがあると論じた（吉村2016）。

30号墓の被葬者情報は、女性への鉄鏃副葬事例を新たに付加するものである。なお、先に地下式横穴墓における女性と未成人への武器副葬事例を示した（吉村2016

第1表）が、本例、またその後報告された宮崎県えびの市島内地下式横穴墓群（中野編2017）、鹿児島県鹿屋市立小野堀遺跡（繁昌ほか編2017）の事例を加えて加筆・修正³⁾したのが表4である⁴⁾。

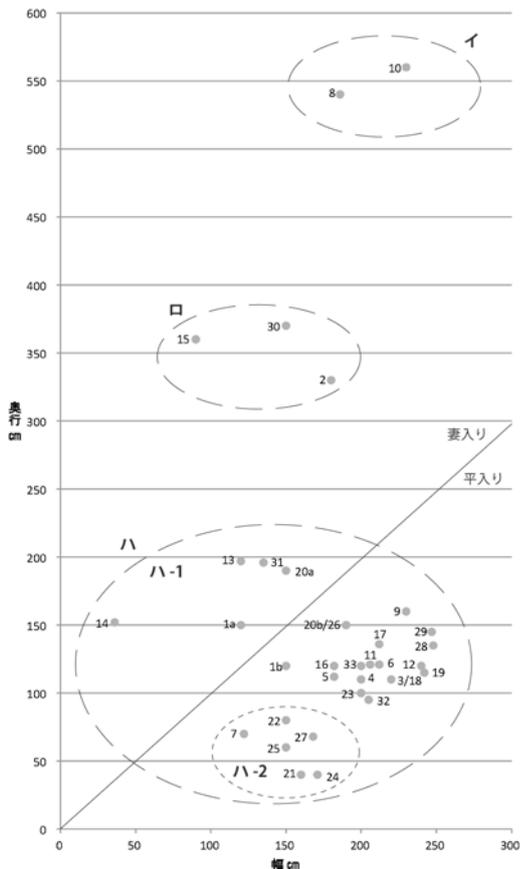


図17 六野原地下式横穴墓群の墓室規模

号墓（津曲編2003）の事例から、首長層でない地下式横穴墓の被葬者層が7世紀初めにおいても双系の親族関係にとどまる可能性が高い（吉村2012）。

6 おわりに

はじめにも述べたように、六野原古墳群・地下式横穴墓群は、宮崎平野部において、高塚古墳と地下式横穴墓の両者が存在する墓地全体の様相がおよそあきらかな唯一の墓群であり、同地域において、墓地の総合的な分析が可能な唯一の事例である。しかしながら、人骨情報の欠如が大きな障害となっていた。戦前の調査で出土した人骨は、集められ一ヶ所に改葬されてしまったので、た

表4 女性と未成人への武器副葬一覧

代表者欄:●=墓の代表者。▲=代表者の可能性あり。

網掛:淡=女性への武器副葬。濃=未成人への武器副葬。

地域	墓名 (別称)	時期	人骨				年齢	鉄鍔 (骨=骨鍔)	刀剣類 (括弧内は刃部長cm)	遺物		備考	
			体数	代表者	人骨番号	埋葬順位				性別	その他の副葬品		
I	常心原1号 (金倉上)	VI	3	▲	1	1	女	成年			耳環 刀子	綿属不明: 方頭鍔2(1・2号人骨間)、 須惠器平瓶	
				▲	2	2か3	女	若年17~18歳	3以上(長頭)				
					3	3か2	女	小児					
	常心原5号	VII	2	●	1	1	女	熟年	2	刀(29.2)	刀子1、ガラス玉、須惠器(TK209)		
					2	2	男	成年	1		刀子、須惠器(TK209)		
	六野原30号	V	2	●	1	1	女	成人	1(圭頭)			堅坑上部:須惠器杯蓋・杯身・ はそう・運(TK10)、土師器碗 片・高杯片・壺片	
					2	2	男	熟年			鹿角装刀子1		
	本庄28号 (宋仙寺11号)	IV	2	●	1	1	-	若年12~13歳	8(片刃長頭6、柳葉1、 平組1)	剣(33.4)	刀子		
					2	2	男	成年			刀子		
	前の原4号	V・VI	2	●	1	1	女	熟年	4	刀(約50)	ガラス玉100以上、刀子3、鉄斧 勾玉、管玉、水晶玉、砥石	堅坑:須惠器(TK10)、土師器(6 世紀後半)	
				2	2	不明	成人						
市の瀬5号	V	2	●	1	1	男	熟年	4(平組)	刀(88)	蕨手文鏡、刀子3	綿属不明:骨製品、弓金具、朱 玉出土		
				▲	2	2	女	成年	32(長頭)	剣2(65.6/約48)	蕨手文鏡、鉄斧、鹿角製輪尻装具、U 字型鍔先、銅鏡、イモガイ製貝輪3		
市の瀬9号	VI	4		1	2	男	熟年				綿属不明: 鉄鍔2、土師器(玄室右前隅) 耳環1対(2号か3号)		
				2	3	女	成年						
				●	3	4	-	小児8歳	3(腸袂柳葉)	剣(28.5)	刀子2		
				4	1	-	小児9歳			切子玉8、小玉295			
市の瀬10号	VI	5	●	1	1	男	成年	4(圭頭3、腸袂柳葉1)	鹿角装刀2(55/14.5)	刀子、鈍、鏝子、針	綿属不明:鉄鍔6、弓金具、骨 角器(玄室左壁前寄り)		
				2	2	男	不明						
				3	3	女	成年	4(腸袂柳葉1、長頭3)					
				4	4	男	成年		鹿角装剣1				
				5	5	男	成年			鹿角装刀子1、			
中迫1号	V	1	単独	1	1	女	成年	2(圭頭)	鹿角装刀(60以上)	平玉361、玉(ヘンダントップ状)1、鉄斧、 U字型鍔先、イモガイ製貝輪1	玉類は腰部から。堅坑中に土 師器高杯片		
II	大萩30号 (F-6)	VI	2		1	1か2	女	成年	いずれかに1		刀子	人骨番号照合不能	
					2	1か2	女	成年					
	大萩37号	IVかV	5	▲	1	5	男	若年				2号か3号に綿属か: 2群(圭頭鍔2、刀子)、 3群(圭頭鍔2、長頭鍔1)、 4群(剣1、圭頭鍔2)	
					▲	2	4	女	若年17~18歳				
					▲	3	3	男	熟年				
					●	4	2	女	熟年	2(圭頭)	鹿角装剣(50.5)	U字型鍔先	
						5	1	男	成年				
	日守8号 (55-1)	II	3	●	1	3	男	熟年	2(圭頭1)			人骨番号は人骨報告に従う。	
					2	2	-	幼児					
					3	1	女	成年		短剣(18.0)	オオツタノハ製貝輪4		
	日守9号 (55-2)	II	2	▲	1	1	男	成年	4(柳葉)	短剣2(17以上/25)	鈍、鍔先	綿属不明:圭頭鍔5、刀子2、鍔 先1(右壁棚上および落下)	
					▲	2	2	女	熟年	6(柳葉・圭頭)	剣(41)、短剣(21.1)	刀子、オオツタノハ製貝輪16	
	立切4号	IIIかIV	3	●	1	1	女	熟年	3(圭頭)、鉄鍔?1	剣1、短剣(槍先)(17.4)	刀子3(鹿角装2)		
					2	3	男	熟年					
					3	2	男	成年	3(圭頭)	鹿角装剣(44.4以上)	鹿角装刀子3、鈍1		
	立切6号	IIIかIV	3	▲	1	1	男	熟年				右棚上2号人骨直上: 鹿角装剣1、圭頭鍔3 前壁棚上右:刀子1	
					▲	2	2	男	熟年				
					3	3	女	成年	3(圭頭)		刀子2		
	立切35号	III	4	●	1	1	-	若年13歳		刀(74.4)、 鹿角装剣2(35.5/19.8)	蕨手刀子1、刀子2	綿属不明:圭頭鍔2(左棚上2~4 号足許) 綿属不明:圭頭鍔1(左棚下床 面2号人骨足許)	
					2	2	女	成年			イモガイ製貝輪6、白玉100以上		
				3	3	女	熟年			鉄斧1			
				4	4	女	熟年						
立切38号	III	5	▲	1	1?	女	成年				綿属不明:圭頭鍔5、刀子2(右 棚上前隅)		
				▲	2	2?	男	熟年		剣(32.6)	綿属不明:鹿角装刀子1(左棚上 1cmほど左角天井部)		
				●	3	3?	男	成年					
				●?	4	4?	女	成年		刀(75.4)			
					5	5?	不明	成年					
立切40号	IV	3	●	1	1	女	成年			刀子1			
				2	2	女	熟年	9(長頭)					
				3	3	男	熟年			刀子1			
立切63号	IIかIII	5	●	1	1	女	成年	6(圭頭)	剣(14以上)、鹿角装剣 (30.1)	刀子2	右棚上2号人骨直上: 刀子1 右棚上2号・3号人骨直上: 剣1、圭頭鍔2 右棚上前半: 剣1、刀子2		
				2	2	-	幼児5歳			鉄鍔1			
				3	3	男	成年						
				4	4	男	熟年						
				5	5	女	成年						
立切64号	III	5	●	1	1	男	老年		剣(28以上)		綿属不明: 刀子4(右棚上、4か5号人骨上)		
				2	2	-	小児10歳			刀子1、オオツタノハ製貝輪2			
				3	3	女	熟年						
				4	4	女	熟年						
				5	5	-	幼児3歳	1(圭頭)					
旭台12号	IIか	5	●	1	1	女	成年	2(圭頭1)		刀子2	綿属不明:鉄鍔1		
				2	2	女	成年~熟年						
				3	3	男	成年半ば						
				4	4	男	成年前半						
				5	5	男	熟年後半						
須木上ノ原8号	?	1	●	1	1	-	若年16歳前後	2(圭頭)			報告に鉄鍔実測図・写真なし		
須木上ノ原9号	IIIかIV	3		1	3	男	成年		剣(49)		人骨番号は人骨報告に従う。 右壁面:刀子		
				2	2	男	熟年						
				●	3	1	女	成年	3(圭頭)	鹿角装剣(42)、剣(45)	白玉、豎櫛		
東二原8号	VかVI	3	▲	1	1	女	熟年	2(圭頭1、柳葉1)		刀子1、イモガイ製貝輪4	綿属不明:刀1(右棚上2号直上、1 号か2号)		
				▲	2	2	男	熟年			綿属不明:長頭鍔5、骨鍔20(3 号頭骨奥、2号人骨手前)		
				3	3	男	熟年			刀子1			
灰塚7号	?	1	単独	1	1	女	熟年		剣(15.7以上)				
島内16号	IVかV	2	▲	1	1	女	熟~老年	3(圭頭)					
				▲	2	2	男	熟年	5(長頭)				

六野原地下式横穴墓群出土の古墳時代人骨

代表者欄: ●=墓の代表者。▲=代表者の可能性あり。

網掛: 淡=女性への武器副葬。濃=未成年への武器副葬。

地域	墓名 (別称)	時期	体数	人骨				年齢	遺物			備考	
				代表者	人骨 番号	埋葬 順位	性別		鉄鏃 (骨=骨鏃)	刀剣類 (括弧内は刃部長cm)	その他の副葬品		
III	島内20号	VかVI	5		1	2	不明	不明					
					2	3	不明	成年前半			刀子		
					3	4	-	若年			刀子		
					4	5	男	若年	2(圭頭)、骨19				
					●	5	1	女	成年	11	鹿角装剣(65以上)	刀子	
	島内21号	IV	3	●	1	1	不明	成年	16(長頭)	横刃板鋸留短甲、横刃板鋸留衝角付青、蛇行剣	鉄斧、刀子、鉈	帰属不明: 蛇行剣1(1号か3号)、圭頭鏃2(1号か3号)	
					2	3	女	成年		蛇行剣	刀子		
					3	2	不明	成年					
	島内28号	?	2	●	1	1	女	熟年		剣(29)	刀子2		
					2	2	男	成年					
	島内30号	?	1	単独	1	1	女	成年	1		刀子	遺物紛失	
	島内35号	II	4		1	1	女	熟年	4(柳葉1、腸袂三角3)		イモガイ製貝輪8	帰属不明: 短剣1(右壁沿い、2号か3号) 帰属不明: 柳葉鏃3(右壁沿い前寄り、3号か4号)	
					▲	2	2	不明	成年				
					▲	3	3	-	幼児5歳前後				
					4	4	男?	成年					
	島内36号	II	4	●	1	1	-	若年15~17歳	2(圭頭)	剣(24.4)			
					2	2	不明	成年~熟年					
					3	3	不明	成年					
					4	4	不明	成年	2(圭頭1、柳葉1)				
	島内39号	II~IV	3	●	1	1	女	成年	6(無茎1、柳葉1、圭頭3、長頭1)、骨4~8				
					2	2	男	成年			刀子		
					3	3	-	小児6~7歳					
	島内46号	VI	3	●	1	1?	-	若年16~18歳	4(三角形1、方頭2)	鹿角装刀(26以上)			
					2	3?	不明	成人			刀子		
					3	2?	女	成年			刀子		
	島内50号	V	6		1	1~4	不明	不明				蛇行剣、鉈: 3号か4号に帰属	
				2	2~5	不明	成年	2(腸袂三角1、長頭1)					
				▲	3	3~6	女	熟年	4(長頭2、長頭2)				
				4	3~6	不明	熟年						
				▲	5	2~5	-	小児9~10歳	1(圭頭)	短剣(26)	刀子		
				6	1~4	不明	成年						
島内52号	?	3		1	1	女	成年						
				▲	2	2	女	若年16~17歳					
				▲	3	3	女	成年	いずれかに骨3				
島内58号	II	2	●	1	1	女	若年18~20歳	5(圭頭2、柳葉1、腸袂柳葉1)					
				2	2	男	熟年		鉄鏃				
島内63号	IVかV	7		1	1	女	成年				3・4号と6・7号には関係性無し。		
				2	2	男	成年	2(圭頭)			3号か4号: 刀(3・4号間)、骨27(4号足許)、刀子(3・4号頭間)		
				▲	3	5?	男	成年			帰属不明: 長頭鏃13~15、鉈(右壁沿い1・2号間)		
				▲	4	6?	女	熟年					
				5	7	-	小児?						
				6	4?	女	成年	1(長頭)					
				▲	7	3?	女	若年	剣(51)				
島内77号	IV	4	●	1	1か2	男	成年	16以上(長頭15以上、圭頭1)	刀	胡録、刀子			
				2	2か3	男	成年						
				3	3~4	女	成年	2(長頭鏃1)					
				4	1~4	女	熟年	1(腸袂三角)	剣(35.5)				
島内85号	IIかIII	3		1	1	女	成年						
				2	2	男?	成年						
				●?	3	3	-	幼児	4(圭頭2、垂袂三角2)	剣(58)			
島内87号	VI	2	●	1	1?	男	熟年	12(三角形)		刀子	1号人骨骨盤に骨鏃刺さる。長頭鏃棘間。		
				2	2?	-	小児5~6歳	4(長頭)		鹿角装刀子			
島内97号	IIIかIV	3	▲	1	1	不明	成年				1号か2号: 圭頭鏃2(1・2号頭間)		
				▲	2	2	男	成年					
				▲	3	3	女	熟年	2(圭頭)				
島内110号	V	4	●	1	1	-	小児9~10歳	2(圭頭1)	短剣(20)	刀子			
				2	2	男	若年18~20歳						
				3	3	女	成年	2(圭頭1、柳葉1)					
				4	4	男	熟年	4(三角3、長頭1)			刀子		
島内113号	VかVI	5	●	1	1	男	成年	1(長頭)	刀(61.1以上)	刀子、鏃子			
				2	2か3	-	小児7歳	2(長頭)					
				3	3か4	女	老年	15(長頭)、骨2					
				4	4か5	-	幼児3~4歳			刀子			
				5	1~5	男	成年	1(長頭)、骨1					
島内115号	V	5	▲	1	1か2	女	成年			イモガイ製貝輪2	帰属不明: 馬具(曹・辻金具)、衝角付青(右奥。1~3号)、刀1(2・3号間)		
				2	2か3	-	小児6歳			刀子2			
				▲	3	3か4	男	熟年	7(圭頭6、長頭1)	鹿角装短刀1	錫製耳環1対		
				4	4か5	-	若年15~16歳	1(長頭)					
				5	1~5	女	熟年		刀(24.5以上)	刀子1			
島内119号	VIか	4	●	1	1か2	女	成年	13(腸袂柳葉)	刀(49.5)	鏃子	帰属不明: 鉄鏃2(玄室中央)		
				2	2か3	-	小児8~9歳	4(腸袂柳葉・三角)					
				3a	1か2	-	小児8~9歳						
				3b	1か2	-	幼児2~3歳			刀子			
島内123号	VかVI	4	●	1	1~3	男	熟年		刀(33.6)		3号人骨は4号人骨の一部である可能性あり。		
				2	2~4	女	熟年			耳環			
				3	2~4	-	未成年	3、骨15~19					
				4	1~3	-	小児6~12歳	1		刀子			
島内131号	VかVI	4	●	1	1	男	成年後期				3号人骨左下肢中央に赤色顔料粗粒塊。		
				2	2	女	成年	3(腸袂三角2、菱形1)、骨6	小刀(19.5)				
				3	4	不明	若年13~15歳			イモガイ製貝輪、刀子、錫製耳環1対			
				4	3	不明	幼児3歳	2(長頭)		錫製耳環1対			

代表者欄:●=墓の代表者、▲=代表者の可能性あり。

網掛:淡=女性への武器副葬。濃=未成年への武器副葬。

地域	墓名 (別称)	時期	人骨						遺物			備考
			体数	代表者	人骨 番号	埋葬 順位	性別	年齢	鉄鍬 (骨=骨鍬)	刀剣類 (括弧内は刃部長cm)	その他の副葬品	
III	島内137号	VかVI	4	●	1	1~3	女	成年	6(方頭1、三角3、圭頭1、短茎1)、骨18前後		粥、鹿角装刀子	
					2	2~4	女	成年				
					3	2~4	女	成年後期				
					4	1~3	不明	幼児				
	島内138号	VかVI	4		1	1~3	女	成年			朱玉状塊 鹿角装刀子、朱玉状塊 イモガイ製貝輪3	
					2	2~4	不明	熟年				
					3	1~3	男	成年後期				
				●	4	2~4	女	成年				
	島内140号	VかVI	3		1	1~3	不明	成人			鹿角装刀子 用途不明鹿角製品、鹿角装刀子	
				●	2	1か2	不明	幼児3~4歳				
					3	2か3	女	成年				
	島内143号	IVかV	6		1	2~5	女	成年			鹿角装刀子	
					2	3~6	不明	小児7歳				
					3	2~4	男	熟年				
					4	3~5	不明	成人				
●				5	4~6	不明	成年					
				6	1	不明	不明					
島内147号	?	1	単独	1	1	女	成年		小刀(19.1)			
島内148号	III~V	3		1	1	女	成年後期	3(圭頭)		鹿角装刀子		
			●	2	2	不明	成年					
				3	3	男	成年後期					
島内152号	IV	3	▲	1	1~3	不明	不明	5(長頭)	鐔付刀(48.1)	馬具(轡、金銅製飾金具2、鉄地金銅張飾金具4、鈎具)、弓(弓飾金具3)	竪坑、土師器高杯(丹塗)6、須恵器杯蓋2・杯身7・横瓶1・壺1(破砕)、敲石1	
				2	1か2	女	老年					
			▲	3	2か3	女	成年					
IV	築池2001-3	II	1	単独	1	1	女	成年	3(圭頭2、短茎1)、骨6	劍(61)	獸骨製鞘留	
IV	築池2009-SX01	II	1	単独	1	1	女	成年	5(圭頭3、方頭1)	刀(34.3以上)	鐔骨、勾玉、管玉、ガラス小玉、刀子	
V	立小野塚35号	II	1	単独	1	1	女	成年	2(圭頭)			

【地域区分】I:平野部、宮崎平野部 II:内陸部、西諸県地域 III:内陸部、えびの・大口盆地 IV:内陸部、都城盆地・北諸県地域 V:平野部、大隈半島志布志湾沿岸

とえ再発掘したとしても、どの墓から出土した人骨かを識別することはほぼ不可能である。このたび、戦後に調査された限られた事例ではあるが、人骨情報の詳細をあきらかにできた意義は大きい。

地下式横穴墓出土人骨については、本報告例同様に、詳細な分析がなされていない資料がまだ多数存在する。今後、他の事例についても、同様の検討を継続し、親族構造の分析、副葬品との関連性とその社会的意味の解明など、地下式横穴墓研究の進展をはかりたい。

※本稿は、執筆者2人の議論のもと、1、5-(2)、6を吉村が、それ以外を高椋が執筆した。

謝辞

本稿の執筆にあたって、以下の方々から様々なご教示、ご助言を賜りますとともに、以下の機関のお世話になりました。記して感謝申し上げます(五十音順、敬称略)。有馬絢子、茂山 護、田中良之(故人)、長津宗重、中村耕治、永山修一、新名祐志、東 憲章、藤木 聡、藤島伸一郎、舟橋京子、北郷泰道、米元史織 国富町教育委員会、宮崎県立西都原考古博物館

資料の閲覧にあたっては本部裕美氏のお手を煩わせました。図版の作成にあたっては垣内喜久子氏の援助をいただきました。あわせて感謝申し上げます。

(付記)

本稿は平成26年度~29年度 科学研究費基盤研究(B)「古墳時代中期における甲冑生産組織の研究-「型紙」と製作工程の分析を中心として-」(JSPS KAKENHI Grant Number 26284128, 研究代表者:吉村和昭)の成果の一部である。

【註】

- 1) 調査された地下式横穴墓の番号は35号まで付されているが、34号墓は昭和17年調査の10号墓の再掘である(吉村2015)。したがって、調査基数は34基である。
- 2) 未報告。調査記録の詳細について、国富町教育委員会よりご提供いただいた。
- 3) 先の集成(吉村2016 第1表)では、女性への武器副葬事例として立小野塚148号墓を挙げている。この地下式横穴墓の被葬者は20代の女性と速報され(藤島2015)、報道もなされたところであったが、正式報告では、壮年(=成年)男性に変更されている(竹中2017b)。また、地下式横穴墓の番号が調査区全体で再編成されており、90号墓に変更されている(繁昌ほか編2017)。
- 4) 第4表に記した時期区分の基準はおよそ以下の通りである。I期:短頸鍬出現以前、大形平根系鉄鍬が盛行する以前の段階。前期末・中期初頭(5世紀初めまで)/II期:短頸鍬・大形の平根系鉄鍬の出現、高木分類の大形のB1(圭頭根根斧箭式)の出現段階。須恵器TK73・216型式。中期前半期(5世紀前半)/III期:鉄鍬頸部が伸長、一部で長頸鍬(川畑分類の長頸A1・B1)

六野原地下式横穴墓群出土の古墳時代人骨

が出現。須恵器TK216・208型式。中期中頃（5世紀中頃）／IV期：長頸鏃の定型化（川畑分類の長頸A2・B2）。須恵器TK23・47型式。中期後葉・末（5世紀後葉・末）／V期：MT15・TK10型式。後期前半（6世紀前半）／VI期：TK43型式。鉄鏃被の出現。後期後半（6世紀後半）／VII期：TK209・217型式。後期末以降（6世紀末～7世紀前半）

【参考文献】

川畑 純 2009「前・中期副葬鏃の変遷とその意義」『史林』第92巻第2号、1～39頁

九州大学医学部解剖学第二講座編 1998「例言」『日本民族・文化の生成』2 九州大学医学部解剖学第二講座所蔵古人骨資料集成、六興出版、2頁

繁昌正幸・新屋敷久美子・中村有希・（藤島伸一郎）編 2017『立小野堀遺跡1』東九州自動車道建設（志布志IC～鹿屋串良JCT間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書、公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書第16集、公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター

瀬之口傳九郎・石川恒太郎 1944「六野原古墳調査報告」『宮崎県史蹟名勝天然紀念物調査報告』第13輯、宮崎縣

高木恭二 1981「圭頭斧箭式鉄鏃について」『城2号墳』宇土市埋蔵文化財調査報告書第3集、宇土市教育委員会、44～52頁

竹中正巳 2017a「宮崎県えびの市島内地下式横穴墓群出土の人骨 -131号墓～162号墓から出土した人骨-」『島内地下式横穴墓群V 灰塚地下式横穴墓群』えびの市埋蔵文化財調査報告書第54集、えびの市教育委員会、281～318頁

竹中正巳 2017b「鹿児島県鹿屋市立小野堀遺跡地下式横穴墓群出土人骨」『立小野堀遺跡1』東九州自動車道建設（志布志IC～鹿屋串良JCT間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書、第2分冊、公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書第16集、公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター、335～340頁

田中良之 1991「上ノ原横穴墓群被葬者の親族関係」『上ノ原横穴墓群II』、大分県教育委員会、488～527頁

田中良之 1995『古墳時代親族構造の研究-人骨が語る古代社会-』、柏書房

田中良之 2008『骨が語る古代の家族-親族と社会-』、吉川弘文館

田中良之・舟橋京子・吉村和昭 2012「宮崎県内陸部地下式横穴墓被葬者の親族関係」『九州大学総合研究博物館研究報告』No. 10、127～144頁

津曲大祐編 2003『外原遺跡群』西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第34集、西都市教育委員会

栃原 博 1957「日本人歯牙の咬耗に関する研究」『熊本医学会雑誌』31巻、607～656頁

長津宗重・茂山護 1982「六野原地下式横穴30号・31号調査報告」『国富町文化財調査資料』第2集、国富町教育委員会、45～66頁

中野和浩編 2017『島内地下式横穴墓群V 灰塚地下式横穴墓群』えびの市埋蔵文化財調査報告書第54集、えびの市教育委員会

馬場悠男 1991「人体計測法 II 人骨計測法」『人類学講座』別巻1、雄山閣出版、174～182頁、192、195頁、223～224頁、318～319頁

日高正晴 1972「宮崎県桃木畑地下式A号墳」『古代学研究』第64号、33～36頁

日高正晴・岩永哲夫 1978「吹上地下式古墳発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』第20集、宮崎県教育委員会、9～15頁

日高正晴 1985「金倉上地下式墳」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第1集』、西都市教育委員会、13～32頁

福尾正彦 1980「日向中央部における地下式横穴とその社会」『古文化談叢』第7集、105～141頁

藤島伸一郎 2015「立小野堀遺跡・町田堀遺跡の調査」『第12回古代武器研究会発表資料集』、古代武器研究会・山口大学考古学研究室、1～13頁

松下孝幸 1990「南九州地域における古墳時代人骨の人類学的研究」『長崎医学会雑誌』65巻4号、781～804頁

吉村和昭 2011「宮崎県西諸県地域における地下式横穴墓の墓群形成と埋葬原理-立切地下式横穴墓群を対象として-」『九州考古学』第86号、41～64頁

吉村和昭 2012「地下式横穴における埋葬原理と女性への武器副葬」『南九州とヤマト政権-日向・大隅の古墳-』大阪府立近つ飛鳥博物館平成24年度秋季特別展図録、大阪府立近つ飛鳥博物館、147～155頁

吉村和昭 2015「宮崎県平野部における地下式横穴墓群の群構造と埋葬原理-六野原古墳群・地下式横穴墓群を対象として-」『九州考古学』第90号、61～88頁

吉村和昭 2016「地下式横穴墓における女性と未成人への武器副葬」『考古学は科学か 田中良之先生追悼論文集』下、中国書店、727～744頁

Buikstra J.E. and Ubelaker D.H. 1994. Standards for Data Collection from Human Skeletal Remains. Arkansas Archeological Survey Research Series, No. 44. pp. 15-20, Fayetteville, Arkansas.

Martin-Saller. 1957. Lehrbuch der Anthropologie. Bd. I. Gustav Fischer Verlag. Stuttgart.

【図・表出典】

図1～4・17：吉村（2015）より転載
表4：吉村（2016）表1を増補・修正

西都原出土の旧石器について

沖野 誠

1 はじめに

西都原台地には特別史跡である西都原古墳群が所在しており、同古墳群に関する諸研究はもとより、古墳群を取りまく諸環境等の研究についても枚挙に遑が無い(北郷2005・宮崎県立西都原考古博物館2015・東2017)。しかしながら、資料の数的制約等のため、これまで同古墳群築造前夜以前の当台地の状況について言及される機会は多くなかったといえる。とはいえ、当台地を舞台とする連綿とした人類活動と営為の累積が、同古墳群の築造に至る背景に関与したであろうことは想像に難くない。そのため、当台地における『西都原古墳群前史』を紐解くことは極めて重要な意義があると考えられる。

本稿では、当台地上で確認されている旧石器時代資料を整理・集成し、また新資料を追加することで、『西都原古墳群前史』の序章にあたる人類活動の黎明について今一步踏み込んでみたい。

2 西都原台地および周辺の地理的環境について (図1)

旧石器時代における西都原台地とそれを取りまく環境を現状から知ることは容易でないが、該期集団或いは以後の集団が、当台地を遊動ないし居住、および墓域として選択したことには当台地とその周辺環境に大きな要因があったと思われる。そのため、該期における諸環境を類推する一助として、以下に現状から得られる当台地および周辺環境の様相について整理しておく。

当台地の位置環境については、太平洋側から流入する海流によって日向灘沿岸に重層的砂丘が形成されていることにより、東側に位置する海岸線の変遷については不明な部分が多いものの、西側には比較的急峻で東北から南西へと至る九州山地が大きな障壁として聳え立っていることから、当台地は南北に開けた環境となっている。このような立地下にある当台地は、地質学的には西都原段丘とも呼称され、周辺に所在する三財原段丘や新田原段丘と時を同じくする後期更新世前半の高海面期に形成された中位段丘群の一つに位置づけられており、その標高は約60～80mを測る。当台地を構成する段丘堆積物には、阿蘇4火砕流堆積物が含まれており、且つ相当の岩戸降下軽石堆積物が被覆していることを根拠に、約8～9万年前に形成されたとされる(宮崎地質研究会2013・西

都市史編さん委員会2016)。

当台地の東側沿いに流下する一ツ瀬川は、九州山地に源を発し、沖積地を形成しつつ西都市内を經由後日向灘に注ぐ二級河川であり、三財川や三納川等の支流を含め構成される一ツ瀬川水系の本流にあたる。水量も多く、古来より人びとの生業や交通に利用されてきた河川でもある。当台地はこの一ツ瀬川河口から直線距離として約12kmの距離にあり、河口域から中流域に向かって南北逆S字状に最も大きく蛇行する地点から約2kmと、河川最大の変化点にほど近いことも特徴である。一ツ瀬川本流の河川沿いを下流域から中流域に向かって歩き、この最も大きな変化点付近に辿り着くと、九州山地から南東方向へ張り出すように伸びた台地そのものが、とりわけ大きなランドマークであったことを意識させる。

当台地に立つと、遠方から望む平坦な景観とは裏腹に微地形に富むことが分かる。この微地形は規模的大小によってその性格が異なると考えられるが、主として流水等によって台地上に形成された小規模な開析谷等によってかたち作られたと考えられるものが散見され、その存在が緩やかな台地上の起伏や諸変化をより鮮明にしている。西都原古墳群を構成している各支群は、これまでの研究で得られた年代観や墳墓の性格・密度等種々の成果を踏まえつつ、これら微地形の介在も考慮し区分されることから、逆説的であるものの、台地上にみとめられる比較的鮮明な微地形の変化は、少なくとも古墳時代以前に形成されたものと推測される。

3 西都原周辺の旧石器時代遺跡 (図1)

西都原台地周辺では、行政による東九州自動車道建設に伴う遺跡発掘調査が行われ、その内の一部には旧石器時代遺跡も確認されており、詳細報告が成されている。それらの成果は、発掘調査事例の少ない当台地周辺において貴重な考古学的情報を提供し、該期研究の骨子となるものである(西都市史編さん委員会2015・2016)。

別府原遺跡・別府原第2遺跡

別府原遺跡・別府原第2遺跡は、西都市西南部から宮崎市佐土原町北西部にかけて広がる標高約100mの都於郡・仲間台地上に所在している(宮崎県埋蔵文化財セン

ター2002)。別府原遺跡ではA T下位段階、A T上位段階、そして細石器段階の大きく3期に区分される各段階において礫群や各時期に帰属される石器群が出土している。また、別府原第2遺跡ではVI層(Kr-Kb二次堆積層)からVII層にかけて細石刃核や二次加工剥片等が出土している。

宮ノ東遺跡

更新世に古一ツ瀬川により新田原段丘面が開析されることで形成された岡富段丘面に所在している宮ノ東遺跡では、VIII層(Kr-Kb相当層)・IX層(MB1相当層)層境において3基の礫群とナイフ形石器・台形石器・角錐状石器をはじめとしたA T上位石器群が出土している(宮崎県埋蔵文化財センター2008)。

4 西都原出土の旧石器時代資料

(図2・3・4、写真1・2、表1)

西都原台地において確認されている旧石器時代資料は、上述の通りこれまで触れられる機会に恵まれなかったが、時空間的指標となる資料を含め着実に蓄積され、該期の様相に少なからず踏み込むことが可能になりつつある。

以下にこれまで当台地において確認されている旧石器時代資料およびそれに比定し得る資料を集成し、合わせて新出資料も報告する。¹⁾

西都原173号墳調査出土資料

図4-1は、黒色をなす頁岩製の二次加工剥片もしくはスクレイパーである(宮崎県立西都原考古博物館2007)。²⁾平坦打面を有し、剥離角が大きい。主要剥離面にみとめられるバルブは多少発達し、バルブスカーもみとめられる。背面には斜位ではあるものの長軸に長い剥片を指向したと考えられる連続した3枚の剥片剥離がみとめられ、剥離角の大きさも考慮すると、連続した同様の剥片剥離がある程度進行した段階の剥片であることがわかる。剥片頭部右側縁から中間部まで主要剥離面側からの入念な調整剥離が施されており、同中間部には微細剥離痕が顕著である。末端部にも右側縁頭部から中間部にかけてみられるような主要剥離面側からの調整剥離が施されているが、素材本来の刃部を改変した剥離であることから上記の調整剥離とは性質が異なるものである。これらの調整剥離および微細剥離痕については、報告書中において一括して『使用の痕跡』と積極的に評価されている。また、剥片末端部主要剥離面側には薄く長い衝撃剥離状の剥離が1枚みとめられる。

報告書中では『墳丘に伴わない調査』の中で、縄文時代から古代の間に該当しない『その他の出土遺物』と報告されているものの、その出土状況は報告されておらず詳細が判然としない資料である。

西都原284号墳調査出土資料

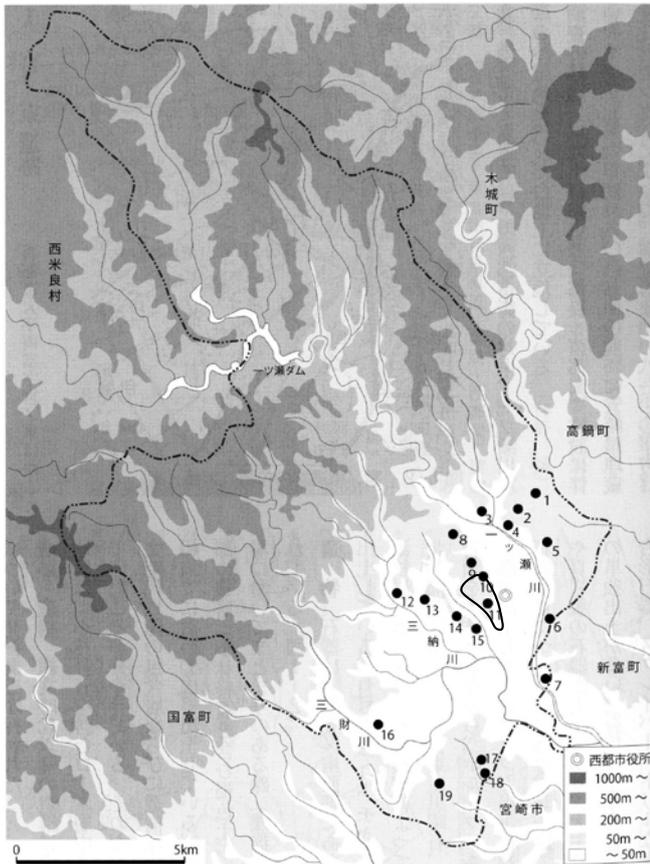
当調査により得られた成果は、西都原台地における旧石器時代資料および遺構の中では最も重要な成果である(宮崎県立西都原考古博物館2014)。

図3はIV層暗褐色土層で検出したとされる礫群である。調査トレンチが狭小であるため全体像は不明なもの、平面分布における礫相互の密着はみられないことから分散型の礫群といえる。礫群の構成礫は、在地石材と考えられる転磨面を有する砂岩・ホルンフェルス・尾鈴山酸性岩類によって構成されており、被熱によるものと考えられる赤化が顕著であるが破碎礫はみられない。

図4-2は、欠損部が大きく明確な器種は断定できないが、主要剥離面側から施された急斜度のブランディングとその後の微細な調整剥離によって角錐状石器ないしナイフ形石器の一部であると判断できる。残存している部位は、長さ1.8cm、厚さ0.9cmを計り、現状でも素材の厚みがピークに至らないことから、やや肥厚な素材剥片を使用したものと推測される。本体の大部分を占める3枚の剥離面は、明確な打点がみとめられないこと、剥離面の切り合い関係で最も新しいこと、ツールを構成していると考えられる剥離面と同様の風化がみとめられることなどから、意識的な剥離面ではなく素材に対し調整剥離を施す段階の偶発的剥離によって破碎したものと推測される。石材は白色に近い風化がみとめられる流紋岩であるが、石器石材として利用できる流紋岩は当台地周辺および県央部にはみとめられず、主要石器石材として用いられている流紋岩は、五ヶ瀬川流域以北において産出・流下していることから搬入品である可能性が高い(沖野2014)。その他にも、風化面が著しく粉状となるホルンフェルス製の石刃が2点³⁾、斑が入る黒色の頁岩製の石刃が1点出土しており、これらは背面に連続した同様の石刃剥離がみとめられる点で共通している。

西都原西遺跡調査出土資料

図4-3は、黒曜石製の細石刃核である。細石刃剥離作業面には9枚の細石刃剥離がみとめられるが、両端にみられる3枚の細石刃剥離は、剥離面の切り合い関係からその他の剥離方向を同じくする6枚の剥離作業面よりも



1. 竹尾寺跡付近？ 2. 東原遺跡 3. 串木遺跡 4. 困遺跡 5. 轟遺跡
6. 大口川遺跡 7. 宮ノ東遺跡 8. 宝財原遺跡 9. 丸山遺跡
10. 石貫遺跡 11. 諏訪遺跡（妻地区） 12. 鴨目原遺跡 13. 永野遺跡
14. 松本遺跡 15. 清水遺跡 16. 諏訪遺跡（三財地区）
17. 黒貴寺跡付近？ 18. 別府原・別府原第2遺跡 19. 荒武遺跡

図1 西都原台地と周辺遺跡位置図（西都市史編さん委員会2015を一部改変）※○部が西都原古墳群。

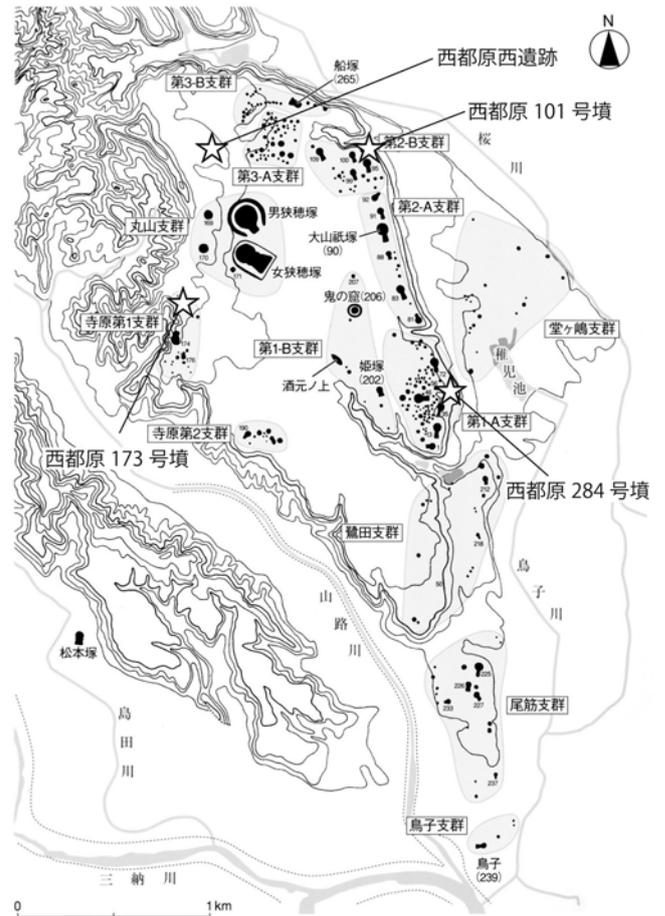


図2 西都原古墳群と旧石器出土位置図

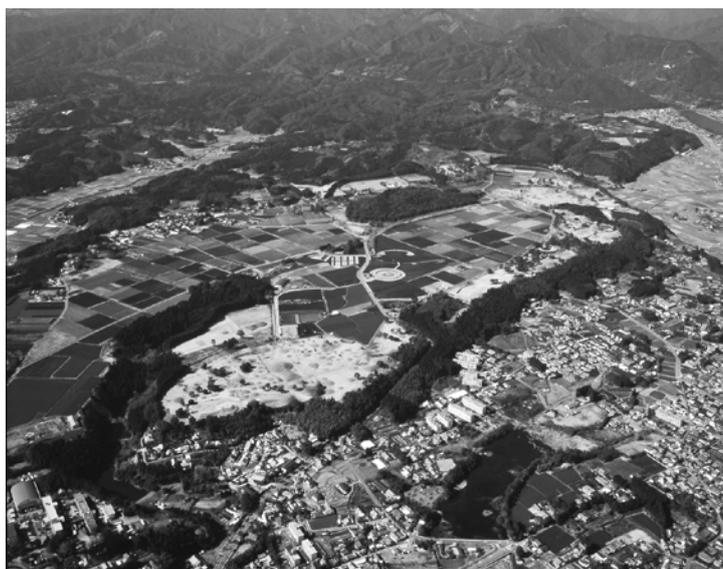


写真1 西都原台地遠景（東→西）

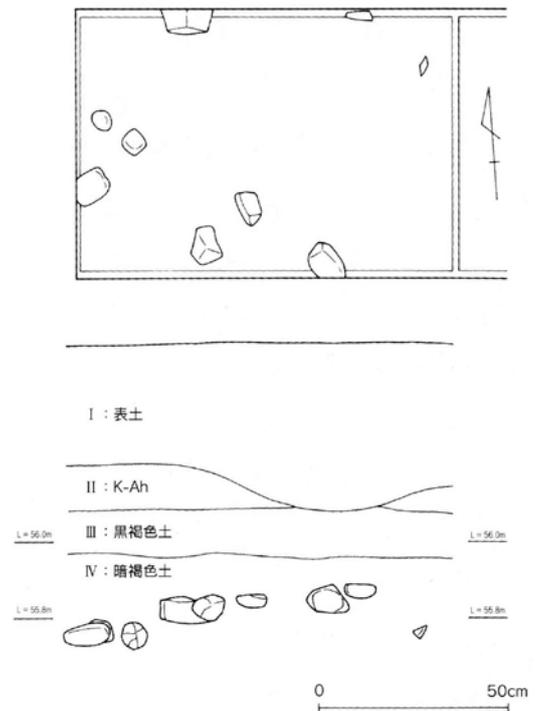


図3 西都原284号墳調査出土礫群

先行した細石刃剥離作業面であり剥離方向も異なっていることから、細石刃剥離が進行していく段階で打面転移が行われたことを示している。最終的な剥離面に対応する打面部には頭部調整が施されており、打面は作業面に対して傾斜する。先行する細石刃剥離作業面に対応する打面部は、入念で薄い小剥離によって平坦に近い打面が形成されており、打面は細石刃剥離作業面に対してほぼ直角である。背面には自然(表皮)面およびパティナの異なるより古相と考えられる剥離面が残存していることから、素材となる母岩は亜角礫状の転礫であったと考えられ、元来は母指程度のサイズであったと推測できる。また石質については、透過性があり、いくらか班晶、不純物がみられるが剥片石器石材としては良質である。色調は黒色であるが若干飴色がかかる。これらのことから、当細石刃核に使用されている黒曜石は肥薩系黒曜石の一群にみられる黒曜石である可能性が高いと考えられる。⁴⁾

西都原101号墳調査出土資料

図4-4は黒色をなす頁岩製の二側縁加工ナイフ形石器である。先端部は欠損している。右側縁には主要剥離面側からやや粗雑な急斜度剥離が行われた後に微細な調整剥離が施されている。また、中間部から先端に向かい稜上調整もみとめられ、断面は三角形を呈する。これらの剥離からは、やや肥厚な素材剥片の平面形を改変した後、急斜度剥離によって顕著となった素材の稜と厚みを調整するための試みがみてとれる。左側縁には基部から素材下半にかけて急斜度な剥離がみとめられ、左右両側縁に施された剥離により作出された基部は、挟りを入れたような平面形を呈する。左側縁中間部から先端部にかけて残存する刃部の角度は鋭角であり、右側縁部と比較して端部は薄い。先端部の欠損面には明確な打点はみられず、欠損面とツールを構成するその他の諸剥離面と同様の風化面であることから、意図的な折損や後生のアクシデントによる欠損とは考えにくく、諸剥離面とほぼ同時期、或いはツール作成後長く時を経ずして何らかの要因により破損した可能性が高いと考えられる。

図4-5は、流紋岩製の細石刃である。背面には連続した4枚の細石刃剥離がみとめられ、内2枚は剥離の衝撃が末端まで抜けてきておらずステップを作っている。その他の細石刃剥離面は、当細石刃を構成する主要剥離よりも長く、これらを考え合わせると、当細石刃は、製作者の想定する連続した細石刃剥離規格から逸脱した細石刃であったと推測される。残存する打面は狭小である

が、打面調整の痕跡がみとめられない平坦なものであり、主要剥離面に対してほぼ直角であることから、単剥離によって作出された平坦打面を有する細石刃核に対してほぼ直角に連続した細石刃剥離作業が行われたと考えられる。左側縁中間部と右側縁中間部から末端部にかけて微細剥離がみとめられ、特に右側縁にみとめられる微細剥離が顕著である。

5 西都原における旧石器時代の様相

以上により、現状で言及可能な西都原台地における旧石器時代の様相について述べていきたい。

当台地において該期資料が確認された古墳・遺跡は、西都原101・173・284号墳および西都原西遺跡の4箇所である。これらは何れも当台地縁辺部に位置しており、当台地中央部や周辺部にみられないことは、該期集団の活動が当台地縁辺部において主体的に展開していた可能性を示唆している。しかしながら、これらの資料は墳丘盛土中や表土中等プライマリーでない層位において確認されており、資料の帰属時期については層位を踏まえて位置付けることが不可能であることから、さしあたって、周辺遺跡から出土した資料との比較・検討によって決定することとなる。周辺遺跡では別府原遺跡においてAT下位石器群がみられるものの、形態的・形式的指標となる狩猟具に乏しいことから、その判断が困難な状況にある。しかし、同遺跡および別府原第2遺跡・宮ノ東遺跡では、良好なAT上位石器群が出土しており、これに関しては当台地資料との比較・検討が可能である。

図4-2・4は、ツールの形態およびその製作技術から、角錐状石器に代表されるAT降灰後に出現する石器群に該当すると考えられる。現在、各石器群の消長について再考段階にきているものの、大枠の変遷については一定のコンセンサスを得ていると認識される、いわゆる『宮崎10段階編年』においては、第5・6段階に位置づけられる(宮崎県旧石器文化談話会 2005)。図4-1や284号墳調査資料内にみとめられる剥片石器や石刃も同様の一群と考えられよう。また、図4-3・5にみられる細石刃石器群および関連石器群は、現状の宮崎県下においてはKr-Kb上位にみとめられている。

これら当台地上で確認されている石器類は、何れもツールや素材剥片、残核等極めて消費的性格の強いものであり、これまでの調査や表面採集資料中に石器製作工程で産出する剥片類や碎片が看取されないことは、当台地において積極的な石器製作活動が行われていなかった

た可能性が高いことを示している。また、使用されている石器石材については、在地系頁岩だけでなく小丸川周辺で産出する堆積岩起源のホルンフェルスに酷似するものや、五ヶ瀬川流域のものに類する流紋岩、そして肥薩系黒曜石といった当台地周辺で産出しない石器石材がそれぞれ同等数みられることから、これら資料は、台地周辺石材に依拠して構成されたものでない可能性があるとして評価できるだろう。

また、巨視的にみれば、該期の宮崎平野部においてはユビキタスな石器石材環境のもと、A T降灰以降遺跡が増加する傾向にあるが(永友・松本2010)、その背景には石器石材採取地間を活発に遊動する集団の存在が想定できることが指摘されており(秋成2014)、上記の状況を考え合わせると、その一群が各段階において単発的に当台地にアクセスしたものと理解できる。このことについては、他地域から持ち込んだと考えられる石器類の消費行動と礫群を伴う活動との関係性(保坂2012)からも肯定的に捉えられる。

6 おわりに

これらの資料は、西都原台地における人類活動の存在とその黎明が少なくとも後期旧石器時代、特にA T上位段階にまで遡ることを明確に示し、同時に該期集団による活動の一端を明らかにした。すなわち、酸素同位体ステージ3(OIS3)後半から2(OIS2)に区分される段階と概ね軌を一にした未曾有の自然災害である始良火山の噴火後(工藤2012)、LGM最寒冷期へと世界規模の寒冷化が進行し、入戸火災流の被覆から動・植物相が再生・回復していく中で、該期集団が東～南部九州域を取り込んで頻繁な遊動を繰り返す際に(藤木2012・松本2016)、一時的な人類活動の舞台として当台地を選択したこと。そして、列島弧への細石刃石器群の到来後、遊動領域を大きく広げ、分散していく過程においてこの地に足を踏み入れたこと。という二つの事実である。

該期集団の残滓は、ややもすると以後の集団から我々へと引き継がれた九州最大級の古墳群とそれらが織り成す雄大な歴史的・文化的景観の中に今にも消え入りそうだが、これまでの資料の蓄積から、臆気ながらも着実にその存在を明らかにし始めたところである。今後、さらなる資料の蓄積に努め、諸石器群と遺跡間研究によって当台地におけるより詳細な人類活動の様相を明らかにしていくことで『西都原古墳群前史』の序章たるシナリオを描き出すこととする。

【註】

- 1) 図4-1～4-2は報告書から、図4-3は未報告であるが既に図化されていたため、それを用いた。図4-4～4-5は沖野が実測・トレースした。
- 2) 本稿の石器石材認定は科学分析に基づくものではなく、筆者による肉眼観察によるものである。採用した石器石材名は、極力各報告書に準拠しているが、このうち全てが共通認識を図れるものでない。
- 3) 宮崎県内に産出する石器石材のうち、ホルンフェルスについては松田の論考に詳しい(松田2004)。
- 4) おそらくは桑ノ木津留産黒曜石である。

【参考文献】

- 秋成雅博 2014「宮崎平野部の遺跡群」『九州旧石器』第18号 九州旧石器文化研究会
- 沖野誠 2014「大野川流域と五ヶ瀬川流域の遺跡群」『九州旧石器』第18号 九州旧石器文化研究会
- 西都市史編さん委員会 2015『西都市史 資料編』西都市
- 西都市史編さん委員会 2016『西都市史 通史編』西都市
- 工藤雄一郎 2012『旧石器・縄文時代の環境文化史 高精度放射性炭素年代測定と考古学』新泉社
- 永友良典・松本茂 2010「宮崎県」『日本列島の旧石器時代遺跡—日本旧石器(先土器・岩宿)時代遺跡のデータベース—』日本旧石器学会
- 東憲章 2017「古墳時代の南九州の雄 西都原古墳群」『遺跡を学ぶ』121新泉社
- 藤木聡 2012「入戸火災流前後の人類活動と九州南部の石器群」『九州旧石器』第16号
- 保坂康夫 2012「日本旧石器時代の礫群をめぐる総合的研究」『礫群研究出版会』 峽南堂出版所
- 北郷泰道 2005「1 西都原古墳群」『日本の遺跡1』同成社
- 松田清孝 2004「小丸川流域石器石材の同定」『宮崎県総合博物館研究紀要』第25号
- 松本茂 2016「旧石器時代編年研究の進展と時代像の構築～宮崎平野を中心に～」『宮崎県央地域の考古資料に関する編年的研究Ⅱ』宮崎考古学会
- 宮崎県旧石器文化談話会 2005「宮崎県下の旧石器時代遺跡概観」『旧石器考古学』66 旧石器文化談話会
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2002『別府原遺跡 西ヶ迫遺跡 別府原第2遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第61集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2008『宮ノ東遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第173集
- 宮崎県立西都原考古博物館 2007『西都原173号墳 西都原4号地下式横穴墓 西都原111号墳』特別史跡西都原古墳群発掘調査報告書 第6集
- 宮崎県立西都原考古博物館 2014『西都原47号墳 西都原284号墳』特別史跡 西都原古墳群発掘調査報告書 第11集
- 宮崎県立西都原考古博物館 2015『西都原古墳群 総括報告書』平成24～26年度西都原古墳群基礎調査報告
- 宮崎地質研究会 2013『宮崎県の地質 フィールドガイド』コロナ社

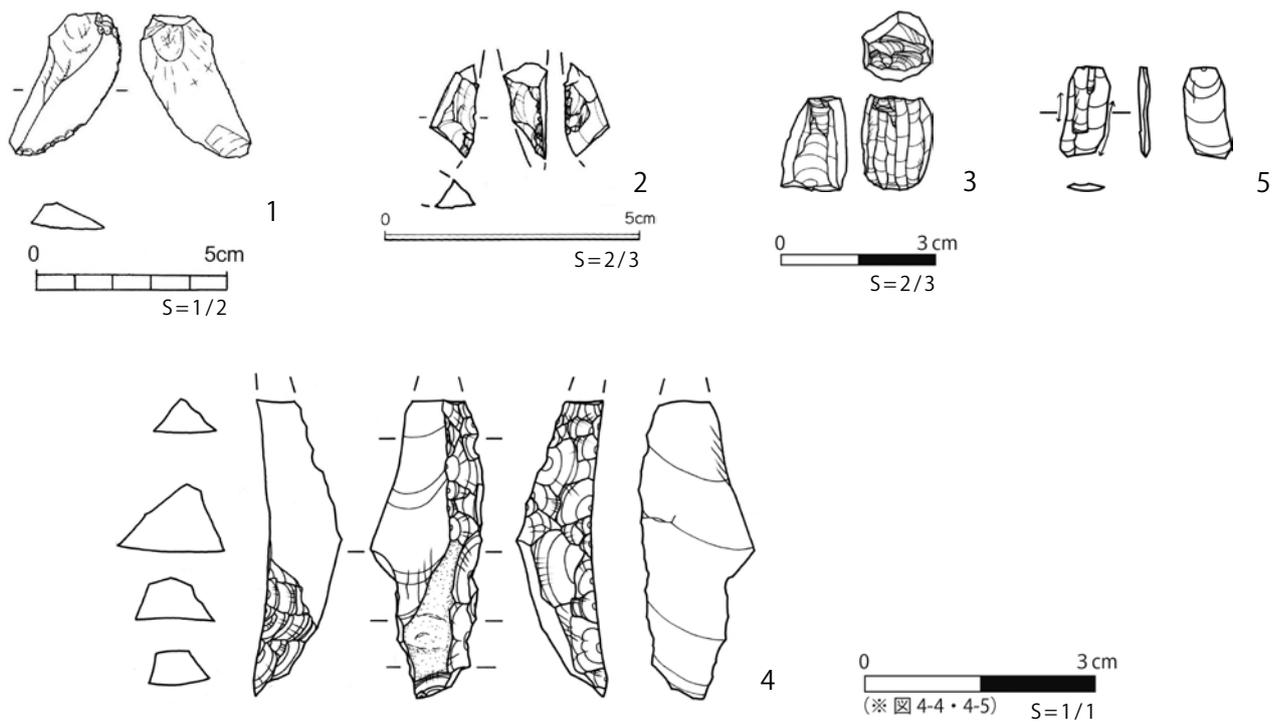


図4 西都原台地出土旧石器実測図

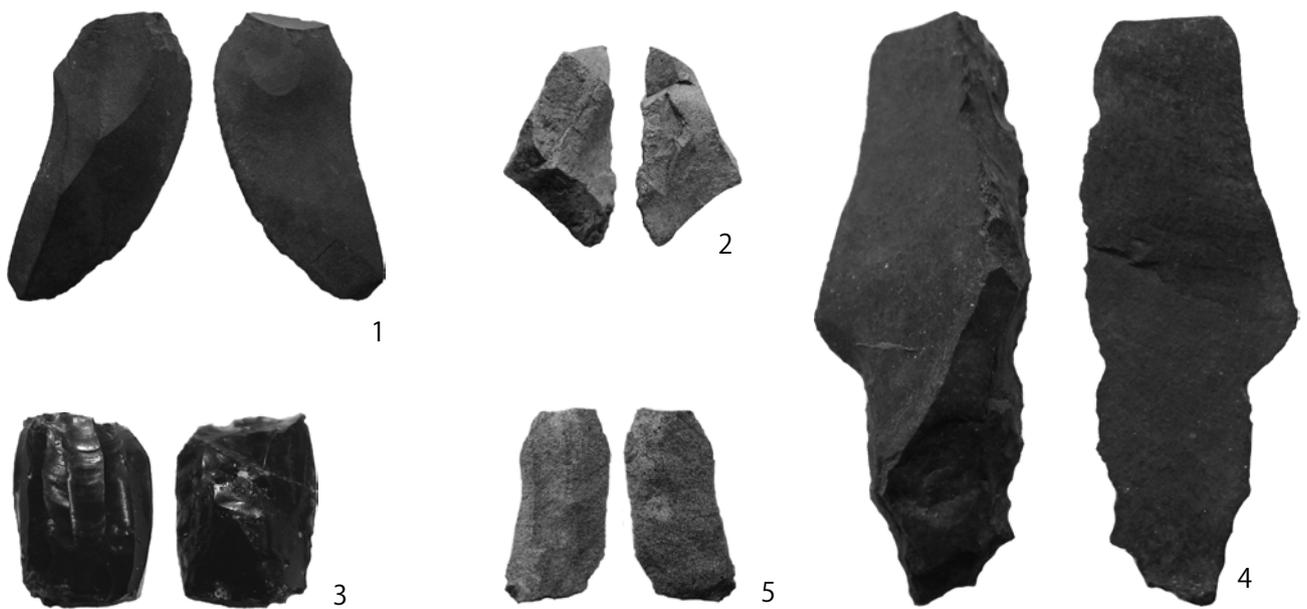


写真2 西都原台地出土旧石器写真（※写真は図面の200%）

挿図番号	出土	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	文献
図4-1	西都原173号墳調査	二次加工剥片	頁岩(黒色)	3.7	2.0	0.7	5.6	宮崎県立西都原考古博物館2007
図4-2	西都原284号墳調査	角錐状石器	流紋岩(白色)	1.8+a	1.0+a	0.9+a	1.0+a	宮崎県立西都原考古博物館2014
図4-3	西都原西遺跡調査	細石刃核	黒曜石	1.9	1.4	1.3	4.1	新出
図4-4	西都原101号墳調査	ナイフ形石器	頁岩(黒色)	3.9+a	1.5	1.0	4.4+a	新出
図4-5	西都原101号墳調査	細石刃	流紋岩(白色)	1.1	0.6	0.1	-	新出

表1 西都原台地出土旧石器台帳

大規模遺跡の保存・管理と活用

～西都原古墳群の場合～

東 憲章

1 はじめに

遺跡は誰のものか？ 日本の法律上では「国民共有の財産」である。一部の考古学者だけのものではない。遺跡は、文化資産として可能な限り保存され、全ての人びとがそれを活用し、学び、そして次世代に継承しなければならない。考古学の窓をより広く開け放ち、全ての人びとに理解を得られる努力を怠ってはならない。そのために考古学に携わる者が行うべきことは、遺跡を十分に調査し、その価値を明確にし、保存し、管理と公開を行い、活用の方向性を常に強く意識することである。Public Archaeologyの第一歩である。

2 特別史跡・西都原古墳群

(Special Historic Site - SAITOBARU Burial Mounds)

西都原古墳群は、日本国九州の南東部、宮崎県西都市を東流する一ツ瀬川の右岸、標高60～80mの台地上を中心に展開する古墳時代の墳墓群である。南北4.2km、東西2.6kmの広範囲に、300基以上の古墳が立地する。指定面積は585,808㎡と広大である。古墳の種類も、全国的に存在する前方後円墳、円墳、方墳、横穴墓に加え、南九州にのみ存在する在地的墓制である地下式横穴墓も混在するなど多様で、古墳時代(3世紀後半～7世紀中頃)の全期間を通して築造されている。多種多様な墳墓が存在

し、分布密度の高さ、規模の大きさ、造営期間の長さなどの諸特性から、日本国内でも最も著名な古墳群の一つである。1934(昭和9)年に国指定史跡に、1952(昭和27)年には国指定特別史跡に指定された。

春は菜の花とサクラ、夏はヒマワリ、秋はコスモスと四季折々の花々に囲まれる。豊かな自然環境と優れた歴史的文化的景観は、年間約100万人を超える来訪者を古墳時代に誘う。

宮崎県立西都原考古博物館が制作した特別史跡西都原古墳群のパンフレットの表紙には、次のようなコピーが付けられている。

「古墳時代が息づく歴史的文化的景観

大地に刻まれた歴史と神話

さあ、歴史浴の旅へ」

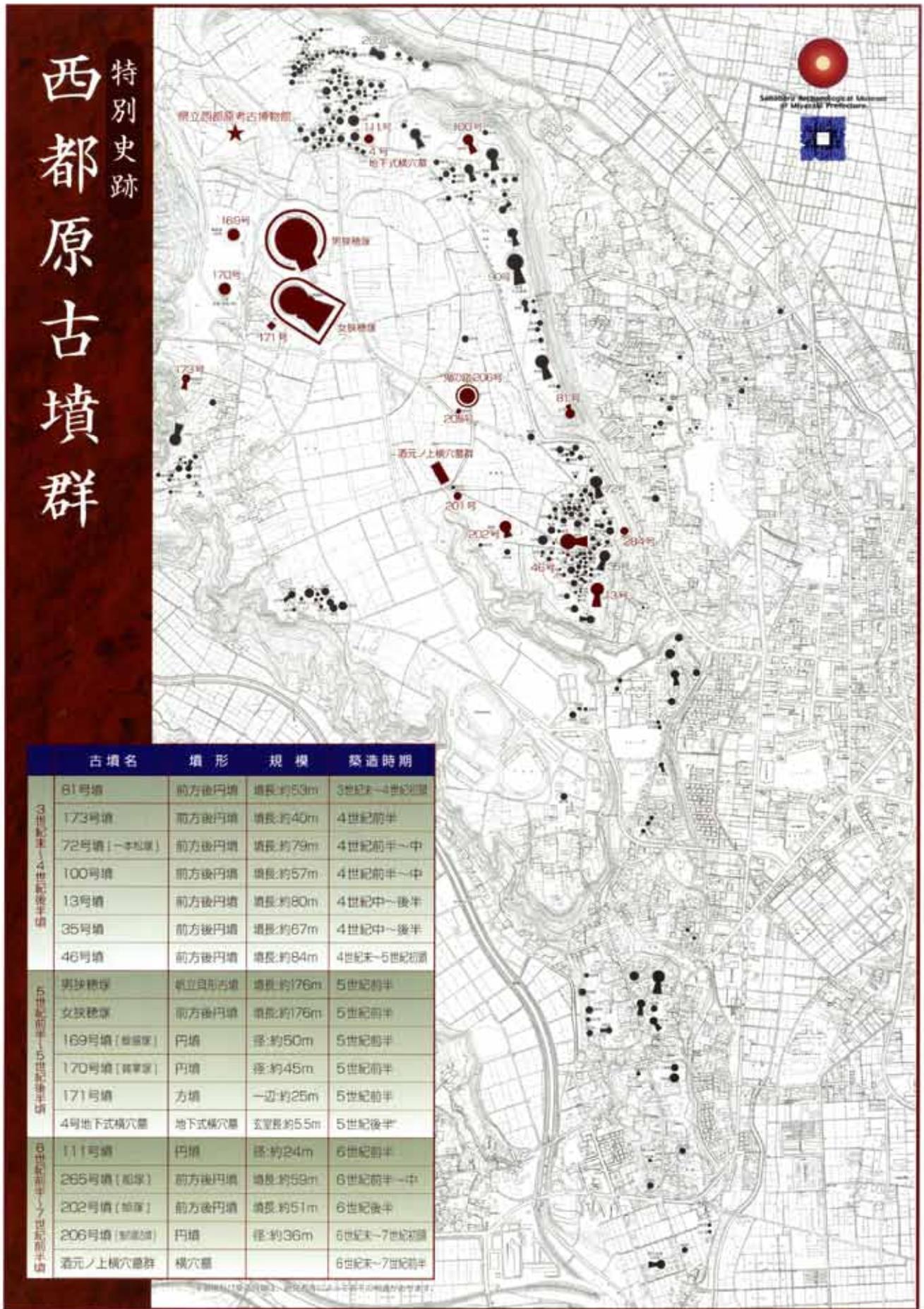
歴史浴とは、日光浴、森林浴という言葉に寄せた造語である。その場にいることで、全身で歴史を浴びる、感じることができるという意である。



特別史跡西都原古墳群



季節の花々に囲まれる古墳群



特別史跡西都原古墳群 古墳の分布状況

3 西都原古墳群の歴史

(1) 西都原古墳の調査と整備のあらすじ

西都原古墳群の成立から現在までの略歴は次のとおりである。

古墳時代(3世紀後半～7世紀中頃)	300基を超える古墳が築かれる。
江戸時代(17世紀～19世紀)	古墳群において「山陵祭」が行われた記録
明治時代(19世紀後半)	英国人のWゴーランドによる鬼の窟古墳の略測図
大正時代(1912～1917年)	西都原古墳群の発掘調査(6年間) →日本初の組織的・学術的な古墳の調査
昭和9年(1934年)	国の史跡に指定
昭和27年(1952年)	国の特別史跡に指定
昭和40年代(1966～1969年)	風土記の丘整備事業の第1号
平成5年～現在(1993～現在)	史跡の保存・整備・活用のための諸事業



大正元（1912）年の発掘調査に加わった学者達と古墳発掘の様子



調査後に古墳に埋納された碑石



重要文化財 埴輪子持家・埴輪船
(大正元年の調査で出土した)

(2) 風土記の丘整備事業

1965(昭和40)年、文化財保護委員会(現文化庁)は「風土記の丘設置構想」を発表し、宮崎県による西都原古墳群の整備計画がその第1号として採択された。

1966年から1969年までの事業期間に、史跡地の公有化(面としての買上げ)、環境整備、資料館と復元住居の建設が実施された。

この風土記の丘整備事業においては、個々の古墳の史的解釈よりも、「イメージとしての景観整備」に主眼が置かれ、古墳群の主要な地域を、「草原の古墳群」「森の中の古墳群」「散策の古墳群」の3つのゾーンに区分して整備が行われた。

しかし、その後は、「手をつけないことこそ保存」という時代的風潮の中、積極的な調査や整備が行われること



景観整備を主眼として面的整備が進められた
風土記の丘整備事業



ガイダンス施設としての西都原資料館
景観に配慮し半地下式で建設された

もないまま、季節によっては雑草に埋もれて、古墳の位置や形さえ分からない状態であった。

(3) 平成の大規模整備

平成の世となり、史跡の積極的な整備と活用が重視されるようになると、宮崎県においては、1993年から新たな整備計画の検討を行い、1995年3月に「西都原古墳群の保存整備・活用に関する基本計画」を策定した。

同年より文化庁が開始した「大規模遺跡総合整備事業」「地方拠点史跡整備事業」によって、積極的な史跡の保存整備に着手した。(計8年間、年間整備事業費2~3億円)

調査・整備の対象とする古墳の選定は、主に次の3つの視点から行った。

- 1 大正時代に発掘された古墳の検証
- 2 風土記の丘整備事業により整備された古墳の検証
- 3 広域に分布し、長期間にわたり造営された古墳群の史的変遷を理解できること

その他に、「西都原古墳群及びその周辺地域整備アクションプログラム」が実施され、宮崎県と西都市の役割分担による環境整備が行われた。

宮崎県教育委員会は、県立西都原考古博物館の建設(2004年4月開館)を、宮崎県県土整備部は、古墳群内の駐車場とトイレなど便益施設の整備を、西都市は、ガイダンスセンターの建設とイベント広場の整備を担当した。

(4) 現在も続く整備事業

大規模整備事業が終了した後も、事業規模を縮小しつつも現在まで古墳群の保存・整備・活用に関する事業を継続している。

2~3年の期間をかけて発掘調査を行い、その成果を基に、見学者への理解を促すための復元を含めた保存整備工事を実施している。また、事業の初期に保存整備工事を実施した古墳の中には、施工から15年前後が経過ものもあり、保存と活用のバランスを配慮した上での再整備の実施が必要となっているものも見られる。

◎西都原古墳群の主な調査・整備と内容

調査・整備古墳	実施年次	調査・整備内容
206号墳（鬼の窟古墳）	1995～1997	2石室の解体復元、墳丘・外堤の断ち割り、墳丘盛土・芝貼り
13号墳	1995～1999	主体部の調査、主体部見学施設、墳丘盛土・芝貼り
酒元ノ上横穴墓群	1995～1999	横穴墓の発掘、遺構保存処理、遺構露出公開、保存覆屋の建設
100号墳	1998～2002	墳丘全面の表土除去、保存処理、葺石露出公開、周堀復元
169号墳	1998～2004	主体部調査、墳丘盛土・芝貼り
171号墳	1998～2000	主体部調査、保存処理、葺石露出公開、周堀復元
173号墳	2000～2001	墳丘の表土除去、盛土・芝貼り
4号地下式横穴墓群・111号墳	2001～2005	地下式横穴墓の再調査、保存処理、保存見学施設 墳丘の表土除去、主体部検出、墳丘盛土・芝貼り、一部葺石露出
46号墳	2003～2010	墳丘の表土除去、盛土・芝貼り
170号墳	2004～2009	主体部調査、墳丘の盛土・芝貼り
202号墳	2008～2012	墳丘の表土除去、主体部調査、盛土・芝貼り
古代生活体験館の建設	1995～1996	常設型体験学習施設の設置
西都原考古博物館の建設	1999～2003	旧資料館に替わる考古学専門館の新設

4 古墳の調査と整備

(1) 古墳の整備事例

整備事業においては、学術的な発掘調査を行い、遺跡に関する基礎的なデータを収集し、文化庁や専門研究者からなる指導委員会、専門コンサルタント会社と協議して整備設計を立案する。その際に重視することは、以下の4点である。

- ① 遺跡の保存と次世代への継承を前提とする
- ② 見学者に遺跡の本来の姿と価値が理解できるように努めること
- ③ そのためには、復元的手法や遺跡内部への立ち入りも積極的に検討する

- ④ 継続的な観察とメンテナンスを行い、遺跡にダメージが認められる場合は、直ちに対処すること

・鬼の窟古墳（206号墳）

古墳群で唯一の開口した横穴式石室を持つ。石室入口にあった楠の原木が石室に悪影響を及ぼしていたため、墳丘と石室の一部を解体して樹木を除去した。石室と墳丘は築造当時の姿に復元し、石室は中に入って見学できるようにした。



発掘調査の状況（西都原206号墳）



整備された西都原206号墳

・13号墳

13号墳の埋葬施設である粘土槨は、埋葬後に土で埋め戻されるものであることから、通常は一般の人びとが目には見えない。実物の埋葬施設を直接見学することができるように、発掘調査坑に屋根を設け、古墳内部に入って見学できるようにした。



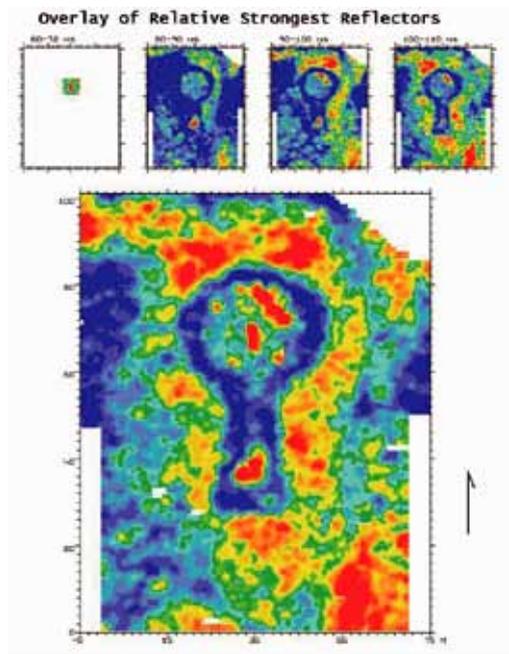
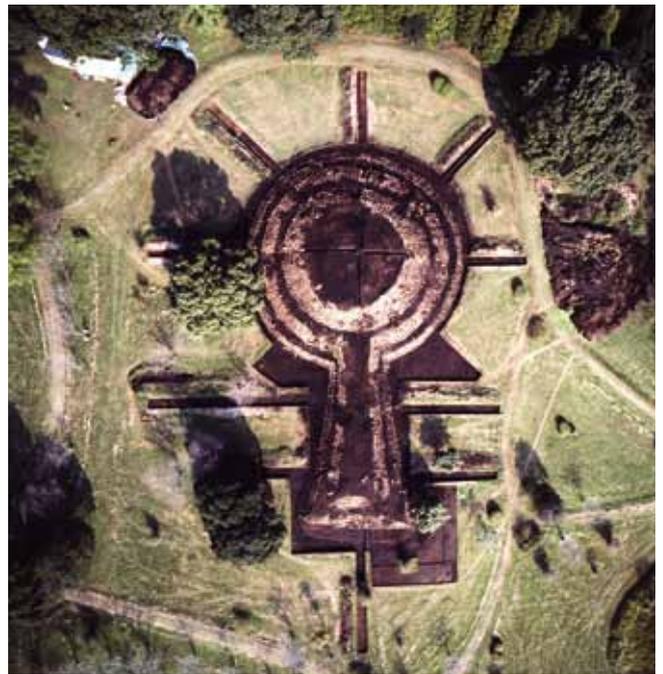
発掘調査の状況



整備された見学施設

・100号墳

発掘調査により、古墳を覆う葺石(古墳表面に貼り付けられた石)が良好に残っていることが判明した。発掘調査と地中レーダー探査の結果を踏まえて、墳丘全体に薬品による保存処理を施し、土石の流失を防止する対策をとった上で露出公開した。



発掘調査と地中レーダー探査の結果を受けて復元整備された100号墳

・酒元ノ上横穴墓群

10基が発見された横穴墓の墓道のうち、6基については大型の覆屋施設の中で発掘された状態のままに公開し、残りの4基については土で埋め戻して自然の状態に保存している。覆屋はドーム状の屋根とし、その屋上は緑化システムを取り入れることで、古墳群内での景観に配慮した。



発掘調査された状態のまま覆屋内で保存公開された酒元ノ上横穴墓群

・4号地下式横穴墓

発見されてから50年以上も地下保存されてきた地下の空洞遺構に、ヒビ割れ等の劣化が認められたことから、支持鉄骨と発泡ウレタンによる崩落防止工事を行った。遺構内部にカメラを設置し、見学施設からコントローラーを操作することで、見学者は遺構内部を見学できるようにした。

(2) 地中レーダー探査の活用

南九州の古墳文化の特徴の一つとして、墳丘を有する高塚古墳の外に、南九州特有の地下式横穴墓の存在があ



1956年に発見された4号地下式横穴墓



再発掘の状況（2002年）

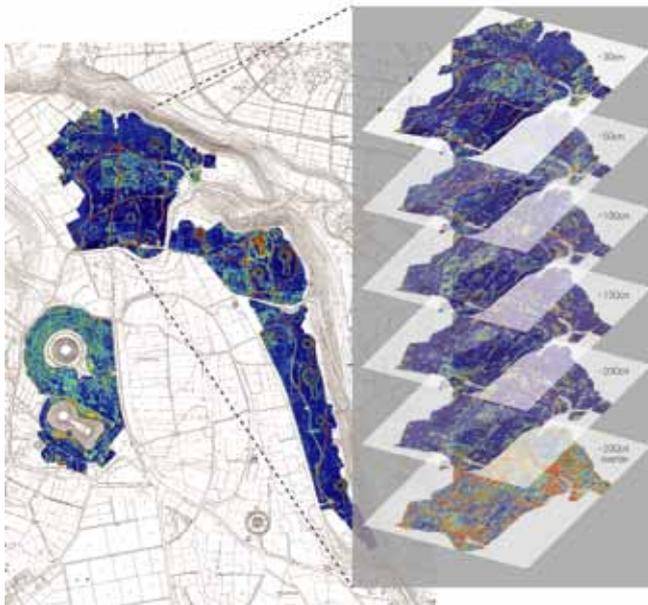
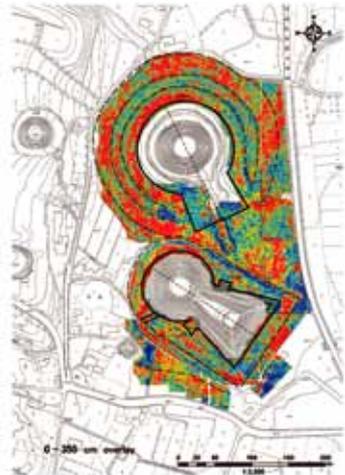


堅坑を塞ぐように設置された保存・見学施設では、カメラを操作して玄室の内部を観察できる

げられる。多くの古墳群において混在する高塚古墳と地下式横穴墓の関係性の解明こそが、地域的な最重要課題である。こうした潜在的遺構の存在に対して、非破壊的

調査手法である地中レーダー探査は重要である。

宮崎県においては、1993年頃より、古墳群をはじめとする県内の遺跡で、地中レーダー探査の有効性を検証する取り組みを行ってきた。そして、西都原考古博物館では、開館時から地中レーダー探査を調査研究の柱の一つと位置付け、特別史跡として発掘調査が制限される場合や、地下式横穴墓など潜在的遺構に対して地中レーダー探査を実施し、その成果を古墳の調査や整備、維持管理計画の策定に活かしている。



地中レーダー探査を活用した地下マップ

5 広域な史跡の整備と管理

(1) 整備と管理の分担

西都原古墳群は、特別史跡としての指定面積が58.5ha以上にもおよび、法的根拠においても、①文化財保護法による特別史跡、②都市公園法及び都市公園条例による県立都市公園、③自然公園法及び自然公園条例による県

立自然公園と、複数の立場が重複しているため、宮崎県(教育委員会、県土整備部、森林環境部)と西都市が分担して管理している。

宮崎県 教育委員会	古墳群の調査、整備計画、遺構の保存管理、墳丘及び整備区域の除草 県立西都原考古博物館の設置運営
宮崎県 県土整備部	都市公園としての整備工事(古墳復元工事を含む)、公園区域の除草
宮崎県 森林環境部	自然公園としての管理、九州自然歩道等の整備
西都市	国有地・市有地の除草、ガイダンスセンターの設置運営

6 博物館の役割～市民と考古学を繋ぐもの～

宮崎県立西都原考古博物館は、豊かな自然環境と優れた歴史的文化的景観を包括した西都原古墳群と一体となったフィールドミュージアムとして設置された。館内での展示の他に、古墳群の個々の古墳も展示と位置付け、説明板や案内板を整備している。

館内展示においてもフィールドとの関係を意識し、地下の展示室から地上への回帰の途中に、建物3階の展望ラウンジから古墳群を展望してもらい、野外への誘いとしている。

博物館では、年間4回の特別展・企画展と4回の小テーマ展示を行い、西都原古墳群の調査や考古学研究成果から、来館者が南九州の歴史を東アジアの視点から理解できるよう、情報発信を行っている。



2004年に開館した宮崎県立西都原考古博物館

その他、講演会や体験・実験講座、発掘調査の現地説明会、徒歩やサイクリングによる古墳群見学会、市民向け図書の刊行など、遺跡と市民を考古学によって結び付ける努力を続けている。

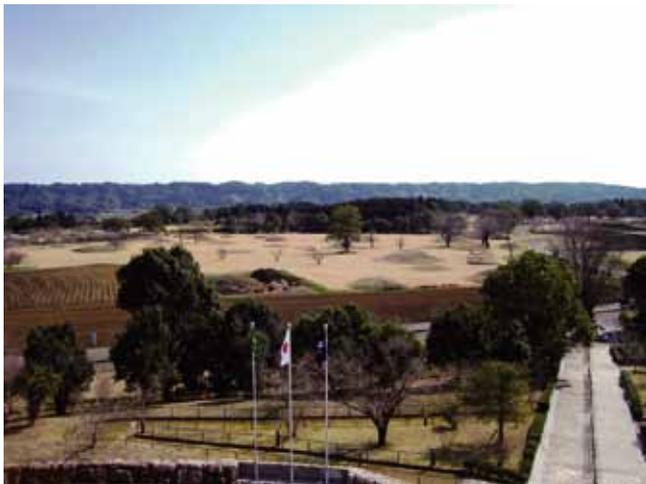
また、地元西都市においても、花まつり(3月～4月)、古墳まつり(11月)などを実施し、マラソン大会や自転車ロードレースなどのスポーツイベントも誘致するなど、遺跡と市民の親近性を高めるために重要な役割を果たしている。



展示室の様子



国際交流展



展望ラウンジからの眺め



土器作りの体験学習



発掘調査の現地説明会

* 本稿は、2017年8月24日に台湾新北市立十三行博物館で行われた「遺址監管及行政管理人員培訓班」及び2017年12月8日に韓国国立中央博物館で行われた「International Symposium of Public Archaeology in Korea」で講演した要旨である。

「博物館経営論」と西都原考古博物館の活動

永友 良典

1 はじめに

現在、学芸員養成課程では「博物館経営論」が2単位の必修科目となっている。

「博物館経営論」では博物館へのニーズが拡大し、情報化が進む中で、多くの来館者や市民が満足して博物館を利用してもらえるよう、博物館の組織や施設、人材の在り方やマーケティング、博物館評価、市民や地域社会との連携など、博物館経営から見た博物館運営が不可欠であることについて学ぶ。また、公的支援を受けている公立博物館の公共性や価値を利用者や納税者、地域に伝え理解を得る必要性も学ぶ。

さて、博物館の運営・管理という言葉は以前から使われていたが、博物館に経営という概念を取り入れたのは1960年代のアメリカからである。日本では1990年代になってその必要性が指摘され始めた。

1951年制定の博物館法第5条1で学芸員の資格を有する者を大学において文部省令で博物館に関する科目の単位を修得したものと規定され、1955年に定められた博物館施行規則で修得すべき科目を5科目10単位とされた。制定時は「博物館経営論」はまだ、修得すべき科目には入っていなかったが、1997年の改正で履修科目が8教科12単位に改訂され、「博物館経営論」も1単位の科目として導入された。ただし、「博物館経営論」は他の科目と統合した科目に替えることができるとされた。その後、2012年の改正で履修科目が9科目19単位となり「博物館経営論」は現在の2単位となり必修科目となった。

「博物館経営論」が学芸員養成課程の単独科目として必要であるかと言う意見もある。「経営」を辞書で引くと「継続的・計画的に事業を遂行すること。特に、会社・商業などの経済活動を運営すること。また、そのための組織」とある(広辞苑)。これを博物館の経営にあてはめると、「使命(理念)」にそって事業目的(資料・保管、調査研究、展示、教育普及)を達成するために、計画的・継続的・組織的・効果的に「ヒト」「モノ」「カネ」を適切に配分、管理運営する事といえる。

博物館経営にはトップマネジメントの領域が多分にあるが、博物館のあるべき姿を見定めながら、博物館の理念に基づいて諸事業を行うこと。つまり、博物館を日々運営していくことが博物館経営であるといえる。

現在、筆者は県内の大学の学芸員養成課程で「博物館経営論」を担当しており、講義では各地の博物館の事例を使ってわかりやすい講義に努めている。特に、地元の博物館等の事例を引き合いに出すことで、より学生の興味を引き出せる。さらに、現職の館や在職経験のある館の事例であればより具体的な話や話題も豊富でさらにイメージもしやすくなる。

そこで、現在、在職している西都原考古博物館の活動を題材にした「博物館経営論」を紹介する。

2 博物館経営論と博物科の活動

「博物館経営論」の講義では、ミュージアムマネジメントや行財政制度、施設・設備(ユニバーサルデザイン)、組織と職員・ステークホルダーなどの博物館の経営基盤に関する項目、使命と評価、博物館倫理と行動規範、博物館の危機管理、利用者との関係、広報、マーケティング、ミュージアムショップ等の博物館の経営に関する項目、市民参加や他館・他機関、地域等、博物館における連携に関する項目を扱っており、これらの講義の中で西都原考古博物館の活動を題材として取り上げている。

(1) 題材となる西都原考古博物館の概要

西都原考古博物館は総数300基を超える大小の墳墓が、南北4.2km、東西2.6kmの広大な範囲に分布している特別史跡西都原古墳群の中に2004年4月に開館した。豊かな自然環境と優れた歴史的文化的景観を誇る古墳群と一体となったフィールドミュージアムとして、「考古学を通じ、過去を知り、今を認識し、未来を創造する活力を築く博物館」を基本理念に、活動の根幹である調査研究や資料の収集では西都原古墳群等の地中レーダー探査や鉄製品や古人骨、土器・石器等の収蔵資料の調査研究、西都原古墳群の保存整備、「常新展示」と年4回の「展示会」の開催、古代の人々の知恵と工夫を学び、道具を使った製作体験を行うことで生きる力を育む古代生活体験館での体験活動、教育普及活動、古代における大陸と南九州の文化交流を検証するための国際交流事業など幅広い活動を行っている。また、最近では、4カ国語対応アプリの開発、無料Wi-Fiの整備、ホームページのリニューアル、公式Facebookの設置など情報発信や古

代復元住居再生事業をはじめとする県民参加型イベントや体験講座の実施、利用者のニーズに応じた魅力ある事業など幅広い活動を行っている。また、隣接の古代生活体験館では土器や勾玉づくりなど16種類の古代生活体験ができる。入館料は無料で、開館日数は300日を超す。開館時間は宮崎市内から遠方に所在していることもあり10時から18時となっている。入館者は博物館と古代生活体験館の合計で毎年100,000人を超しており、2016年度は121,201人(博物館105,370人、古代生活体験館12,101人)となっている。西都原古墳群は、県内では高千穂峡に次ぐ観光地として2015年度は100万人を超す観光客が訪れている。特に桜と菜の花の時期である春季とコスモスが咲く秋季に観光客で賑わう。

上記の西都原考古博物館の概要には多くのセールスポイントが記されている。

講義では、まず西都原考古博物館の歴史や概要、立地や利用方法、事業の概要、西都原古墳群の概要など基本情報を事前に紹介しておき、その後の各講義で該当する題材を取り上げる。

(2) 博物館の経営基盤と博物館の活動

博物館の経営基盤に関する項目では条例や施行規則、理念や使命、活動の基本方針や資料の収集方針、組織や予算の変化、施設や設備等について西都原考古博物館の事例を取り上げている。

特に、施設や設備ではユニバーサルデザインの導入について取り上げる。具体的にジャケット型の音声ガイドや展示品の多くを手で触ることができるハンズオン展示、触察ピクトやサイン等の設置を解説する。

さらに、前述の4カ国語対応アプリの開発、無料Wi-Fiの整備、ホームページのリニューアル、公式Facebookの設置など情報発信に力を入れている点を取り上げ、2015年度末にリニューアルしたホームページのアクセス数が2015年度月平均95,000件だったのが2016年度の月平均が138,000件と約145%増となった最新の状況を解説しプラス面になっていることを強調する。

(3) 博物館の経営と博物案の活動

博物館の経営の項目では利用者との関係、広報とマーケティング、ミュージアムショップ、危機管理等の西都原考古博物館の事例を取り上げている。

危機管理では、地震災害対策と文化財IPMがセールスポイントとなる。地震災害対策では展示室には3台の免震エアタイトケースを設置しているほか、専用の転倒防止器具、テグスやクッション材等の利用、収蔵庫では収

蔵棚の固定や転倒防止ベルト(縦・横)や転倒防止ストッパーの設置、古人骨収蔵庫での木製棚と木製箱による収蔵、免震床を設置した重要物収蔵庫(面積25㎡)を併設している点など状況を解説する。

文化財IPMでは、収蔵庫や展示室、展示ケース内の温湿度管理や空気の滞留管理や収蔵庫の燻蒸を行わず日頃の清掃や点検でゴミ・ホコリを除去し害虫やカビの発生を防ぐ資料管理の実践している点をアピールする。さらに、保存処理では鉄製品を中心とした保存処理設備が充実しており、非常勤ではあるが職員を常駐している点、保存処理担当の職員が県内唯一の保存処理施設として県内出土の鉄製品の保存処理と収蔵管理、資料の収蔵庫や展示室、展示ケース内での温湿度管理を常時行っている点を強調する。さらに、保存処理体制の充実が災害時の資料の緊急対応や緊急処置に大きな戦力となることも解説する。

(4) 博物館における連携と博物館活動

博物館における連携に関する項目では市民参加や他館・他機関、地域等の連携の事例について取り上げる。

他館・他機関との連携では、国内館とも連携をしているが、西都原考古博物館では「交流」をキーワードにした韓国や台湾の博物館や研究機関と連携を取り上げ、現在、台湾新北市立十三行博物館と韓国国立羅州博物館と学術文化協定を結び人的交流や展示会を解説し、毎年開催する「国際交流展」の準備段階からの取り組みやエピソードを取り上げている。

NPO法人との連携では、運営支援業務ではあるが、ボランティアガイドのコーディネート、講座やイベント企画、団体受け入れに関する業務や古代生活体験館の体験活動における各種運営補助など博物館の活動・運営支援について取り上げる。

学校教育との連携では、連携推進のための教職員への働きかけとして、夏休みを利用した教員向け講座「授業で生かせる考古学」を取り上げる。考古博物館には考古専門の学芸スタッフ(ヒト)、豊富な県内考古資料(モノ)、授業等に生かせる考古情報(情報)を提供できる点、社会科はもちろん、社会科以外の全ての教科・領域で活用できる情報も提供できる点を解説する。

(5) 博物館のセールスポイントを「博物館経営論」に取り上げる

以上、「博物館経営論」の題材として活用できる西都原考古博物館の活動を紹介したが、上述したものも含め取り上げられる題材は数多くある。下記が西都原考古博

博物館のセールスポイントである。(順不同)

- ・考古専門の学芸スタッフ
- ・豊富な県内考古資料
- ・授業等に生かせる考古情報の提供
- ・全ての教科・領域で活用できる情報の提供
- ・文化財IPMの実践
- ・保存処理設備の充実と専門スタッフを配置
- ・古墳群と一体となったフィールドミュージアム
- ・西都原古墳群の史跡整備と発掘調査
- ・古墳時代を中心とした鉄製品・古人骨は収蔵の柱
- ・西都原古墳群の出土資料
- ・地中レーダー探査
- ・13号墳、酒元ノ上横穴墓など野外展示施設
- ・我が国最大規模で当時の環境を残す古墳群
- ・県内有数の観光地、100万人を超す観光客
- ・桜と菜の花の春、コスモスの秋に観光客で賑わう
- ・韓国や台湾の博物館等と交流と連携
- ・入館料無料、300日を超す開館日数
- ・古代生活体験館での古代体験
- ・国際交流展の開催
- ・常新展と年4回の展示会
- ・ユニバーサルデザインの導入
- ・NPO法人による運営支援業務
- ・ボランティアによる展示と古墳群の解説
- ・ミュージアムショップとレストランの設置
- ・4カ国語対応アプリの開発
- ・無料Wi-Fiの整備
- ・ホームページのリニューアル
- ・公式Facebook

(6) 博物館のマイナス面から「博物館経営論」を考える

さて、講義では、西都原考古博物館のセールスポイントだけでなくマイナス面も取り上げている。学生からマイナス面を出してもらい、題材とし、学生にはその対策を考えてもらう。

例えば、アクセスの悪さや、目立ちにくい立地などがあげられている。

○アクセスの悪さ

宮崎市内からは自動車利用で約40分かかる。バス利用の場合は「西都原考古博物館前」行きのバスが宮崎市内から1日2往復しか運行されていない。所要時間も約70分を要する点を解説し、ほとんどの来館者が個人客はマイカー、団体客は観光バス等を利用している状況を説明する。

○立地の悪さ

西都原考古博物館が西都原古墳群の北東端の高台に位置することから比較的目立たない点を解説し、景観を配慮に半地下式に建てられた前身の西都原資料館の跡地に建設され、西都原考古博物館も景観に配慮している点を説明する。

さらに、年間100万人を超す西都原古墳群の観光客の1割ほどしか西都原考古博物館に来館していない点も話題として取り上げる。学生にはこれらのマイナス面を指摘し、題材として対策等について考えさせる。学生からは、いずれも広報や群内での掲示案内の充実等の意見が出された。

3 「博物館経営論」に博物館の活動を活かす

「博物館経営論」はなかなか理解しにくい科目である。しかし、講義の中で事例として、より身近で、より具体的で、より臨場感ある題材を取り上げることで学生の興味や理解度も上がってきた。

さらに、博物館のセールスポイントやマイナス面を取り上げることで、博物館の抱える課題について様々な方面から学生に考えてもらう機会を設ける事ができる。例えば「自分が通っている大学と西都原考古博物館(または、宮崎県総合博物館)との連携」、「地元の博物館にショップやミュージアムショップやカフェ・レストランを作るとしたら」、「大学生が博物館を利用するようになるには」、「誰もが楽しく博物館を利用するには」、「博物館ボランティア」などより具体的で身近な題材をテーマにすることで「博物館経営論」が少しは身近な教科として捉えてもらうことができる。

これらの活動を通じて学生に『博物館日々の運営していくことが博物館経営である』ことをまずは理解してもらえれば良いといえる。「博物館経営論」だけでなく他の博物館に関する科目でも身近で具体的な題材を使って学生にわかりやすい講義が有効である。

【参考資料】

佐々木亨 亀井治 2013『博物館経営論』放送大学教育振興会
宮崎県立西都原考古博物館 2017『宮崎県立西都原考古博物館年報2016(平成28)年度』

西都原古墳群関連写真の新例

～堺市博物館所蔵の谷村為海氏撮影写真より～

堀田 孝博

1 はじめに

平成29年度特別展に係る資料借用で堺市博物館を訪問した折に、同館が谷村為海氏たにむら ためうみの御遺族から寄贈を受けたガラス乾板写真の中に西都原古墳群やその周辺を撮影したものが含まれていることを学芸課主幹の續伸一郎氏に御教示いただいた。谷村為海氏撮影写真については、堺市博物館が整理作業を進められているが、同館の御高配にあずかり西都原古墳群に関連する写真を紹介させていただくものである。

2 谷村為海氏撮影写真とは

谷村為海氏は1900(明治33)年に京都で生まれ、京都府下の小学校で教諭を務めながら昭和初期に天皇陵などの調査を開始したとされている(大阪市美2008)。堺市博物館に寄贈されたガラス乾板写真は、322箱で総数約4,000枚にもものぼる膨大なもので、1929(昭和4)年から1945(同20)年の間に撮影された(堺市博2009)。その中で6カット10枚おきほづか めさほづかが男狭穂塚・女狭穂塚、9枚が西都原古墳群や周辺の神社等を撮影したもので、撮影日時は1939(同14)年8月17日から18日にかけてと記録されている。

3 西都原古墳群関連写真の概要

3-1 陵墓1800 女狭穂塚陵墓参考地 正面

8月17日午前11時30分撮影。女狭穂塚の前方部側に設置されている遙拝所を正面から写す。遙拝所の建物は現在のものとはほぼ同じ構造だが、基壇が盛土である点異なる(現在は石とコンクリートで周囲を補強)。左手前にある手水も現在とは形状が大きく異なる(写真1)。

3-2 陵墓1801 女狭穂塚陵墓参考地 西ヨリ全

8月17日午前11時30分撮影。マツ林の形状を他の写真と比較した結果、女狭穂塚の南西側から写されたと判断する。ちょうど女狭穂塚の全景を左側面から収めた格好となる。古墳の前面にはラミー(苧麻)の畑が広がる。画面右端付近にうっすらと見える背後の平坦な台地はひとつせ一ツ瀬川を挟んで対岸に位置するにゅうたばる新田原台地である(写真2)。

3-3 陵墓1802 男狭穂塚陵墓参考地 後円部東北ヨリ

8月17日午後2時30分撮影。主丘部を軸線上から写したものの。墳丘の段築が明瞭に確認できる(写真3)。

3-4 陵墓1803 男狭穂塚陵墓参考地 後円部東北ヨリ

8月17日午後2時30分撮影。陵墓1802と同一アングルだが、コントラストがやや弱い(写真4)。

3-5 陵墓1804 男狭穂塚陵墓参考地 後円部東北ヨリ

8月17日午後2時30分撮影。やはり陵墓1802と同一アングルで、露出がアンダー気味である(写真5)。

3-6 陵墓1805A 男狭穂塚陵墓参考地・女狭穂塚陵墓参考地 東ヨリ全二枚連続

8月18日午前10時30分撮影。画面右端に写る山の形状から、西都原90号墳(大山祇塚)の西方付近より撮影した可能性が高く、歴史第651号と同一の撮影ポイントと考えられる。1枚目が女狭穂塚、2枚目が男狭穂塚を中心に収めたもので、2枚を合成すると陵墓参考地の全景写真となる。1枚目中央付近に2人の人物が写っている。画面左手に小さく写る石碑は、1934(昭和9)年に実施された神武天皇御東遷二千六百年記念古墳祭を記念して翌1935(同10)年に建立されたもので、その左方には遙拝所も確認できる。2枚目中央付近には陵墓参考地の参道入口が見られるが、屋根付きの門のようになっており、現在よりも大がかりである。古墳の前面にはラミーとサツマイモの畑が広がる(写真6・7・20)。

3-7 陵墓1805C 男狭穂塚陵墓参考地・女狭穂塚陵墓参考地 東ヨリ全二枚連続

8月18日午前10時30分撮影。陵墓1805Aとほぼ同一アングルであるが、微妙に異なっている。1805Aの1枚目に移っていた人物は見られない(写真8・9)。

3-8 陵墓1806 男狭穂塚陵墓参考地 正面

8月18日午後1時30分撮影。画面手前に1本、奥に7本程度の丸太を使用した階段が写る。入口から参道をたどり、男狭穂塚の小方部に登りついた位置から参拝所

を写したものと考えられる(写真10)。

3-9 歴史第634号 児湯池九州西都原

8月17日撮影。西都原古墳群が展開する台地の東側に広がる中間台地に所在する湧水で、天孫降臨神話と関連づけて紹介されている。写真は東から撮影されたもので、中央付近の立木の中に池と隣接する祠が存在する。入口には白色の解説板と1933(昭和8)年に宮崎県が設置した標柱がある。画面右端に移る同種の解説板・標柱は石貫神社のものである(写真11)。

3-10 歴史第637号 事勝神社九州西都原

8月17日撮影。事勝神社は現存しないが、児玉実満による「日向国神代絵図」(西都市歴史民俗資料館所蔵)に事勝国勝長狭神を祭神とする神社が描かれており、これが事勝神社であった可能性がある。絵図の位置関係から寺原地区に所在したようで、周辺地形などの検討から西都原172号墳の東側に隣接する神社を東から撮影したものと判断する。172号墳の近くには現在も小さな祠があり、神社の名残とも考えられる。歴史第634号に写ったものと同じ解説板が神社の横に設置されている(写真12)。

3-11 歴史第640号 石貫神社九州西都原

8月17日撮影。大山祇命を祭神とする神社で、児湯池の北側に近接する。南面する鳥居と本殿を正面から写している(写真13)。

3-12 歴史第643号 男狭穂塚・女狭穂塚陵墓参考地模型

8月17日撮影。等高線を積み上げた無彩色の立体模型であるが、『日本古文化研究所報告 第十』に収録された宮内省諸陵寮所蔵の測量図(濱田ほか1940)とは範囲や等高線の入り方が異なる。他の測量図を元に作成されたものか(写真14)。

3-13 歴史第645号 三宅神社九州西都原

8月17日撮影。西都原台地の南端付近に位置する。東面する拝殿と本殿を南東側から写している(写真15)。

3-14 歴史第647号 都萬神社九州西都原

8月18日撮影。西都原台地東側の中間台地東端部に位置し、延喜式に記載された日向四社の一つである。本殿は2007(平成19)年に西都市の有形文化財に指定された。

東面する拝殿と本殿を南東側から写している(写真16)。

3-15 歴史第651号 傳大山祇命陵

8月18日撮影。西都原90号墳。ほぼ南北方向に主軸をとる前方後円墳を西側から撮影している。墳丘上にはマツの高木が多数生えている。台地縁辺に木がないため、現在は視認できない一ツ瀬川対岸の新田原台地が背後に写っている。

3-16 歴史第652号 鬼ノ窟古墳

8月18日撮影。2枚連続で撮影されており、合成すると古墳の全景写真となる。墳丘と外堤の位置関係から、南西に近接する小円墳(205号墳)上が撮影ポイントと考えられる。1枚目が外堤北半から墳丘まで、2枚目が墳丘から外堤南半までを収めたもので、石室の開口部付近にはクスの高木が1本、外堤上にはマツの高木が数本見られる。2枚目の画面中央付近で背後に写る塚は西都原83号墳と推定される。外堤南側に近接して解説板が設置されており、外堤や解説板の直近までサツマイモ畑が営まれている(写真18・19・21)。

4 おわりに

西都原古墳群の記録写真としては、1912～1917(大正元～6)年に行われた発掘調査時のものが多数残されているが、昭和初期の写真は比較的少ない。そのような状況の中、今回紹介させていただいたガラス乾板写真は、いずれも画質鮮明で当時の景観や土地利用の状況についても豊富な情報を備えており貴重である。

堺市博物館の續伸一郎氏には画像提供に係る諸手続の労を執っていただき、関連文献の提供まで多くの御協力を賜った。また、宮崎県総合博物館の黒木秀一氏には写真に写った植物の同定について協力いただいた。文末ではあるが、記して感謝申し上げたい。

【参考文献】

- 大阪市立美術館 2008 「谷村為海氏と煎茶関連資料」『大阪市立美術館だより 美をつくし』vol.169
- 堺市博物館 2009 『百舌鳥古墳群の陵墓古写真集 一明治・大正・昭和初期』
- 濱田耕作・原田 仁・久保平一郎 1940 『日本古文化研究所報告 第十 西都原古墳群の調査』日本古文化研究所



写真1 陵墓1800 女狭穂塚陵墓参考地 正面



写真2 陵墓1801 女狭穂塚陵墓参考地 西ヨリ全



写真3 陵墓1802 男狭穂塚陵墓参考地 後円部東北ヨリ



写真4 陵墓1803 男狭穂塚陵墓参考地 後円部東北ヨリ



写真5 陵墓1804 男狭穂塚陵墓参考地 後円部東北ヨリ



写真6 陵墓1805A 男狭穂塚陵墓参考地・女狭穂塚陵墓参考地 東ヨリ全二枚連続



写真7 陵墓1805A 男狭穂塚陵墓参考地・女狭穂塚陵墓参考地 東ヨリ全二枚連続



写真8 陵墓1805C 男狭穂塚陵墓参考地・女狭穂塚陵墓参考地 東ヨリ全二枚連続



写真9 陵墓1805C 男狭穂塚陵墓参考地・女狭穂塚陵墓参考地 東ヨリ全二枚連続



写真10 陵墓1806 男狭穂塚陵墓参考地 正面



写真11 歴史第634号 児湯池九州西都原



写真12 歴史第637号 事勝神社九州西都原



写真13 歴史第640号 石貫神社九州西都原



写真14 歴史第643号 男狭穂塚・女狭穂塚陵墓参考地模型



写真15 歴史第645号 三宅神社九州西都原



写真16 歴史第647号 都萬神社九州西都原



写真17 歴史第651号 傳大山祇命陵



写真18 歴史第652号 鬼ノ窟古墳



写真19 歴史第652号 鬼ノ窟古墳



写真20 陵墓1805Aの合成写真



写真21 歴史第652号の合成写真

西都原古墳群における古人骨出土事例の再整理について

本部 裕美

1 はじめに

西都原古墳群は、300基以上の古墳と地下式横穴墓を擁する。その両方から古人骨が発見された報告がいくつかある。

1912(大正元)年から1917(大正6)年にかけて、考古学史上初となる本格的な古墳の発掘調査(以下、「大正調査」とする)が行われた。だが、時代的制約のなかで、おもに埋葬主体部に焦点を絞った調査だけ行われた。

また、地下式横穴墓については、耕作機械などが落ち込んで偶然発見されることが多かった。そして、正式な調査報告が行われていないものが多く、実態がはっきりしていない。

大正調査・地下式横穴墓の発掘調査中に、人骨が発見されても、調査終了後に埋め戻される、あるいは取り上げられていない可能性があり、現在、報告書にその存在が確認されるだけである。

そこで今回、西都原古墳群内で発見された古人骨について、過去の記録などを元に、整理を行った。

2 大正調査で発見された古人骨

大正調査で発見された古人骨は、71号墳・169号墳・265号墳・283号墳・115号墳から出土した。以下、報告書の記述箇所を抜粋して記す。

2-1 71号墳(旧:26号塚)

「地下一尺位ニシテ黄色粘土ノ巾二寸アル二線ヲ発見ス二線ノ間隔約一尺三四寸其兩線ノ西北隅ニ骨片及齒牙様ノモノヲ得タリ」(坂口・黒坂他1915)

2-2 169号墳(旧:110号塚)

「又最初発見セシ稀薄ナル朱層(わ)ハ、銅釧ト、銅鏡トノ間一尺七寸程ノ所ニ方約一尺三寸ニ散布セルモノニシテ、此所ニテ頭蓋骨ノ小破片ト、白歯4枚トヲ発見セリ」(坂口・黒坂他1915)

2-3 283号墳(旧:3号墳東北陪塚)

「発掘物は小刀、鏃等にして其側に齒の破片と瑠璃玉を見たるに止りたり。」(鳥居・小川他1918)

2-4 115号墳(旧:1号塚)

「矛と劍との側には人骨の如きものを認めしも之に觸れば直に其形を失へり。」(鳥居・小川他1918)

2-6 265号墳(船塚)

「埋葬されたる遺骸は殆んど存せず僅に鏡面に密着せる麻布に骨灰の一部の残れるを認めたるのみ。」(濱田・梅原1917)

169号墳から出土した臼歯4点は、赤十字社医院の鑑定によると、咀嚼面の摩耗具合から年齢は壮年であろうと推定された。そして、71号墳と169号墳から発見された骨片と歯は、復旧工事の際に埋め戻されている。283号墳・115号墳・265号墳に関しては、消失・痕跡のみで現存しておらず、報告書に記載されているだけである。

3 地下式横穴墓から発見された古人骨

地下式横穴墓は、西都原台地¹⁾の12基²⁾(第4図)の内7基、中間台地からも多数の古人骨が発見されている。

3-1 1号地下式横穴墓

1号地下式横穴墓は、1928(昭和3)年に馬が天井部を踏み込んだことで発見され、「西都原古墳群地下式横穴墓の遺物配列状態」(日野1932)の報告によると、「玄室の奥部に横に長く伸展葬をされた人骨があった。既に腐朽して敷石上に白い斑點を留めてゐるに過ぎない。」とあり、痕跡を留めているのみで取り上げられていないと考えられる。

3-2 2号地下式横穴墓

「日向地方の地下式墳」(日高1958)に報告されている。報告によれば、「人骨は陥没土塊により散乱していたが、歯牙二十四本は完全に残存していたので歯科医である実弟を同行させ、歯科医学的な調査をさせた。(中略)人骨などの配置具合から埋葬者は一人と考えていたが、歯牙の調査を行った結果は二人だとしている。」と記載されている。

また、2号地下式横穴墓から出土したと推定される歯が当館に収蔵・保管されている。

3-3 3号地下式横穴墓

2号同様、「日向地方の地下式墳」(日高1958)に報告されている。報告によれば、「玄室の底部には第三図の如く扁平なる石が敷きつめてあり、その上に人骨及び副葬品が安置してあった。」とあり、また『地下式古墳の研究』(石川1973)では、「遺物のうち人骨は若干残っているに過ぎなかった」とあるので、取上げられていないと考えられる。

3-4 4号地下式横穴墓

4号についても「日向地方の地下式墳」(日高1958)に報告されている。報告によれば、「人骨はほとんど見当たらず割竹形床面の南側に歯牙二十二本が発見されたのみで、恐らく頭部は南向きになっていたものと思われる。」とある。そして、歯科医師の調査では、年齢は壮年期で、上下顎とも右側の方が摩耗の程度が大であったことから、咀嚼は右側でしていた、あるいは左側に疾病が存在したかもしれないとの見解がある。

3-5 5～7号地下式横穴墓

文献などに明確な記録がない。1967(昭和42)年6月14日付、6月17日付の宮崎日日新聞(第3図-①②)に3基の地下式横穴墓が発見され、人骨が4体分見つかったことが掲載されている。6月14日付の新聞記事は102号墳近くで発見された5号地下式横穴墓についての内容である。記事によれば、玄室内から北西向きと南東向きの人骨が2体見つかっており、頭部や歯、足などの大きな骨格が残っていたとある。しかし、人骨はそのまま埋め戻された。6月17日付の新聞記事にもうひとつの古墳からも2つの人骨が見つかったとあるので、6号または7号地下式横穴墓から出土したと考えられる。

3-6 10号地下式横穴墓

『西都原古墳研究所・年報』第2号(西都市教育委員会1985)の報告に「副葬品に混じって小人骨片をわずかに認めることができた。」と記載されている。この地下式横穴墓から出土した古人骨を詳しく見てみると、下顎骨と右側切歯、右大腿骨片が遺存していた(第1・2図、写真-1)。性別は男性、年齢は成人個体と推定されている。歯式は次の通りである。

×	○	○	2	×		×	○	○	×
			■						

[○：歯槽解放 ×：不明 ■：遊離歯]

3-7 12号地下式横穴墓

『西都原古墳研究所・年報』第11号(西都市教育委員会1995)の報告に記載されている。そこには、腕骨と思われる人骨が遺存していたとある。

3-8 酒元ノ上横穴墓群

鬼ノ窟古墳の南に約300mに位置する酒元ノ上横穴墓群からは、2号墓・6号墓・7号墓から人骨が出土している。詳細については、調査報告書(西都市教育委員会1996)や「地下(竪坑)式横穴墓と墳丘の相関関係」(西都原考古博物館研究紀要2号)に掲載されているので本稿では割愛する。

3-9 中間台地上の地下式横穴墓

標高30m前後の中間台地上にも多くの地下式横穴墓が点在している。

堂ヶ嶋地区では、堂ヶ嶋第2遺跡において、2001～2002年に西都市教育委員会により発掘調査実施された(西都市教育委員会2003)。遺跡からは21基の地下式横穴墓が確認され、1～18号の番号が付されている³⁾。その内の2号・3号・6号・9号地下式横穴墓から骨片が出土している。

鷺田地区では、国分第2遺跡の発掘調査が2000年に西都市教育委員会により実施された(西都市教育委員会2004)。国分1～4号地下式横穴墓が確認され、1号と2号地下式横穴墓から人骨が出土している。

また、1969(昭和44)年1月8日付の宮崎日日新聞(第3図-④)に、県立妻高等学校の東南の原野において市営住宅建設中に地下式横穴墓が1基発見されたとの記述がある⁴⁾。記事には、骨片など腐れ完全なものはなかったとあり、埋め戻された、あるいは取り上げられなかった可能性がある。

3-10 それ以外の地下式横穴墓

1967(昭和42)年5月30日付の宮崎日日新聞(第3図-③)に、西都原古墳群西側の畑地で地下式横穴墓1基が発見されたとある。記事によれば、西に頭を向けたとみられる人骨片が出土したとある。しかし、人骨は調査後に埋め戻されたため、詳細は不明である。

さらに、12基以外にも西都原台地で発見された地下式横穴墓がある。

1968(昭和43)年4月27日付の宮崎日日新聞(第3図-⑤)に、高取公園前の第3集団地で、古墳の修復作業に使う

土をブルドーザーで掘っていた時に穴があき1基の地下式横穴墓が発見されたとの記述がある。記事には、東側に羨道があり、径30cmもある石でふさがれており、玄室は南北に2.18m、幅90cm、高さ78cmでドーム状の天井を有し、なかには頭骨と骨片があるが土器類は何もなかったとある。

また当館の前身である西都原資料館に収蔵されていた写真の中に、出土地不明の地下式横穴墓の写真がある(写真-2~5)。ラベルには「S43.5.10 西都原資料館地下式」と書かれており、日付は恐らく現像した日付だと考えられる。写真には、東側に羨道があるもの(写真-3)や、土器類は無く頭蓋骨と顎骨(恐らく上顎骨)だけの玄室内の出土状況(写真-5)の写真がある。そして、111号墳からみた九州山地の山並み(写真-6)と写真-3の山並みがほぼ同じであることを考慮すると、撮影場所は第3古墳群北西の位置(写真-7・8)といえるだろう。以上のことから写真-2~5と新聞記事の内容は符号する点が多いことから、新聞記事の地下式横穴墓と写真の地下式横穴墓は同一のものと考えておきたい。

4 おわりに

西都原古墳群内から出土した人骨について、過去の文献などを引用して整理を行った。その多くが、調査後埋め戻されている、あるいは痕跡のみで取り上げられていない。また取上げられていても、調査から時間が経過しており、西都原のどの場所から出土したか、もしくは所在の確認が困難であるものが多かった。そのため、今回の整理を契機に、今後も追跡調査を行っていきたい。

【註】

- 1) 西都原古墳群は、南北約4.2km、東西約2.6kmの範囲に分布する古墳群の呼称であるが、この範囲は、標高約60~80mの「西都原台地」、標高約30m前後の「中間台地」、標高約10m前後の沖積地から構成される。
- 2) 発見順に1~12号の番号を付している。
- 3) 数字が一致しないのは、17-1号と同じ墓道を共有する小型の3基に関して17-2~4号が付されているためである。
- 4) 正確な場所は不明だが、国分地下式横穴墓群と同じ墓域群に入ると推定される。

【引用・参考文献】

坂口昂・黒坂勝美・今西龍・濱田耕作・関保之助・柴田常恵
1915『宮崎縣兒湯郡西都原古墳調査報告』宮崎縣内務部

鳥居龍藏・小川琢治・原田淑人・柴田常恵・内藤虎次郎・今西龍
1918『宮崎縣史蹟調査報告』第三冊、宮崎縣内務部
濱田耕作・梅原末治 1917『宮崎縣西都原古墳調査報告』
西都市教育委員会・西都原古墳研究所 1983『宮崎縣西都原古墳
調査報告書』第一書房
日野巖 1932「西都原古墳群地下式横穴の遺物配列状態」『日向』
第7輯、日向郷土会
日高正晴 1958「日向地方の地下式墳」『考古学雑誌』第43巻4
号、日本考古学会
石川恒太郎 1973『地下式古墳の研究』帝国地方行政会
西都市教育委員会 1985『西都原古墳研究所・年報』第2号
西都市教育委員会 1995『西都原古墳研究所・年報』第11号
小片丘彦・竹中正巳・峰和治 1996「16号支線道路横穴墓群出土
の人骨について」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第22集
西都市教育委員会 2003「堂ヶ嶋第2遺跡」『西都市埋蔵文化財発
掘調査報告書』第33集
西都市教育委員会 2004「国分第3遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘
調査報告書』第38集
置田雅昭 他 2006「地下(堅坑)式横穴墓と墳丘の相関関係」『宮崎
県立西都原考古博物館研究紀要』第2号 宮崎県立西都原考古
博物館 43~121頁
甲斐貴充 2014「西都原古墳群の地下式横穴墓発掘調査の再整理
について」『宮崎県立西都原考古博物館研究紀要』第10号
宮崎県立西都原考古博物館 62~71頁
古谷毅・東憲章・藤木聡・吉永和美・西嶋剛広 2015「西都原古
墳群基礎調査における東京国立博物館との共同調査について
—珠文鏡・銅釧・挂甲小札の報告—」『宮崎県立西都原考古
博物館研究紀要』第11号 宮崎県立西都原考古博物館 1~
14頁
堀田孝博 2016「西都原古墳群におけるもう一つの古墳番号」
『宮崎県立西都原考古博物館研究紀要』第12号 宮崎県立西
都原考古博物館 68~73頁
北郷泰道 2005『西都原古墳群 南九州屈指の大古墳群』同成社
宮崎県立西都原考古博物館 2015『西都原の100年 考古博の10
年 そして、つぎの時代へ』 図録

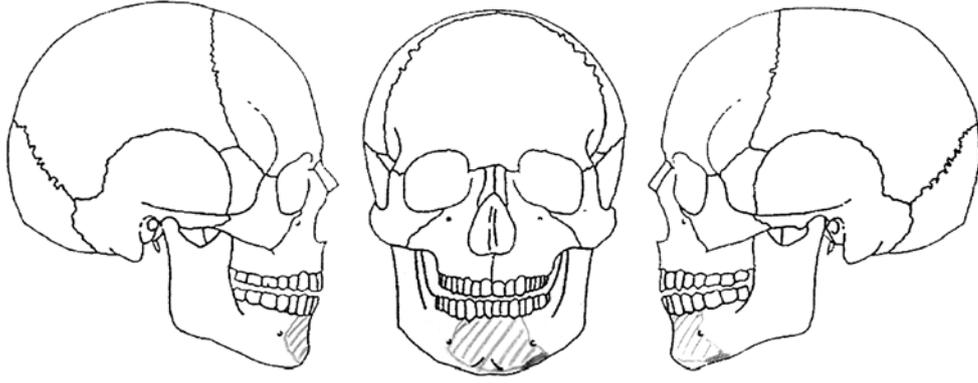
表1 大正調査で出土した古人骨一覧表

調査 次数	名 称		調査年月	出土部位	年齢	出典	備考
	現古墳番号	旧古墳番号					
1	71号墳	26号塚 (陪塚2号)	大正2年 1月	骨片 歯	—	宮崎縣内務部 1915	埋設された碑石に「歯牙、骨片ヲ 納メテ舊位ニ瘞ム」とある。
1	169号墳	110号塚	大正元年 12月	頭蓋骨片 臼歯4本	壮年	宮崎縣内務部 1915	埋設された碑石に「歯牙、骨片ハ 壺ニ納メテ舊位ニ瘞ム」とある。
2	283号墳	3号墳東北 陪塚	大正2年 3月	歯片	—	宮崎縣内務部 1918	
2	115号墳	1号塚	大正2年 3月	人骨のようなもの	—	宮崎縣内務部 1918	触れると形を失った
6	265号墳	船塚	大正6年 1月	骨灰	—	濱田・梅原 1917	鏡面の麻布片に付着

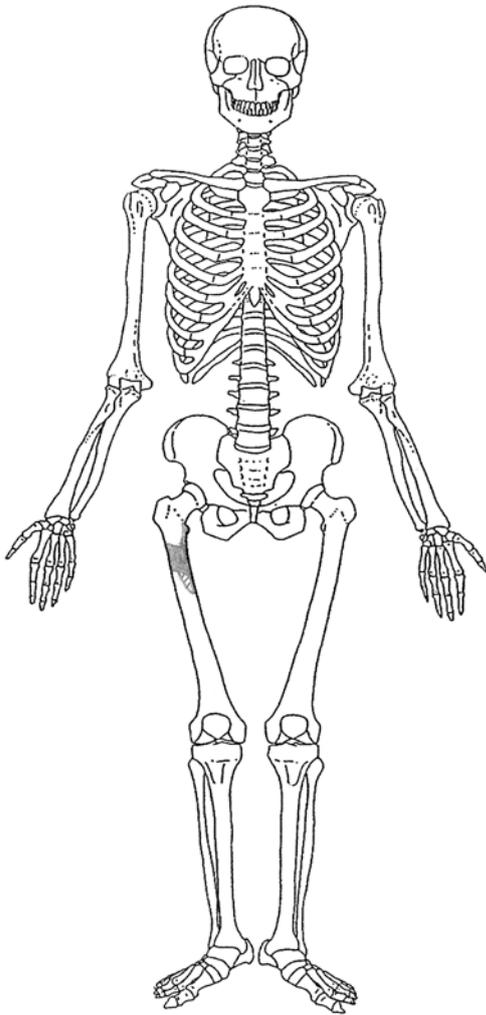
表2 地下式横穴墓から出土した古人骨一覧表

名称	調査年月	区域	人骨番号	出土部位	性別	年齢	出典	備考
西都原1号地下式	昭和3年8月	第2支群			—	—	日野1932・日高1958・ 石川1973	白い斑点を留めるのみ
西都原2号地下式	昭和26年	第2支群		歯24本	—	—	日高1958・石川1973	被葬者2体
西都原3号地下式	昭和30年4月	第2支群			—	—	日高1958・石川1973	
西都原4号地下式	昭和31年4月	第2支群		歯23本	—	壮年期	日高1958	
西都原5号地下式	昭和42年6月	第2支群		頭部・歯・足など	—	—	宮崎日日新聞記事 (1967.6.14・6.17)	被葬者2体 人骨はそのまま埋納
西都原6号地下式	昭和42年6月	第2支群			—	—		どちらかから被葬者2体
西都原7号地下式	昭和42年6月	第2支群			—	—		
西都原10号地下式	昭和59年7月	第2支群	西都原 10	右大腿骨・下顎骨	男性	成人	西都市教委1985	
西都原12号地下式	平成6年	第2支群		腕骨	—	—	西都市教委1995	
名称なし	昭和43年4月	第3支群		頭骨	—	—	宮崎日日新聞記事 (1968.4.27)	
酒元ノ上2-1号横穴墓	平成7年1月	酒元ノ上	酒元ノ上 2-1-A	歯5本	—	小児 (6歳位)	西都市教委1996	
	平成7年1月	酒元ノ上	酒元ノ上 2-1-B	頭蓋骨片・右上顎骨・ 左上腕骨片・左右大 腿骨・右踵骨	男性?	壮年		
酒元ノ上6-1号横穴墓	平成13年	酒元ノ上			—	—	北郷2005	被葬者2体以上
酒元ノ上6-2号横穴墓	平成7年1月	酒元ノ上	酒元ノ上6-2	ほぼ完全な人骨	女性	熟年	西都市教委1996	
酒元ノ上7-1号横穴墓	平成7年	酒元ノ上	酒元ノ上7-1	頭部・大腿骨など	—	—	西都原考古博物館研究 紀要2号	被葬者3体以上
名称なし	昭和42年5月	堂ヶ嶋?		骨片	—	—	宮崎日日新聞記事 (1967.5.30)	調査後、骨片は埋め戻 された
堂ヶ嶋2号・3号・ 6号・9号地下式横穴墓	平成14年	堂ヶ嶋		骨片	—	—	西都市教委2003	
国分1号・2号 地下式横穴墓	平成12年	鷺田			—	—	西都市教委2004	遺存状態の悪い人骨
名称なし (国分の一群か?)	昭和44年1月	鷺田		骨片	—	—	宮崎日日新聞記事 (1969.1.8)	

※人骨番号記載のものは西都原考古博物館に収蔵・保管されている。



第1図 西都原10号人骨 下顎遺存部位（アミ部分）



第2図 西都原10号人骨 体肢骨遺存部位（アミ部分）



写真-1 西都原10号人骨（男性・成人） 大腿骨



地下式古墳の発掘調査

西都原古墳群の西側で発見された地下式古墳の発掘調査の様子。この古墳は、西都原古墳群の西側で発見された地下式古墳の発掘調査の様子。この古墳は、西都原古墳群の西側で発見された地下式古墳の発掘調査の様子。

古墳時代の食物？も

西都原 発掘調査で見つかる

西都原古墳群の西側で発見された地下式古墳の発掘調査の様子。この古墳は、西都原古墳群の西側で発見された地下式古墳の発掘調査の様子。この古墳は、西都原古墳群の西側で発見された地下式古墳の発掘調査の様子。

足利時代に建てられた西都原古墳群の西側で発見された地下式古墳の発掘調査の様子。この古墳は、西都原古墳群の西側で発見された地下式古墳の発掘調査の様子。この古墳は、西都原古墳群の西側で発見された地下式古墳の発掘調査の様子。

地下式古墳みつかる

西都 人骨四体など出土



古墳群第三集団地で発掘された地下式古墳（西都原古墳群）

西都原古墳群の西側で発見された地下式古墳の発掘調査の様子。この古墳は、西都原古墳群の西側で発見された地下式古墳の発掘調査の様子。この古墳は、西都原古墳群の西側で発見された地下式古墳の発掘調査の様子。



地下式古墳の発掘調査

①宮崎日日新聞 1967(昭和42)年6月14日
* 西都原5~7号地下式横穴墓の発見記事

②西日本新聞[宮崎版] 1967(昭和42)6月17日
* 西都原5~7号地下式横穴墓の発見記事

③宮崎日日新聞 1967(昭和42)年5月30日
* 西都原古墳群西側で発見された地下式横穴墓の発見記事



見つけられた地下式古墳の発掘調査

原形の首長つば

直刀、貝殻なども発掘

西都原古墳群の西側で発見された地下式古墳の発掘調査の様子。この古墳は、西都原古墳群の西側で発見された地下式古墳の発掘調査の様子。この古墳は、西都原古墳群の西側で発見された地下式古墳の発掘調査の様子。

地下式古墳見つかる

西都原の第三集団地で

西都原古墳群の西側で発見された地下式古墳の発掘調査の様子。この古墳は、西都原古墳群の西側で発見された地下式古墳の発掘調査の様子。この古墳は、西都原古墳群の西側で発見された地下式古墳の発掘調査の様子。

④宮崎日日新聞 1969(昭和44)年1月8日
* 鷺田地区で発見された地下式横穴墓(国分第2・第3遺跡の近隣地と推定される)

⑤宮崎日日新聞 1968(昭和43)年4月27日
* 西都原第3支群で発見された地下式横穴墓の発見記事

第3図 西都原古墳群における古人骨の発見記事



写真-2 ブルドーザーによりできた陥没
(東より・後ろの山は高取山)



写真-3 石で塞がれている羨道



写真-4 地下式横穴墓出土の見学風景 (南より)



写真-5 玄室内古人骨出土状況



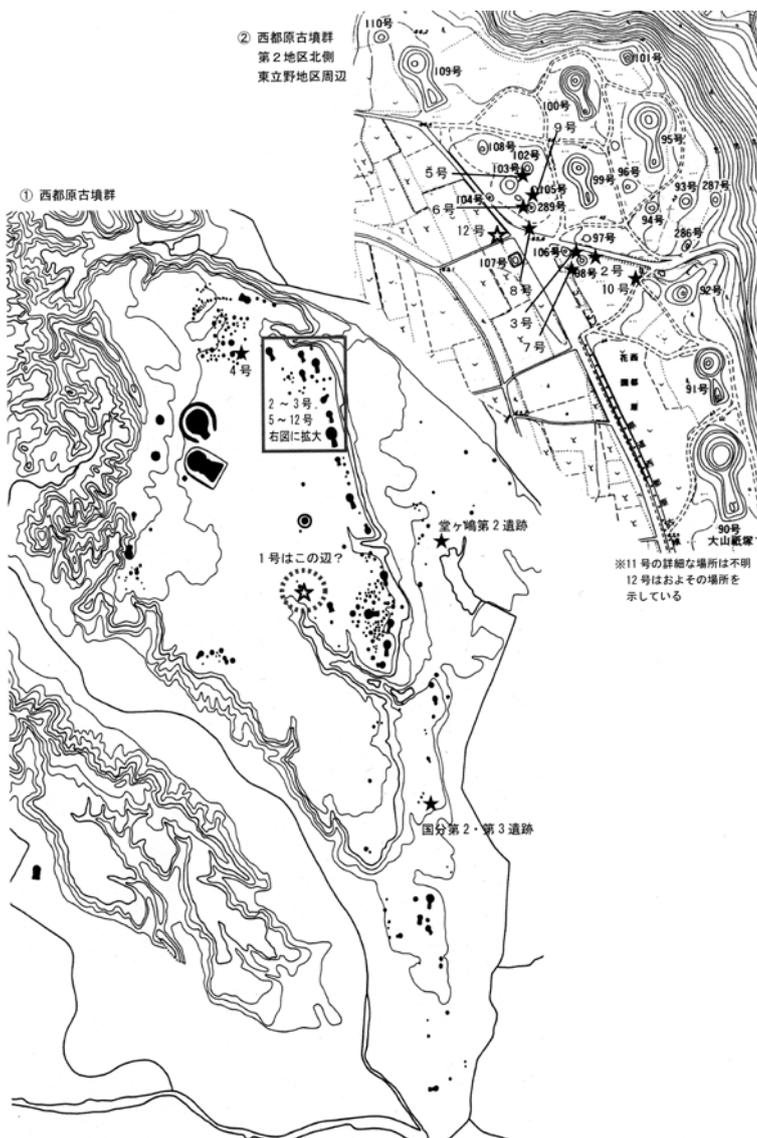
写真-6 111号墳墳頂からみた九州山地の山並み



写真-7 地下式横穴墓が所在したと推定される範囲



写真-8 地下式横穴墓があった所在したとされる範囲（アミ部分）



第4図 西都原古墳群の地下式横穴墓分布図

*西都原考古博物館研究紀要第10号より改変・転載

古墳時代玉類の資料紹介

－ 銭亀塚出土の雁木玉・鈴鏡塚出土の四角玉等 －

倉木 真由美

1 はじめに

古代歴史文化にゆかりの深い14県(埼玉県/石川県/福井県/三重県/兵庫県/奈良県/和歌山県/鳥取県/島根県/岡山県/広島県/福岡県/佐賀県/宮崎県)が参加している古代歴史文化協議会では、古墳時代の玉を素材とし、互いに連携して、これまでに各県が集積してきた考古学及び古代史の研究成果を基礎に、更に共同調査研究することによって、個々の地域的な研究だけでは見えにくかった日本の大きな古代史の流れを解明することを目的に活動している(同協議会ホームページより)。

当館では、所蔵している宮崎県内出土の古墳時代玉類について、古代歴史文化協議会の活動に伴って検討してきた。本稿は、その一環で図化した銭亀塚(あるいは銭亀古墳、串間市所在/6世紀代)出土の雁木玉、鈴鏡塚(あるいは草場古墳、日向市所在/6世紀前半)出土の勾玉・管玉・四角玉について紹介するものである。

報告書中(宮崎県教育委員会1955)には、玉類の出土経過等が詳述されている一方で、玉類の実測図については、鈴鏡塚では計測値・写真のみで図の掲載はなく、銭亀塚の雁木玉についても簡略なものが提示されたのみである。したがって、今回の報告が銭亀塚・鈴鏡塚出土の玉類について、今日的な実測図の初出となる。なお、銭亀塚では、雁木玉の他にガラス小玉35点も出土しているが¹⁾、今回、写真のみ掲載している(写真5)。

2 報告資料の概要

今回報告する古墳時代の玉類は、日高重孝・鏡山猛・石川恒太郎等をメンバーとする日向遺跡調査団によって発掘されたものである。調査期間は、銭亀塚が1953(昭和28)年1月23日から同29日、鈴鏡塚が同年9月14日から同17日であり、1冊の報告書に章を分けて報告されている(宮崎県教育委員会1955)。報告書の記載から、主に玉類の出土状況について概要を抜き出すと以下のとおりである。

銭亀塚は、東西3m以上(東側の石積みは調査時にはすでに消失)・南北0.7m・残深0.4mの平石積石槨を埋葬主体部としている。雁木玉は、石槨西壁から東へ2.66m・北壁から0.25mの位置から出土した。石槨内からは、雁木

玉の他に、釘(西壁から東へ1.05m・北壁から0.2m)・銀環(雁木玉から西北へ0.1m)、小玉(その付近0.2m四方に散乱)、鉄鏃(銀環から西へ0.15mに1点、雁木玉から南へ0.25mに1束)が確認された。石槨外側からは、鏡片・須恵器片等が出土した(宮崎県教育委員会1955)。銭亀塚出土の雁木玉は、宮崎県内出土の外来系玉類を代表するものであり、赤・白・緑・黄の4色が練り込まれた、色鮮やかで美しいガラス玉である。雁木玉にはいくつかの種類があり、日本列島の古墳時代および朝鮮半島の三国時代のもの合わせてもおおよそ30点前後と希少な玉である(藤木2016)。

鈴鏡塚は造り出し付きの直径約20mの円墳であり、埋葬主体部は粘土槨とされる。鈴鏡塚から出土した玉類は、ヒスイ製勾玉2点・ガラス製勾玉3点・碧玉製管玉8点・ガラス製四角玉1点である²⁾。墳頂に設定した原点から北へ1.8mで勾玉、そこからさらに北へ0.4～0.8m・地表下0.8mで勾玉・管玉等がまとまって出土した。また、原点から北へ1.3m・地表下0.32mで鈴鏡1面があり、鏡の南西に接して管玉1点等が出土した。四角玉について、詳細な出土位置の記載はない(宮崎県教育委員会1955)。四角玉は、報告書中で「雙六の采に似たる角形の切子玉一個(水晶)」と記載されているものの、正しくはソーダ色をしたガラス製である。宮崎県内での類品は、柿木原2号地下式横穴墓(宮崎市所在/6世紀後半)、狐塚古墳(日南市所在/7世紀前半)各1点の計3点と少ないものである(藤木2016)。

【註】

- 1) 報告書(宮崎県教育委員会1955)では、ガラス製小玉は36点出土したと記載されているが、現在、当館で所蔵しているのは35点である。
- 2) 報告書(宮崎県教育委員会1955)にはヒスイ製勾玉2点の写真が掲載されているが、現在、当館では、小形の方の1点のみ所蔵している。

【引用文献】

古代歴史文化協議会ホームページ <http://kodairekibunkyo.jp/>

藤木 聡 2016「宮崎県内出土の外来系玉類と東アジアにおける雁木玉」『玉から古代日韓交流を探る』第2回古代歴史文化協議会講演会資料
宮崎県教育委員会 1955「福島町銭亀塚調査報告」「日向市鈴鏡塚調査報告」『日向遺跡調査報告書』第2輯

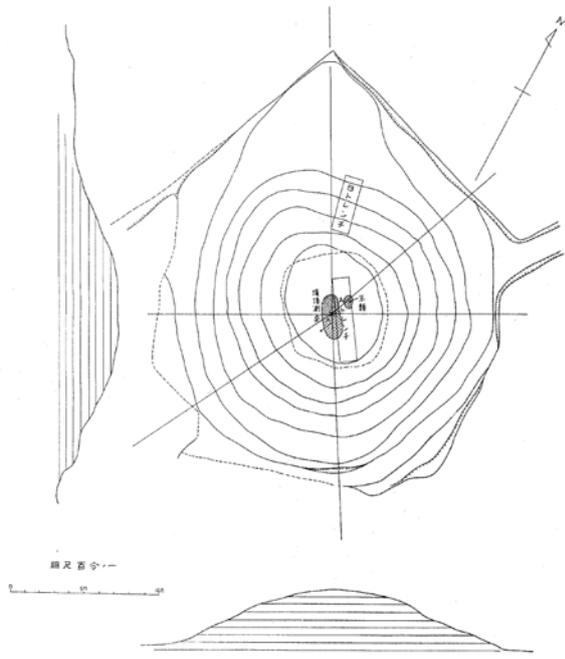


図1 鈴鏡塚の墳丘実測図と調査区の位置

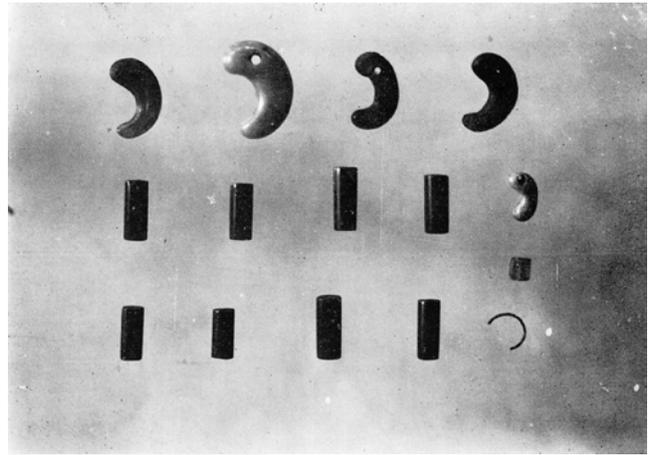


写真1 鈴鏡塚出土の玉類



写真2 鈴鏡塚出土の四角玉

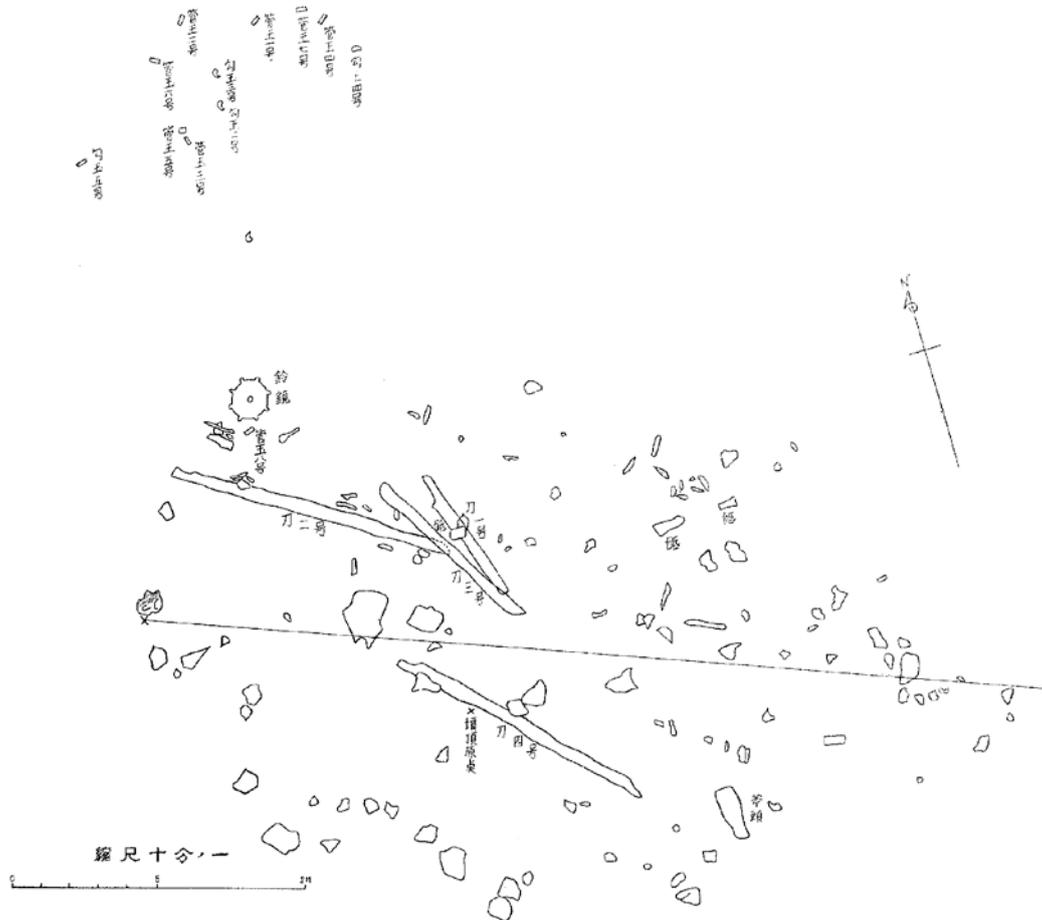


図2 鈴鏡塚の遺物出土状況

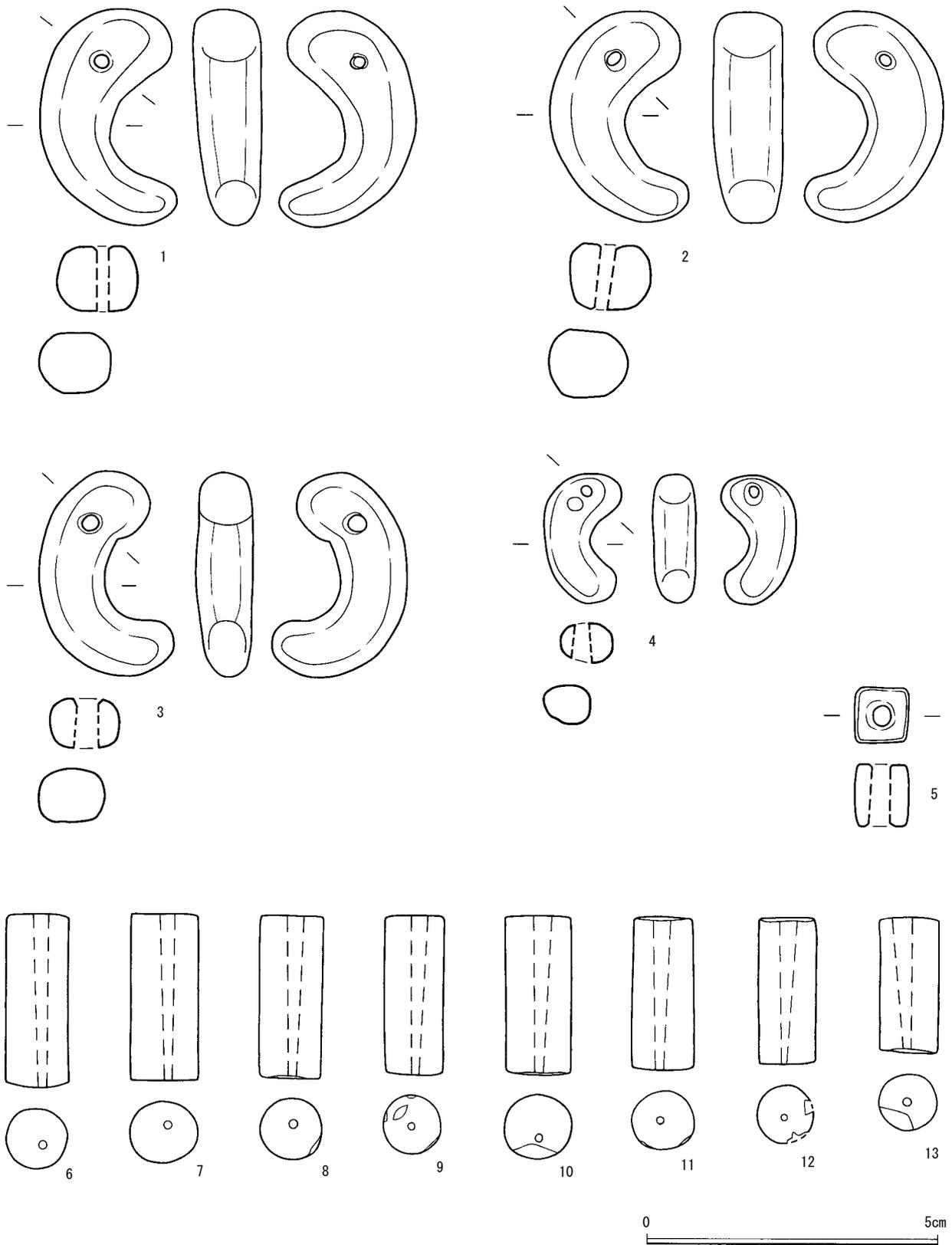


図3 鈴鏡塚出土玉類の実測図

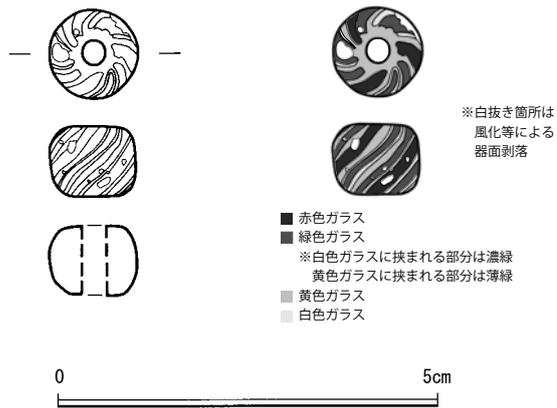


図4 銭亀塚出土の雁木玉実測図



写真3 銭亀塚出土の雁木玉写真



写真4 銭亀塚の埋葬施設

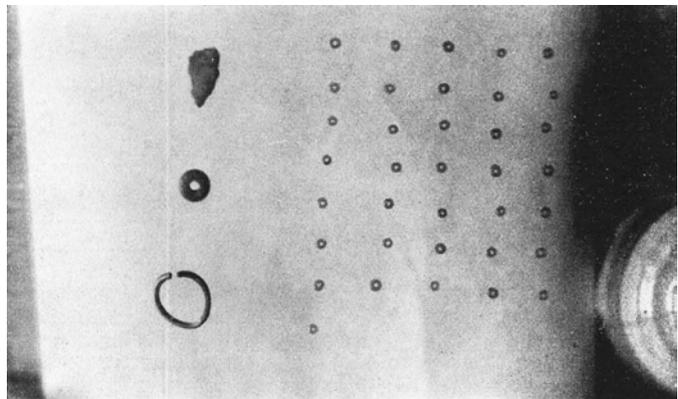


写真5 銭亀塚出土の玉類

【図出典】

図1・写真1・図2・写真4・写真5：宮崎県教育委員会1955より転載・一部改変

写真2・写真3：当館撮影、図3・4：実測（長田博子）、製図（倉木真由美・赤木佑可理）

表1 鈴鏡塚・銭亀塚出土玉類の計測表

No	古墳	器種	材質	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	孔径(mm)	重量(g)	色調
図3-1	鈴鏡塚	勾玉	ガラス	3.7	2.35	1.15	2.0	11.3	ダルクグリーン
図3-2	鈴鏡塚	勾玉	ガラス	3.6	2.4	1.2	2.5	12.2	ダルクグリーン
図3-3	鈴鏡塚	勾玉	ガラス	3.5	2.3	0.95	3.5	8.6	ディーブグリーン
図3-4	鈴鏡塚	勾玉	翡翠	2.2	1.3	0.75	3.8/2.0	3.5	ライトグレー/ビビットグリーン
図3-5	鈴鏡塚	四角玉	ガラス	0.95	0.9	1.0	3.0	1.6	ライトグレイッシュグリーン
図3-6	鈴鏡塚	管玉	碧玉	3.0	1.1	1.05	2.5/1.5	6.5	ダークブルーグリーン
図3-7	鈴鏡塚	管玉	碧玉	2.9	1.05	1.1	2.5/1.2	7.3	ダークブルーグリーン
図3-8	鈴鏡塚	管玉	碧玉	2.8	1.1	1.05	3.0/1.5	6.2	ダークブルーグリーン
図3-9	鈴鏡塚	管玉	碧玉	2.75	1.05	1.0	2.8/1.1	5.5	ダークブルーグリーン
図3-10	鈴鏡塚	管玉	碧玉	2.75	1.15	1.1	3.0/1.0	6.5	ダークブルーグリーン
図3-11	鈴鏡塚	管玉	碧玉	2.65	1.1	1.0	3.0/1.2	5.6	ダークブルーグリーン
図3-12	鈴鏡塚	管玉	碧玉	2.55	1.0	1.0	3.0/1.0	4.7	ダークブルーグリーン
図3-13	鈴鏡塚	管玉	碧玉	2.35	1.0	1.0	3.0/1.0	4.7	ダークブルーグリーン
図4-1	銭亀塚	雁木玉	ガラス	1.15	1.15	0.95	3.0	2.1	

表採資料から探る、新富町茶碗山窯跡

谷口 晴子

1 はじめに

宮崎県内には約25か所、近世以降の窯跡が存在するが(宮崎県立美術館2004)、そのうちのひとつである新富町茶碗山窯跡の表採資料が当館に収蔵されている。今回、これらの資料を図化し比較検討を行い、茶碗山窯跡のおおよその年代や窯道具・製品の特徴把握を試みた。

2 茶碗山窯跡について

茶碗山窯跡は、新富町大字新田字井手之内に所在する近世の窯跡である(図1)。1968年発行『文化庁埋蔵文化財包蔵地分布地図 宮崎県編』において、近世窯跡の埋蔵文化財包蔵地とされている。発掘調査は行われていないが、1981年に小田省三氏による茶碗山窯跡踏査(小田1982)¹⁾、新富町教育委員会による遺跡詳細分布調査が行われている(新富町教育委員会1982)。

その後2004年度から2006年度にかけて、再度行われた新富町教育委員会による町内の遺跡詳細分布調査において、茶碗山窯跡の踏査も実施された(新富町教育委員会2007)。その際、甕片と、4基の窯跡が目視により確認されている²⁾。

3 茶碗山窯跡表採資料の収蔵に至る経緯

当館に収蔵されている茶碗山窯跡表採資料は、元は宮崎県総合博物館の所蔵であった。2004年度の当館の開館に伴い、移管された資料のひとつである。コンテナにして2箱程度の量であるが、この資料が総合博物館に収蔵された経緯については、現時点では不明である。

1981年に開催された特別展「日向のやきもの」出品目録に茶碗山窯跡資料があり、総合博物館所蔵と記載されていることから、この頃には既に総合博物館に収蔵されていたことまでは確認できた³⁾。

4 表採資料の検討

(1) 資料選別

表採資料の中には窯で焼成された製品以外の陶磁器、つまり生活用品も混入している可能性を考慮するとともに、宮崎県総合博物館に収蔵された経緯が現時点で不明であることから、当該資料が茶碗山窯跡表採資料であることを検証する必要がある。

まずは確実な茶碗山窯跡の資料を得るべく、現地へ赴き、表採資料の収集を行った⁴⁾。その結果、トチン、ハマ等の窯道具、窯壁片、挿鉢・甕等の陶器類、軟質施釉陶器片約40点を採集した。それらの胎土は、実体顕微鏡(×20倍)で確認したところ、陶器片・窯道具については1mm以下の黒色砂粒を含む(その割合はバラツキがある)灰白の胎土、軟質施釉陶器片については精製された浅黄色の胎土(わずかに1mm以下の黒色砂粒混入がみられる破片もある)と二種類の胎土に分けることが出来た。この二種類の胎土を基準に当館収蔵の表採資料を確認していったところ、陶片45点の内、42点が該当した。その中から、焼成不良や焼成による破損・被熱を受けているものを中心に14点、現地踏査にて採集した資料4点を図化した。

(2) 図化資料の検討(図2・表1)

陶器類(図2-1・2・5・6・7)

小皿(1)、香炉(2)、甕(5)、挿鉢(6)、鉢(7)がみられる。香炉(2)以外は灰白の胎土である。

小皿(1)は全体的に厚手で、内面のみ釉が施されているが、その掛け方にムラがあり、粗雑である。香炉(2)の胎土は、軟質施釉陶器類の胎土に近いが、器表面に掛けられた釉薬が溶融していない点等から、焼成不良と判断した。底部付近に退化した脚部のようなものが貼り付けられている。甕(5)は、口唇部は無釉で目跡が残る。口縁部はその先端を外側に折り曲げ、断面台形を呈す。挿鉢(6)は、1月の踏査にて採集したもので、同規格の破片が収蔵資料でも確認されている。スリ目が7条で2本がX状に交差したものが巡らされている。見込み部分にはスリ目はみられない。

軟質施釉陶器類(図2-3・4・8・9)

皿(3・4)、羽釜等(8・9)がみられる。全て浅黄色の胎土である。前述したように、焼成不良の香炉(2)の胎土が同質であったため、これらの製品である可能性も考えたが、今回実施した踏査にて鉛釉を施した陶片を採集した⁵⁾ことから、軟質施釉陶器製品を生産していたと判断した。これらの製品は、黄釉、褐釉、緑釉、透明釉を施している。

皿(3・4)は、内面に仕切りを設ける等、複雑な造形を呈している。内面は魚の鱗もしくは青海波のような文様を胎土に細い沈線にて彫り込み黄釉を施し、外面には掛

けムラはあるが、褐釉を施している。

窯道具(図2-10~18)

サヤ鉢(10)、ハマ類(11~14)、輪トチン(15)、トチン(16)等がみられる。11、14、15の窯道具は、1月の踏査採集資料で、その他は館蔵資料である。

18は軟質施釉陶器と同様の浅黄色の胎土で、直方体状を呈する。他は灰白・黒色砂粒混入の胎土である。型成形による布目痕の残る大型ハマ(11)、ロクロ成形のハマ(12)等製作技法の異なるものの他、切高台付ハマ(13)、足付ハマ(14)といった形状に特徴のあるものがみられた。切高台付ハマは、重ね焼きするための窯道具である。雪山遺跡(鹿児島県立埋蔵文化財センター2003)のほか、九州内では熊本県小代焼窯跡、福岡県田香焼窯跡、大分県末広窯跡が、県内では延岡市小峰窯、宮崎市佐土原町茶屋窯、明治以降の窯である都城市庄内平田窯跡にみられる(堀田2009、堀田・柳田2006)。この道具は、19世紀まで使用されたことが判明しているが、出現時期については不明である。

また、大橋康二氏による肥前窯の窯構造・窯道具の編年によると、足付ハマの出現は第6グループ(18世紀後半~19世紀)となる。

(3) 窯跡について

ここで茶碗山窯の窯本体についても少し触れたい。

小田氏の踏査時(1981年)は、雑木に覆われ窯の形状は目視では不明だったが、山の中腹に東西に窯が5基?並んで築かれていたと、聞き取りにより明らかにしている(小田1982)。

前述したが、2004年度からの新富町教育委員会による遺跡詳細分布調査において、茶碗山窯跡の窯跡は目視にて4基確認されている。

現在、茶碗山窯跡は雑木に覆われた状態ではあったが、今回の踏査時、その地表面から窯壁の一部を確認することが出来た(写真2、3)。

窯壁は列を成しているようにみえる箇所もあったが、全容把握は難しく、窯構造や窯数等は確認出来なかった。そうした窯壁の一部にはガラス化した部分がみられる等、高温焼成が行われていた様子がうかがえる。トンバイの使用は確認出来なかった。

5 新富町茶碗山窯跡に関連する記録

茶碗山窯跡の所在する新富町新田は、近世においては佐土原藩領で島津氏の統治下にあった。藩内には茶碗山窯跡以外にも近世の窯跡が現在の宮崎市佐土原町内で2

か所ほど確認されている(小田1973)。

「佐土原藩嶋津家日記」によると、佐土原藩では、1687(貞享4)年に島津宗家である薩摩藩領の元立院系薩摩焼の窯場である元立院に「土器作 黒木勘之允」を派遣したという記録がある(新富町1992、宮崎県立美術館2004)。その翌年には佐土原藩に、薩摩藩帖佐から「焼物師 彦兵衛」を招き、指導を受けている。降って1742・43(寛保2・3)年には、佐土原藩内に苗代焼物稽古所を設置するべく、その指導者として朴万水、朴仙徳、朴正訓、朴清念らの陶工が招致されたという記述が苗代川に保存されていた古文書「古記留渡海以来事件」にある(佐土原町1982)。その後、文政年間(1818~1831)に佐土原藩内に焼物稽古所を設けるも、土質が悪いこともあり、藩専売品になるまでには至らなかったとされる(新富町1992)。これらの記録から、17世紀後半から19世紀前半にかけて、佐土原藩が島津宗家である薩摩藩の助けを借り、窯業を推進していた様子が窺える。苗代焼物稽古所は、宮崎市佐土原町上田島字茶屋に所在する茶屋窯のことを指し(堀田2009)、直接茶碗山窯についての記述はみられないが茶碗山窯も佐土原藩の支援の元、稼動していたのではないだろうか。

6 まとめ

今回、茶碗山窯跡採集資料から

- ・ 陶器類、軟質施釉陶器類の焼成を行っていた
- ・ 製品の種類は陶器は甕・鉢類が中心、軟質施釉陶器は皿・羽釜等がみられる
- ・ 窯にはトンバイ未使用か
- ・ 窯道具・文献史料から18世紀後半~19世紀に稼働していた可能性がある
- ・ 輪トチン、軟質施釉陶器類等の資料から、薩摩焼の窯場から技術指導を受けながらも、他の窯場の技術も導入していた

等が明らかとなった。これらの結果を踏まえて、茶碗山窯跡の稼動年代やその技術系譜等の疑問点を解明していきたい。

謝辞

本稿の執筆にあたり下記の方々に大変お世話になりました。文末ではありますが記して感謝を申し上げます(敬称略、五十音順)。

有田辰美 面高哲郎 近藤 協 関 明恵 土屋公雄 永友良典 樋渡将太郎 堀田孝博

【註】

- 1) 小田氏は延岡市在住の医者でありながら、有志と共に県内窯跡の保護や実態解明に尽力した人物である。
- 2) 新富町教育委員会 樋渡将太郎氏に教示いただいた。
- 3) 総合博物館元職員近藤協氏によると、この展示に関連して県内窯跡の踏査及び資料収集が行ったので、その際収蔵された可能性があるという。そこで当時の展示担当者であった面高氏・土屋氏両名にも話を伺ったが、事実関係は不明であった。
- 4) 2018年1月22日に行った。
- 5) 堀田氏にご教示いただいた。

【参考・引用文献】

- 宮崎県立美術館 2004『宮崎の陶磁器-その源泉をたどって-』、15・64-65頁
- 新富町教育委員会 1982『新富町の埋蔵文化財 遺跡詳細分布調査報告書』、8頁
- 新富町 1992『新富町史 通史編』、231頁
- 小田省三 1973『佐土原焼(宮崎県宮崎郡佐土原町)の研究 第4輯』
- 小田省三 1982『第6輯 上平原窯 第7輯 新茶屋窯 第8輯 茶碗山窯 第9輯 古場窯 第10輯 乙房平田窯 第11輯 金穀寺窯』、4頁
- 佐土原町 1982『佐土原町史』
- 大橋康二 1989『考古学ライブラリー-55肥前陶磁』ニューサイエンス社
- 新富町教育委員会 2007『新富町の埋蔵文化財(改訂版) 新富町遺跡詳細分布調査報告書2』新富町文化財調査報告書第46号、22・57頁
- 新富町教育委員会 2008『町内遺跡24 平成19年度町内遺跡発掘調査報告書』新富町文化財調査報告書第50集、6頁
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2003『雪山遺跡 猿引遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書53
- 堀田孝博 柳田晴子 2006「小峰焼の考古学的再検討」『宮崎考古 20』宮崎考古学会
- 堀田孝博 2009「茶屋窯跡の採集資料について」『からから No. 25』鹿児島陶磁器研究会

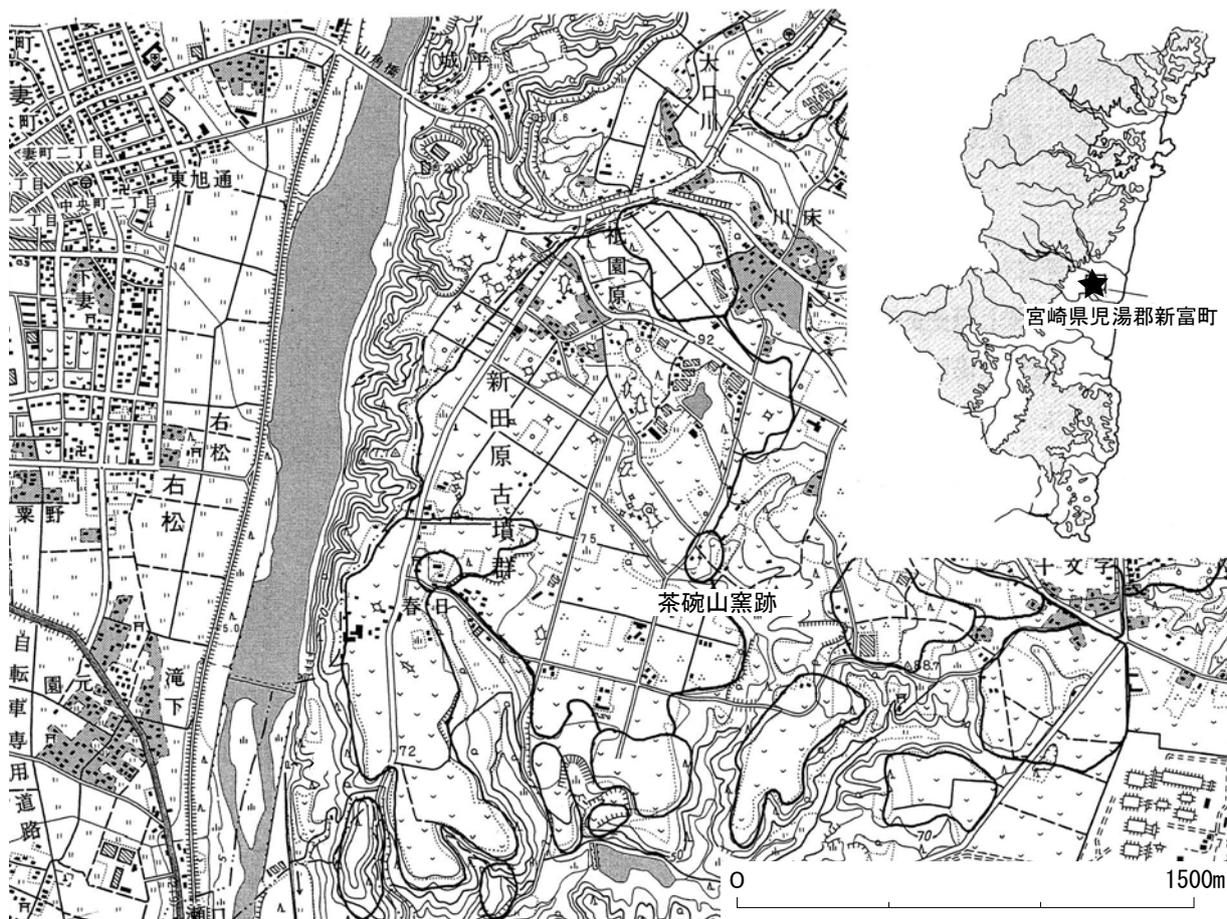


図1 茶碗山窯跡位置図（新富町教委2008を一部改変）

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	釉薬	色調	備考
1	陶器	小皿	(9.8)	(1.8)	(5.3)	灰白 (Hue 10Y7/1) 1mm以下黒色砂粒わずか含む	黄褐色		内面施釉 ムラ有り
2	陶器	香炉	(10.0)	(4.8)	(5.8)	浅黄 (Hue 2.5Y 7/3) 1mm以下黒色砂粒わずか含む	釉溶けておらず 外面~内面口縁部 付近まで施釉	明黄褐 (Hue 10YR 6/6)	焼成不良。 退化した足あり。
3	軟陶	皿		3.7		浅黄 (Hue 2.5Y 7/3) 1mm以下黒色砂粒わずか含む	内面底部明褐色 外面褐色 底部付近 薄く施釉	明黄褐 (Hue 10YR 6/8) 褐 (Hue 10YR 4/4)	内面に線彫りで文様を施す 粘土貼付あり
4	軟陶	皿		3.5		浅黄 (Hue 2.5Y 7/3) 1mm以下黒色砂粒わずか含む	内面底部明褐色 外面褐色 底部付近 薄く施釉	明黄褐 (Hue 10YR 6/8) 褐 (Hue 10YR 4/4)	内面に線彫りで文様(鱗?青海波?)を施す 内面に仕切り?貼付
5	陶器	甕				灰白 (Hue 10Y7/1) 1mm以下黒色砂粒わずか含む	口唇部以外施釉	灰 (Hue 7.5Y 5/1) 灰黄褐 (Hue 10YR 4/2)	断面被熱
6	陶器	搦鉢	(19.8)	(5.2)	(9.7)	にぶい赤褐 (Hue 5YR 5/4)	無釉	灰黄褐 (Hue 10YR 4/2)	7条スリ目 2本をX状に交差し巡らす 1月表採品
7	陶器	鉢				灰白 (Hue 10Y7/1) 1mm以下黒色砂粒少し含む	無釉	灰黄褐 (Hue 10YR 4/2)	口縁部にゆがみ有り
8	軟陶	羽釜				浅黄 (Hue 2.5Y 7/3) 1mm以下黒色砂粒わずか含む	透明釉を羽根上に 施釉、緑釉で文様描く 羽根下、内面無釉	浅黄 (Hue 2.5Y 7/3)	軟陶、実測図なし
9	軟陶	羽釜	(19.6)	(12.9)	11.4	浅黄 (Hue 2.5Y 7/3) 1mm以下黒色砂粒わずか含む	内面底部黄褐色 外面羽根下無釉 外面羽根上・ 内面上部褐色	明黄褐 (Hue 10YR 6/8) 浅黄 (Hue 2.5Y 7/3) 褐 (Hue 10YR 4/4)	羽根下スス付着
10	窯道具	サヤ鉢	(14.5)	(14.6)	(7.8)	黒 (Hue 7.5YR 2/1) 1mm以下黒色砂粒わずか含む	無釉	褐 (Hue 10YR 4/4) 赤褐 (Hue 5YR 4/8)	胎土フレッシュ面で確認出来ず(断面被熱) ナデ成形
11	窯道具	ハマ		4.5	(30.2)	浅黄 (Hue 2.5Y 7/3) 1mm以下黒色砂粒わずか含む	無釉	褐 (Hue 10YR 4/4)	上面に布目痕(1mm以下の目の細かい布) 断面も熱を受けている、1月表採品
12	窯道具	ハマ	(21.9)	(3.4)	(14.5)	灰白 (Hue 10Y7/1) 1mm以下黒色砂粒わずか含む	無釉	浅黄 (Hue 2.5Y 7/3)	ロクロ成形
13	窯道具	切高台付ハマ		(5.2)	(25.0)	灰白 (Hue 10Y7/1) 1mm以下黒色砂粒少し含む	無釉	褐 (Hue 10YR 4/4)	
14	窯道具	足付ハマ		1.6		灰白 (Hue 10Y7/1) 1mm以下黒色砂粒少し含む	無釉	にぶい黄褐 (Hue 10YR 5/3)	1月表採品
15	窯道具	輪トチン				灰白 (Hue 10Y7/1) 1mm以下黒色砂粒少し含む	無釉	灰黄褐 (Hue 10YR 4/2)	2個溶着、底部に稲モミ痕、1月表採品
16	窯道具	トチン	(8.5)	18.1	9.4	灰白 (Hue 10Y7/1) 1mm以下黒色砂粒多く含む	無釉	黒 (Hue 10YR 2/1)	上面、下面にも製品溶着痕あり
17	窯道具					浅黄 (Hue 2.5Y 7/3) 1mm以下黒色砂粒わずか含む	無釉	浅黄 (Hue 2.5Y 7/3)	指痕多数、一部釉薬付着
18	窯道具					浅黄 (Hue 2.5Y 7/3) 1mm以下黒色砂粒わずか含む	無釉	浅黄 (Hue 2.5Y 7/3)	指痕あり

表1 茶碗山窯跡表採資料観察表

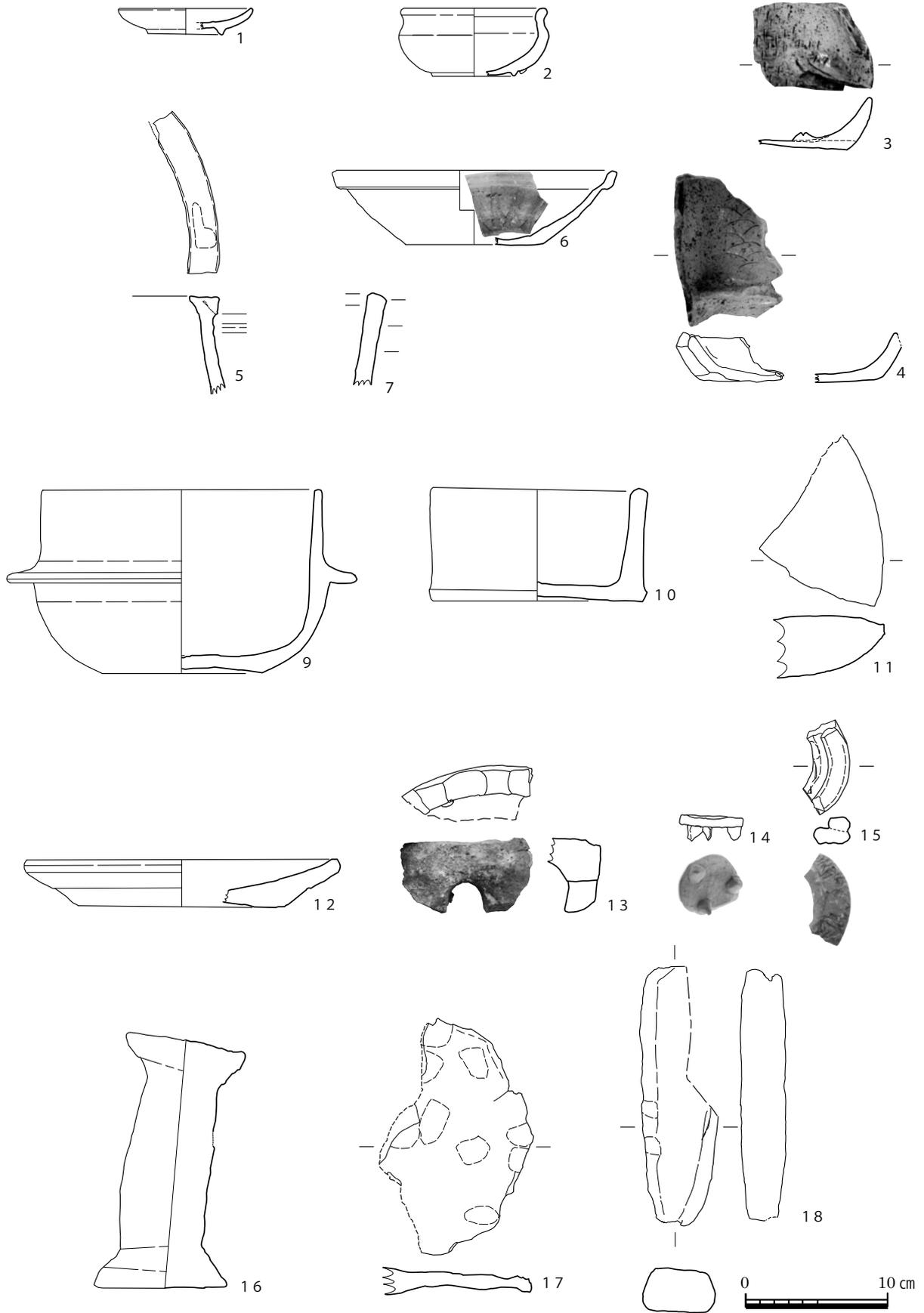


图2 茶碗山窯跡表採資料実測図 (S=1/4)



写真1 茶碗山窯跡 遠景



写真2 茶碗山窯跡 窯壁①



写真3 茶碗山窯跡 窯壁②



写真4 茶碗山窯跡表採陶器甕(5)



写真5 茶碗山窯跡表採軟質施釉陶器皿(3, 4)



写真6 茶碗山窯跡 窯道具(手前18)

文化財活用促進事業「甦れ！古代ロマン復元住居再生事業」

－古代復元住居の屋根葺き替えまでの道程－

田中 敏雄

1 事業概要

西都原考古博物館の一角に位置する古代復元住居は、1966年から開始された「史跡等環境整備計画(風土記の丘整備事業)」によって、博物館の前身である旧西都原資料館の附属施設として設置されたものである(写真1)。この風土記の丘整備事業は、歴史的景観の創出を目的としたものであり、古代復元住居もまさに景観の一部として定着している。

しかし、設置から半世紀近い歳月が経過し、茅葺き屋根の劣化が著しく、改修が必要な状態となっていた。この改修作業を専門業者に委託するのではなく、地域在住の技術の継承者の協力を得て、県民参加型のイベントとして2年をかけて古代復元住居の改修を行った。また、資材の確保から改修までの各工程は、文化と技術の継承のため詳細に記録を残した。

事業初年度(2015)は、改修に向けて必要な材料の準備期間とし、2016年度は、確保した改修資材を用いて屋根の葺き替えを行った。

2 屋根の葺き替え工事

古代復元住居は、1966年の建設以来3回の屋根の葺き替え工事を行ってきた。これは、いずれも宮崎県内の専門業者による工事である。

- ・1回目 1974年12月(写真2)
- ・2回目 1986年2月(写真3・4)
- ・3回目 1997年4月(写真5)

3 事業の実際(2015年度、2016年度)

① 2015年度(全6回)

- ・第1回 2015年7月26日(日)
「オリエンテーション」

最初のオリエンテーションを実施した。参加者は45名のうち27名。今後の日程や活動内容、服装などについての説明と古代復元住居の現況見学を行った。

- ・第2回 2015年8月9日(日)
「ヒノキの伐採、樹皮剥がし」(写真6・7)

西都市銀鏡のヒノキ林において、伐採したヒノキの

樹皮を剥がす作業を行った。木を削って作った専用の工具を用いて、樹皮を少しめくり、そこから手で剥がしていく。昼食は、猟師が動物に遭遇した際にすぐに行動できるよう立ったまま片手でも食べられる「狩人飯(かりんどめし)」を食べた。最終的には、約40本のヒノキの樹皮を剥がした。作業の最後には、指導者の方たちが、古くからこの地に伝わる「木おろし歌」を披露した。静かな林の中に響く歌声が感動的であった。

- ・第3回 2015年10月11日(日)

「茅場見学、茅縛り体験」

屋根を葺くためには、大量の茅を確保する必要がある。西都市と西米良村の境にある烏帽子岳の茅を使うため、茅場の見学と蔓(かずら)を使った茅縛りの体験を行った。

- ・第4回 2015年11月15日(日)

『講座「古代住居を学ぼう」』

当館学芸員が、画像や模型などを用いて、これまでの発掘事例を紹介し、人間の住処・住まいについて学んだ。その後、古代復元住居の現況確認をした。

- ・第5回 2015年12月6日(日)

「銀鏡神楽見学」

茅刈り作業の予定で集合したが、前日からの雨のため茅場の状況が悪く、作業は中止とした。そのため、毎年12月14日に銀鏡神社で奉納される国の重要無形文化財である「銀鏡神楽」の通し稽古を見学した。

銀鏡神楽についての概要説明を聞いた後、神楽殿に移動して稽古を見学した。普段は目にするのできない貴重な体験となった。

- ・第6回 2016年2月7日(日)

「茅の移動・収納」(写真8・9)

12月中に刈った茅は、1か月以上その場で乾燥させていた。茅を茅場から運び出し、大型トラック1台、軽トラック2台に積み込み、改修前の古代復元住居に収納した。

② 2016年度（全6回）

・第1回 2016年7月17日（日）

「説明会、竹の伐採」

2016年度の活動内容の確認するため、説明会を行った。屋根組みの材料となる竹を伐採し、古代復元住居横に搬入した。

・第2回 2016年8月21日（日）

「安全祈願、屋根の解体」(写真10・11)

屋根の改修作業の安全祈願のため、神事を執り行った。その後、前年度から住居内に保管していた茅を移動させ、屋根の古茅を全て取り除く作業を行った。作業には、考古博物館少年団の団員も加わった。最終的に、屋根の骨組み解体まで行った。

・第3回 2016年8月27日（土）

「屋根の組立て」(写真12)

昨年度伐採し、樹皮をはがした木材(ヒノキ)を屋根に上げる作業をした。参加者は、高所での作業は危険なため、解体した木材の整理や釘抜き等を行った。

さらにこの木材を使って、簡単な椅子やテーブルを製作した。

・第4回 2016年9月10日（土）

「茅葺き作業①」

茅葺きの基準となる四隅の茅(シュギ)の1段目の取り付けから開始した。シュギの取り付け後、平側と妻側の4つの面に対し、軒となる下側から順に茅束を縛り付けていく。一面の一段ごとに茅束を取り付けた後、上から竹で押さえ、骨組みに縛り付けて葺きあげていく。2段目まで葺きあげた時点で、昨年度に用意した茅を全て使い切ったため、再度、冬場に茅刈りを行ってから、作業の続きを行うこととした。

・第5回 2017年2月2日（木）～3月1日（水）

「茅葺き作業②」

12月に新しく刈った茅を搬入し、茅葺き作業の続きを行った。実働日数12日間、指導者を中心に、延べ60人の作業となった。

・第6回 2017年3月11日（土）

「落成式」(写真13・14)

古代復元住居の落成式を実施した。無事に完成した

ことを祝う神事やせんぐまき(餅まき)を行った。改修作業の参加者も数多く参列し、完成を祝った。

※「せんぐまき」=お餅やお金をまいたりすること。

【散供】さんぐ = 米や銭をまき散らして神仏に供えること。また、穢(けが)れや悪霊などを祓(はら)うために、米や銭をまくこと。宮崎県の方言。

4 茅葺き作業の工程（主な8工程）（写真15～22）

① 基準となる四隅(シュギ)が最初の作業となる。シュギのために、茅を直径30cmほどの束にし、4束をひとつに縛る。それらを3つ組み合わせる。

② ①の茅束をシュギに縄で縛り付け、さらに青竹で押さえつけて固定する。

③ シュギの取り付け後、平側と妻側の4面に茅束を骨組みの竹や木に縛り付けていく。縄は、使いやすいように巻きなおして腰にぶら下げておく。

④ 茅束や押えの竹を骨組みに縛り付けるときは、内側から竹の「ハリ」を使って、縄を通していく。内側と外側の人との連携作業である。内側のハリを扱う人のことは「はっどん」と呼ばれる。

⑤ 各面の一段ごとに茅束を縛り付けた後に、その上から丸太で茅を押さえっていく。これが、足場にもなり、上の段の作業をする際の基準線にもなる。

⑥ 縛り付けた茅束をさらに押し込み、整えるために、「シャヅチ」という道具で叩く。

⑦ 一番上の棟木まで茅束を被せた後、茅を押さえるために、太めの丸太をのせて固定する。

⑧ 仕上げに、茅を刈りそろえる。上から順に刈りそろえ、足場の丸太を外しながら下りていく。

5 改修後の古代復元住居（写真23）

・ 公開の方法

屋外展示の一環として、扉を開放して、内部も見学できるようにする。公開時間は、古墳群の見学施設に準じて、博物館開館日の午前10時から午後5時までとする。

・ 維持管理

「火入れ(住居内で火を燃やすこと)」を1週間に1回程度、公開時間中に行う。「火入れ」により、茅葺き屋根に虫がつくのを防ぎ、茅にタールを付着させることで、防水性を高め、茅葺き屋根を長持ちさせることができる。(写真24)

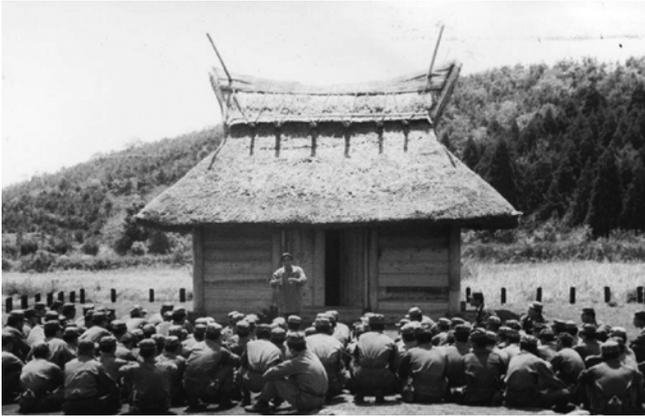


写真1 建設当初の古代復元住居（1968年）

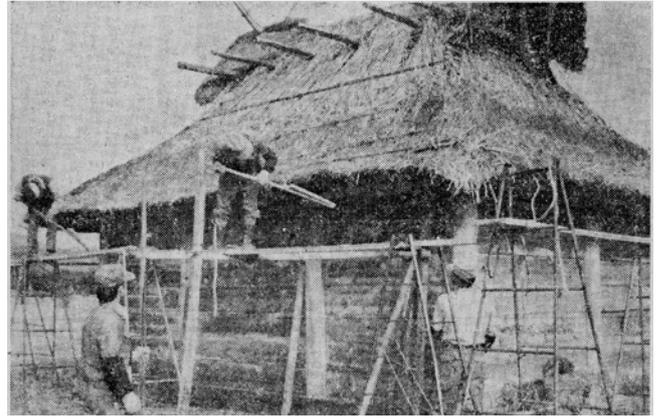


写真2 1回目：宮崎日日新聞（1974年12月5日付）より



写真3 2回目：改修前



写真4 2回目：改修後



写真5 3回目：古代生活体験館建設に伴い現在地に移設



写真6 斜面地でのヒノキ皮剥ぎ作業



写真7 狩人飯（かりんどめし）



写真8 茅の積み込み



写真9 茅の収納



写真10 神事（安全祈願）



11 屋根の解体写真



写真12 屋根の組み立て



写真13 落成式（神事）



写真14 せんぐまき（餅まき）



写真15 茅葺き作業工程①



写真16 茅葺き作業工程②



写真17 茅葺き作業工程③



写真18 茅葺き作業工程④



写真19 茅葺き作業工程⑤



写真20 茅葺き作業工程⑥



写真21 茅葺き作業工程⑦



写真22 茅葺き作業工程⑧



写真23 完成した古代復元住居



写真24 火入れ

宮崎県立西都原考古博物館研究紀要第14号 執筆者紹介

(五十音順)

沖野 誠 (OKINO Makoto)

宮崎県立西都原考古博物館 学芸普及担当 主任主事

倉木真由美 (KURAKI Mayumi)

宮崎県立西都原考古博物館 整理専門員

高椋 浩史 (TAKAMUKU Hirofumi)

土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム 学芸員

田中 敏雄 (TANAKA Toshio)

宮崎県立西都原考古博物館 学芸普及担当 主査

谷口 晴子 (TANIGUCHI Haruko)

宮崎県立西都原考古博物館 学芸普及担当 主査

永友 良典 (NAGATOMO Yoshinori)

宮崎県立西都原考古博物館 学芸普及担当 専門主事

東 憲章 (HIGASHI Noriaki)

宮崎県立西都原考古博物館 学芸普及担当 主幹

藤木 聡 (FUJIKI Satoshi)

宮崎県立西都原考古博物館 学芸普及担当 主査

堀田 孝博 (HORITA Takahiro)

宮崎県立西都原考古博物館 学芸普及担当 主査

本部 裕美 (HONBU Hiromi)

宮崎県立西都原考古博物館 整理専門員

吉村 和昭 (YOSHIMURA Kazuaki)

奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 学芸課 学芸係長

宮崎県立西都原考古博物館研究紀要 執筆要項（投稿規定）

1 執筆者

宮崎県立西都原考古博物館職員及び共同研究者とする。当館からの依頼原稿についてはこの限りでない。（なお、執筆原稿の内容や頁数によっては、掲載しない場合もある。）

2 執筆内容

- (1) 研究論文・資料紹介 (2) 調査報告 (3) 研究ノート
(4) 体験・実験講座成果報告 (5) その他、編集担当者が適当と認めたもの

3 原稿

- (1) 締切り 1月末日
(2) 提出 データ入稿を原則として、プリントアウト原稿を添付すること。なお、挿入画像はJPEGもしくはpsd形式とする。
(3) 校正 2回

4 執筆要項

(1) 体裁

- ・左綴じ、A4版、横組み、2段組、25文字×43行（2,150字）、フォントはMS明朝体10p。
- ・図版（図・表・写真）はキャプションを含め、原則として縦24.0cm、横16.2cm以内に収める。

(2) 表記

- ・題名、副題、執筆者名は、5行以内に収める。
- ・文字は、資料的なもの以外は、原則として現代仮名遣いで新字体とする。
- ・度量衡単位は、cm、kg、m²のように記号を、数量は算用数字（2桁以上半角）を使用する。
- ・資料キャプションの文字体はゴシック体・センター寄せとする。
- ・年号は原則として西暦で表記し、和年号が必要な場合は（ ）で併記する。

例：2014（平成26）年

- ・章番号に「.」を付けない。（1. → 1）

(3) 註、引用、参考文献

- ・MS明朝体8pで記載する。
- ・本文末尾に一括記載する。文末に【引用文献】もしくは【参考文献】
- ・註は、本文中の引用箇所には、文章の右肩に小括弧を付した番号を記入し、文章末尾にまとめて説明文を記載する。

例：□□¹⁾

【註】

1) ○○○

- ・引用、参考文献は、著者名、発行年、「論文名」、『書名』、巻号数、発行所、（できれば）頁数を明記する。

（例：高橋克壽 1993「西都原171号墳出土埴輪について」『宮崎県史研究』第7号、宮崎県、39～58頁）

(4) その他

- ・完成時に、本紀要のpdfファイルを作成する。
- ・抜き刷りはしないが、執筆者が希望する場合、執筆者と印刷業者との交渉により行うものとする。

宮崎県立西都原考古博物館研究紀要 第14号

BULLETIN

Saitobaru Archaeological Museum of Miyazaki Prefecture

Vol.14

2018年3月16日

編集・発行：宮崎県立西都原考古博物館

〒881-0005 宮崎県西都市大字三宅字西都原西5670番

TEL：0983-41-0041 FAX：0983-41-0051

印刷：田中印刷有限会社

〒880-0022 宮崎県宮崎市大橋3丁目110番地

TEL：0985-28-4724 FAX：0985-20-9285



Saitobaru Archaeological Museum of Miyazaki Prefecture

西都原
考古
博物館